

(表紙)

追 舊 記 雜 錄 卷百三	繼 豐 公	自寬延四年七月
	重 年 公	至寶曆元年十二月

915 繼豐公御譜中

於^三東叡山^一修^二
(舎志)
 有德院殿中陰之法事、故繼豐以^三使者^一今茲七月朔日獻^二
 納御香奠白銀三枚^一矣、

916 正文在文庫

御札令披見^外、
 大御所様御不例御養生不被爲叶被遊蕩御^外段被承之、被
 絕言語由得其意^外、依之
 公方様御機嫌以使者被相伺之^外、被爲替御儀無之^外間可

917

御心易^外、紙面之趣各申談可及言上^外、恐々謹言、

(朱)
 「寬延四年」
 七月九日
 酒井左衛門尉
 忠寄判

松平大隅守殿

全上

御札令披見^外、

大御所様蕩御之段被承之、被絕言語由得其意^外、依之
 大納言様御機嫌以使者被相伺之^外、被爲替御儀無之^外間
 可御心易^外、紙面之趣可及言上^外、恐々謹言、

(朱)
 「寬延四年」
 七月九日
 秋元但馬守
 涼朝判

松平大隅守殿

918

全上

御札令披見^外、

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之候、御安全御儀
 外間可御心易^外、紙面之趣各申談可及言上^外、恐々謹言、

(朱)
 「寬延四年」
 七月十日
 酒井左衛門尉
 忠寄判

松平大隅守殿

於東叡山修

有徳院殿中陰之梵儀、故今茲七月朔日重年使家臣北郷八

右衛門資矩獻納香燭三十枚于

尊靈前、

正文在文庫

御札令披見叶、

大御所様御不例御養生不被爲叶、被遊

薨御叶段被承之、被絶言語由得其意叶、依之

公方様御機嫌以使者被相伺之叶、被爲替御儀無之叶間可

御心易叶、紙面之趣各申談可及言上叶、恐々謹言、

〔卷〕
「寛延四年」

七月九日

酒井左衛門尉

忠寄判

松平薩摩守殿

御札令披見叶、

大御所様薨御之段被承之、被絶言語由得其意叶、依之

大納言様御機嫌以使者被相伺之叶、被爲替御儀無之叶間

可御心安叶、紙面趣可及言上叶、恐々謹言、

〔卷〕
「寛延四年」

七月九日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

閏六月八日付にて文下され叶、

大御所様御養生叶ハせられず、去月廿日 薨御の御事言

語に絶思しめし叶由、是により

公方様御機嫌御伺被成叶御文の趣、よろしく申あけまい

らせ叶、かしく、

〔卷〕
「寛延四年」

梅その

松しま

うら尾

たきつ

さえた

松平

薩摩守様

御返事

人々御中

閏六月八日付にて御ふミ下され叶、

大御所様御養生叶ハせられず、去月廿日 薨御の御事言

繼豊公御譜中

寛延四年七月十日 上使若年寄小出信濃守英智到芝邸

賜

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之候、御安全御儀
外間可御心易外、紙面之趣各申談可及言上候、恐々謹言、

(奉) 一寛延四年」 七月十日

松平薩摩守殿

酒井左衛門尉

忠寄判

語に絶思しめし由、是により

大納言様御機嫌御伺被成り御文の趣、よろしく申あけり
へく外、かしく、

(奉) 一寛延四年」

梅その

松平

御返事

松しま

薩摩守様

人々御中

うら尾

たきつ

さえた

重年公御請中

今茲七月十日 上使若年寄小出信濃守英智來芝邸、賜

有徳院殿遺物脇刀治工信國、長八寸七分半、表劍三結裏刀總並、
鑷並添銅但槍之内浮梵字有之、代金二十枚 一腰于重

年、同治工尻懸則長、長八寸三分半表裏、
裏懸原者、但無銘代金三十枚 一腰于繼豊、九十賀和歌御手

鑑一帖于菊姫上、故島津加賀守忠雅代重年・繼豊二迎

上使二接二待之二、請二大書院二謹承二 上旨、而使馬廻川

上喜藤太親毗、新番荒武藏右衛門祐壽及歩士輕卒護二送

焉、重年拜戴禮謝事記二夫譜中、

同日使三番頭菱刈孫兵衛實詮到二若年寄之各亭一、奉三禮謝二焉、

十六日到二執政之各亭及 上使英智之亭一、奉三禮謝二焉、

則報三懇篤之辱於江府一、於茲忠雅代三繼豊一、同年九月二

月二十一日繼豊謹拜二戴 恩賜寶刀二延日拜御者、以有繼豊女子、
於貞同月十一日死去之故也

送之上、同年八月十三日到二薩府一、同

川上喜藤太親毗、新番荒武藏右衛門祐壽及輕士歩卒護

刀於三薩國一各拜戴而可奉謝之説於 上使上之也、而使馬廻

邸一、請二大書院一、謹承二 上旨、則忠雅奉レ演下 恩賜兩

薩國一、故島津加賀守忠雅代三重年・繼豊二迎二 上使於芝

同礼懸則長、長八寸三分半表裏、
同護原者、但無銘代金二十枚 一腰於繼豊一、時重年・繼豊俱在二

有徳院殿遺物脇刀信國長八寸七分半、表劍三結裏刀總並、
添銅但槍之内浮梵字有之、代金二十枚 一腰於重年、

同礼懸則長、長八寸三分半表裏、
裏懸原者、但無銘代金三十枚 一腰於繼豊、九十賀和歌御手

鑑一帖于菊姫上、故島津加賀守忠雅代重年・繼豊二迎

之、同月十六日發三東武一經三東海・山陽・西海之驛、同年八月十三日到三薩府、同年九月二日重年拜三戴 恩賜

寶刀拜戴及遲延者、以繼豐之女子、同年八月十一日死去之故也 既而於三江都三忠雅代三重年、

同年十月四日詣三執政及 上使英智之弟三奉禮謝焉、同日

家老市來左中政方亦詣三若年寄各之弟三奉禮謝焉、繼豐拜

戴禮謝之事記三夫譜中、

927 重年公御譜中

正文在文庫

鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(宋) 寛延四年 七月十一日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平薩摩守殿

928 全上

鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(宋) 寛延四年 七月十一日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

929 繼豐公御譜中

正文在文庫

鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(宋) 寛延四年 七月十一日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

930 全上

鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(宋) 寛延四年 七月十一日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

931 全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(宋) 寛延四年 七月十二日 松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

932 全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露候處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「寛延四年」七月十二日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

933 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、五月八日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞候、恐々謹言、

〔采〕
「寛延四年」七月十二日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

934 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿九日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

〔采〕
「寛延四年」七月十二日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

935 重年公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段

之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「寛延四年」七月十二日 松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

936 全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段

之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「寛延四年」七月十二日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

重年公御譜中

扣正文在右筆所

琉球中山王當正月致病死、繼目申付候段、以別紙御届申上、中山王繼目之節、江戸に使者差上御禮申上先例御座、先規之通被仰付被下度奉願、右付琉球より表尚喜に繼目無相違申付、江戸に使者差上御禮申上度旨先達願越、先王病死之段、當冬大清に申遣筈御座、三年過り得、封王使差渡先例御座、來ル戊年、先封王使待請申考、由申越、前々繼目之節、封王使不請以前江戸に御禮申上儀御座、使者渡海可仕旨當秋申越り様仕度、左より來申夏薩州に使者到着、支度相調次第先例之通私召連參府仕度、何分、被成御差圖可被下、以上、

〔寛延四年〕七月十三日 御名

緋豊公御譜中

扣正文在家老座

〔朱〕御返答

去ル十日以上使小出信濃守様、爲御遺物

本支被申越、御前殿様達、貴聞候、御脇差去ル十三日相届候共、太守様、隅州様に御脇差一腰宛、菊姫様に御手鑑一帖

御拜領被遊り段、則日飛脚を以申上、御兩殿様方御禮御使札を以被遊御勤り様、上使之御方様御演説有之

付、右外御勤向之儀共相伺可申上旨申越置、御脇差外家箱等取仕立、都を相濟り付、宰領御馬廻川上喜

藤太、新番荒武藏右衛門、御歩行五代喜左衛門・愛甲嘉兵衛并足輕八人被相付、三道中中急、今日差立被

遣、中途入念、就中川渡隨分入念、色、其無用、いたし、佐屋相廻り御定日數無油斷心懸、其

御地に參着り様申含遣、

一御兩殿様御拜領に付御勤之儀、上使之御方様御差圖有之、最早御用番様に奉伺、不及答り得共、

左之通外之御勤奉伺儀に得、御兩殿様方右御勤前條之通御使札を以御勤被遊り様、御差圖嶋津加賀守

殿御承知之由を御留守居、口達、の噂、こ、一通りハ御沙汰申上置、方可宜と存、山澤小左衛門申含

御用番様御取次迄小左衛門相達、左之通御座、

一書附二通

御用番

酒井左衛門尉様

〔忠〕

〔忠〕

壹通ハ

太守様は御拜領ニ付 隅州様より御禮御勤且又 隅州

様に御拜領付

太守様より御禮御勤之伺

壹通ハ

菊姫様は御拜領被遊外付 御兩殿様より御禮御勤伺

右者去ル十日小左衛門參上仕、伺書差出外處御受取置、

追の御挨拶可被成旨、御取次御用人長澤牛兵衛を以被

仰聞外旨小左衛門申出外、

一 右伺序ニ 太守様 隅州様御遺物御拜領御禮之儀者、

上使出信濃守様より嶋津加賀守殿に

御兩殿様に御承知之上御禮御使者ニ被仰上候様ニと

被仰達、加賀守殿御承知被成外旨、御取次右牛兵衛に

相達、右之伺書左衛門尉様に申上外節

御兩殿様御禮之儀御沙汰有之、小左衛門御用人に達

置外趣を、牛兵衛申上外得と些間達之様ニ被思召

外、何れとも明日七時分可罷出外、其砌可被仰聞由、

右御取次ニ被仰聞外付、參上仕外處

太守様 隅州様に

有徳院様御遺物御拜領付、於御國元御承知之上 御兩

殿様御名代を以御禮可被仰上旨、御取次牛兵衛を以被

仰聞外、左外牛兵衛申外ハ、昨日小出様より加賀

守殿御承知之趣と致相違候ニ付、被仰聞事之由申聞せ

外付、委細奉畏外、則御國元に可申上旨牛兵衛迄相達

置外旨、小左衛門申出外、

一 右付の者小出様筋達ニ御演説被成外歟、又者加賀守

殿御聞達ニ有御座外哉、左衛門尉様ニハ右通被

入御念爲被仰聞上ニ外ハ、彼御方御間達ニ有御座

有間敷とハ相見得申外得共、此儀及決る其筋とも治定

難仕外故、御留守居共申含、星野久務に爲致内談、

與御右筆平田半之丞様に久務方誠之内ニ有承合させ

外處、於御國元御承知之上、以御名代御禮被仰上外筋

ニ最初相極有之外旨、半之丞様致承知外段久務方

別紙手紙之通、赤松甚右衛門に申越外由申出外、此段

申越外條

御兩殿様被達 貴聞被申越外ハ、

御兩殿様御名代御一門様方之内に御頼被仰入外様首尾

可仕外、別爲重立儀ニ外間、御老中様若御年寄様方

上使之御方様に 御名代之御方様御廻勤被遊、御側衆

に老物頭御使者ニ有御禮可被仰上哉と奉存外得共、猶

又松平加賀守様・松平陸奥守様御方承合(宗村)儀可仕外、右

前條之次第加賀守殿江者相決外趣跡首尾ニ申上置外、

一 御在國之節御拜領物被遊、以

(宗)「本文京大坂江御知之儀先年

御名代御禮被仰上外節、京都諸司代・大坂御城代江如

何御勤被遊外哉、於爰元者先例見當不申外、御承知之

大御所様より御腰物、慈徳院様御拜領之節為御知有之候儀書留ニ不相見得

候付此節度御知せ及聞敷候、乍然、兩州様御府中ノ儀候間、今ニ往其元

上於京・大坂者、御留守居御使者ニ御書等被進外様

被相札及御知候ニ候ハ、其通有之其首尾可被申上候、右ニ付而御使者

可有御座哉、於其儀者長崎江及同様之首尾ニ可有御座

上り或其元同役申越させ候哉、何分ニ爰被申談被相同被致首尾ニ可有之外、

一 書附二通 但銘々御付紙有

(忠) 酒井左衛門尉様

右より御達可被成儀有之外間、去ル十一日可罷出旨御

用人方切紙到來、小左衛門罷出外處、前條 太守様江

(宗)「本文、御兩殿様御書其元調被仰付、御日附之儀者

御拜領ニ付 兩州様御拜領物御勤有之候同日可被仰付候、御案文相返申候

太守様方御禮且又菊姫様江御拜領ニ付、 御兩殿様方

御勤伺御飛札可被差越旨、御付紙を以被仰渡外段小左

衛門承知仕、右之通御渡被成外旨申出外間、別紙伺書

二通、御留守居首尾書一通差越外間

御兩殿様被達 貴聞、御飛札被差越外ハ、日積考之

上差出外様可仕外、佐々木様御案文貳通差越申外、西

尾様ニ表別紙之通向後御勤有之儀ニ外故、御格書を以

御勤可有御座儀と存申外、御案文ニ委細記有之外、

一 菊姫様江御拜領ニ付、表立之御禮之儀、先便ニ申越外

通御先例を以

御守殿江奉伺、御差圖之趣有之外得共、陸奥守様御方

(伊達宗村)

承合外處 深姫様よりハ御用番様江不及御禮、御遺物

方御懸り松平右近將監様并 上使之御方様迄ニ御使

者御禮被仰上候様御差圖有之、其通被成御勤外由御留

守居申出外付

菊姫様より及御同様ニ可被遊御勤儀と奉存外付、 御

守殿江御沙汰申上、右近將監様并 上使之御方様迄ニ

添御用達御使者ニ御禮被仰上相濟申外、

一 御兩殿様御拜領ニ付る者、以御使者

(宗)「本文御知せ之儀者、御使者等何申越候、長崎御奉行御儀

日光宮様・御三家様方・御一門様方其外御心安御方様

江、爲御知等之儀、今日便ニ爰元御使者番より其元江奉

見之書候

伺外様申渡外、御隣國江及御知せ可有御座哉、何分ニ

爰被申談ニ可有之外、

(宗)「右之通及御返答候、御案文外被差越候書付印鑑

右申越外、以上、

一枚留置候、以上」

但 別紙印鑑壹枚別紙五通差越申外、

「寛延四年」七月十六日 平田鞆負(正體)

「八月廿一日」

(采) 嶋津殿(主)
(下) 嶋津殿(主)
 伊勢兵部殿(貞起)
 義岡相馬殿(久)
 嶋津主鈴殿(久)
 鎌田典膳殿(政)
 河野八郎左衛門殿(通典)

全上
正文在文庫

今度以上使御遺物御拜領付る者御先例及無之儀、先
 年(家宣書左衛門) 天英院様薨去之節 太守様 薩州様 總州様 信證
 院様に御遺物御内々御拜領被遊、其節ハ 二御丸御
 年寄衆より之御口上書被相添、 二御丸添番宰領の御
 拜領有之、 太守様方表立の御禮 薩州様御名代の御
 御禮被仰上、 薩州様御自身之御禮及被仰上、 總州
 様より老御飛札の御禮爲被仰上事、凶事之儀に故
 其節老御歡沙汰等書留一向不相見得共、此節之儀及
 御遺物之儀ハ御座り得共、以上使御家老初の御拜
 領被遊、乍御在國御名代の御禮、以來御家格に相掛、
 別る爲重立儀、於御家中老末迄及難有奉存儀に間、凶

事ながら御家格に相懸儀付申談、 姫君様 菊姫様に御
 祝儀申上りぬ者、如何可有御座哉之段、則日石川傳太郎
 殿に取合付、遂内談り處、別る爲重立儀に間、口上
 之内屹御祝儀とハ不申上、以上使御拜領物被遊恐悦奉
 存り段申上可然旨致承知付、 御前様御方老則日御内
 々右同斷申上置、今日御祝儀申上り、詰中之諸士及
 今日、明後十七日兩日之内 御兩殿様に御祝儀申上り様
 申渡置、右付ぬ於其元及御祝儀申上儀ハ、私共よ
 り御祝儀申上り、書狀差越申り間、何分及宜頼存り、以
 上、

(采) 「寛延四年」 七月十六日(采) 平田鞆負

(采) 嶋津主殿殿
(下) 嶋津主殿殿
 伊勢兵部殿
 義岡相馬殿
 嶋津主鈴殿
 鎌田典膳殿
 河野八郎左衛門殿

「御返答」

本文致承知 御兩殿様達 貴聞候處御遺物之儀に故、

御祝儀申上不及、御當人様迄ニ大御目(付脱)以上之御役

々并御側廻之面々迄御遺物御拜領被遊、恐悦奉存存り
段申上存り様被仰出存り付、於爰元其通いつれも申上存り、

各より御祝儀書狀を以被申上存り得共、右通被 仰出

り付、拙者共同様 御兩殿様達 貴聞存り、御女中様

に及各より御祝儀狀被差越存りへ共、其儀不及存り故書

狀都存り相返存り、 姫君様 菊姫様存りにハ御遺物御給恐

悦奉存存り由、此節大御目付以上之御役々より書狀を

以申上存り、以上、

九月六日

(本文書ハ九四〇号文書ノ行間朱書ナリ)

繼豊公御譜中

正文在文庫

有徳院様御法事御執行付存り、以使者御香奠被獻存之候、於

東叡山奉納之事存り、右之趣及言上存り、恐々謹言、

〔寛延四年〕

七月廿日

松平右近將監

武元判

松平大隅守殿

重年公御譜中

正文在文庫

有徳院様御法事御執行付存り、以使者御香奠被獻存之候、於

東叡山奉納之事存り、右之趣及言上存り、恐々謹言、

〔寛延四年〕

七月廿日

松平右近將監

武元判

松平薩摩守殿

重年公御譜中

扣正文在家老座

以飛札致啓上存り、各様弥御堅固可被成御勤珍重奉存存り、

然者先達存り當領宮崎郡長峯村百姓共、其御領分存りに罷越存り

付、

公儀存に御達及可被成哉、江戸表御留守居中より、此方留

守居之者存に御對談可有之旨被仰聞存り付、江府存に及申遣置

候處、去月十二日御留守居中存に留守居之者及御熟談、御

公達被成間鋪旨相決存り由申越存り、彼是御世話相成、萬事

無滞相濟忝致大慶存り、右之趣得貴意度如此御座存り、恐惶

謹言、

〔寛延四年〕

七月廿八日

内藤(政樹)主税

島津主殿様

伊勢兵部様

義岡相馬様
嶋津主鈴様
鎌田典膳様
參人、御中

〔右之書中朱書ニテ左之通〕

御札致拜見外、弥御堅固珍重存外、先其御領宮崎郡長
峯村百姓共當領口入來外儀、公邊不及御屈筋於江戸
相決外段被示聞趣入御念儀存外、恐惶謹言、

八月三日

鎌田典膳
嶋津主鈴
義岡相馬
伊勢兵部
島津主殿

〔政樹〕
内藤主税様

重年公御譜中
正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕

「寛延四年」
八月四日

松平右近將監
武元判

本多伯耆守
正珍判
酒井左衛門尉
忠寄判
堀田相摸守
正亮判

松平薩摩守殿

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕
「寛延四年」

八月四日

松平薩摩守殿

秋元但馬守
涼朝判

全上

國許到着爲御禮、以使者芭蕪布廿端并御樽肴被獻之外、
遂披露外處

御前口被召出、入念外段御喜色之御事候、恐々謹言、

〔卷〕
「寛延四年」

八月五日

松平右近將監
武元判
本多伯耆守
正珍判

全上

松平薩摩守殿

酒井左衛門尉

忠寄判

堀田相摸守

正亮判

國許到着爲御禮、以使者御樽肴被獻之外、遂披露外之處

御前に被召出、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔寛延四年〕
八月五日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

重年公御譜中

御札令披閱外、今度初五御暇、路次無恙六月廿一日國元

到着之由玆重外、依之入御念外段欣然之至存外、恐々謹

言、

〔未〕
〔寛延四年〕
八月九日

尾張中將

宗睦判

薩摩少將殿

御報

扣正文在家老座

〔未〕御返答

大御所様御遺物 太守様

隅州様 菊姫様御拜領被遊外付、御禮之儀 上使小出

信濃守様方以御使者可被仰上旨被仰達、右之趣餘事之

序ニ山澤小左衛門より酒井左衛門尉様御用人迄、噂コ

とクニ申達置外様被申付、其段致演説置外處、左衛門

尉様被聞召

御名代を以御禮被仰達外様、御取次を以被仰聞、

上使より被仰達外筋と致相違外付、内々去方に被聞合

外處、以 御名代御禮被仰上外筋ニ最初より相極有之

外旨被仰聞外由、委曲被申越趣達 貴聞外處、御在

國之節屹御拜領物等有之外節、御名代ニ御禮被仰

上外儀無之外付、御使札御勤被成度 思召ニ外、此譯

老 大御所様御内居爲御祝儀、延享二五十一月 隅州

様 慈徳院様御腰物被遊御拜領外、隅州様ニ老御在

府ニ御直御勤外得共、御病身故 御名代嶋津加賀守

殿兩御丸に御登 城御禮被仰上置、直ニ御老中様 上

使之御方に御廻勤被成、若御年寄様方に老御家老御使

者、御側衆に老物頭御使者ニ御禮被仰達外、

慈徳院様ニ老 御在國故、御禮之儀御用番様に被相伺

ハ、御使札を以御勤被成リ様御附紙を以被仰渡、其通御勤有之、此節及御同様之御勤ニ有リ、上使より御禮之儀被仰聞リ上なから、右御勤例書を以左衛門尉様に相伺ハ、御差圖之被成様及可有之之處、小左衛門右通、上使ハ御禮之儀被仰聞候趣、御用人迄傳ことくに申上置ハ儀、不事足儀ニハ故

慈徳院様御勤之通、御使札を以御勤被成度被、思召上ハ、最早左衛門尉様より御差圖爲被成儀ニ有リ得共、

唯今より相成儀ハ、御使札を以御勤被成度被思召上、先御使者ハ被差越候趣を以、御内々堀田相摸守様に御内談被仰進、思召次第御勤可被成旨被仰出ハ、右躰先例及有之ハ、最前左衛門尉様に申上様不事足趣を以委ク御留守居に被申合、彼御方御用人淺井八兵衛

に取合、可成程御使札之方ニ不差障様、内談可被申付ハ、相摸守様被聞召、最早左衛門尉様御差圖ニ有リ故、難被成儀ニハ、御名代御頼御禮可被仰上ハ、御老

中様方、上使之御方に及御廻勤御頼可被成ハ、若御年寄様方に老御家老御使者、御側衆ハ老物頭御使者ニ有御禮可被仰達ハ、御使札御勤相成ハ、御書御案文佐々木様に得御差圖、其元御判紙調被仰付ハ、御老中

様、上使之御方并若御年寄様其外之御役人ハ被遣ハ御書之儀、慈徳院様右御腰物御拜領之節被遣ハ通、御書其元調ニ有可被遣ハ、太守様ニ老當分御忌中故、御忌明ハ節、右御勤之儀可申越ハ間、其節御勤有之ハ様首尾可被致ハ、

隅州様ニ老御忌明ハ付、今日御頂戴被遊、御名代御勤ニハ、今日便被仰越ハ日積を以、嶋津加賀守殿御同氏淡路守殿之間ニ御頼可被遊旨被仰出ハ間、其通首尾可被致ハ、御老中様其外御役人様方に、隅州様ハ御使者之儀先格之通御使者柄可被申付ハ、御使札之筋ニ罷成ハ、今廿一日之御日付ニ有於其元御判紙調被申付可被差出ハ、御役人様方に及御書右同斷、其元調ニ有可被差出ハ、

一 大御所様より御腰物御拜領之節、御使者之儀、其元御馬廻御取仕立御使者ニ有ハ、此節御勤御使札罷成ハ、御使者柄之儀、右例之通其元御馬廻御取仕立御使者可被申付ハ、

一 御内證御勤之儀、且又、隅州様御拜領物付ハ、太守様より御禮、

太守様御拜領物付ハ、隅州様ハ御禮、

(朱) 本文被申越趣承知仕、隅州様御文登元調申付、八月廿一日之御日附ニ而先有廿六日、御守殿御案文ニ而

繼豊公御譜中

被差出、御勤相替御返事相下り候、其段、別紙ニ委菊姫様御拜領物付の、御兩殿様御勤之儀付の、別紙朱書を以、御返答申越下、

右申越下條被申談、首尾可被致下、

日光宮様・御三家様方・御一門様方、其外御心安御方、様方に御知之儀者、別紙朱書御返答申越下、此節者

隅州様御勤迄首尾可被致下、

太守様御勤之儀者、御忌明下節可申越下、以上、

〔朱〕
「寛延四年」
八月廿一日

〔十月四日〕

河野八郎左衛門

鎌田典膳

鳴津主鈴

義岡相馬

伊勢兵部

嶋津主殿

〔朱〕
平田鞆負殿

〔下〕
市來左中殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

東叡山

寛延四年八月二十六日、執政松平右近將監武元傳下可獻ニ

銅燈籠於、有徳院殿尊前ニ之、命上、繼豊在、國領レ命、時

繼豊爲ニ致仕一、先レ是、如レ斯時當家無ニ致仕人一、乃不レ

知レ獻ニ幾基一也、然繼豊雅爲ニ

將軍家之姻家一、其親異ニ於他一、以故雖レ無ニ先規一齊ニ獻數

於家統ニ可レ獻ニ兩基ニ乎、重年同年十月六日稟ニ此情於執

政武元ニ蒙ニ允容一、而遂使獻兩基矣、至ニ翌寶曆二年五月十

三日一收工獻畢、其銘記ニ于左、

奉獻銅燈籠 兩基

武州東叡山

有徳院殿 尊前

寛延四年辛未六月二十日

薩摩大隅日向三國主兼領琉球國

致仕從四位上行左近衛中將兼大隅守

源朝臣繼豊

迄出來下様可被致下、以上、

〔寛延四年〕八月

〔卷〕
〔在口裏〕
松平大隅守江

956
全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度於東叡山

有徳院様御法事御執行相濟、閏六月廿八日 御廟所江

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、依之被差越使者外、紙

面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔卷〕
〔寛延四年〕八月廿八日 松平右近將監
武元判

松平大隅守殿

957
継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

大納言様益御機嫌能被成御座、今度於東叡山

有徳院様御法事御執行相濟、閏六月廿九日

御廟所江御參詣之段被承之、恐悦旨尤外、依之被差越使

者外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔寛延四年〕八月廿八日

松平大隅守殿

秋元但馬守
涼朝判

958
重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

有徳院様御法事付外、其方妻女御香奠獻上之儀伺之通相

濟、難有由得其意外、紙面趣各一覽之事外、恐々謹言、

〔卷〕
〔寛延四年〕八月廿五日 松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

959
全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度於東叡山

有徳院様御法事御執行相濟、閏六月廿八日 御廟所江

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、依之被差越使者外、紙

面趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔卷〕
〔寛延四年〕八月廿八日 松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

大納言様益御機嫌能被成御座、今度於東叡山

有徳院様御法事御執行相濟、閏六月廿九日 御廟所に

御參詣之段被承之、恐悦旨尤外、依之被差越使者外、紙

面之趣及言上外、恐々謹言、

〔寛延四年〕

八月廿八日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

全上

東叡山

有徳院様御靈前に銅燈籠可被獻之外、寸法之儀若

常憲院様御佛殿に被獻外通可被心得外、

右來年二月上旬迄出來外様可被致外、以上、

〔寛延四年〕

八月

〔在口蓋〕

松平薩摩守に

重年公御譜中

今茲八月二十六日執政用松平右近將監武元、呼江都留守

居役山澤小左衛門盛福於其第一、傳之可獻銅燈籠于

有徳院殿尊前之命甲、重年在薩國奉其命、至翌寶曆二年二月十日收工、同年五月十三日獻備銅燈籠

兩基一矣、其銘記于左、

奉獻銅燈籠

武州 東叡山

有徳院殿

尊前

寛延四年辛未六月二十日

薩摩大隅日向三國主兼領琉球國

從四位下行左近衛少將兼薩摩守

源朝臣重年

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間

可御心易外、隨力干鯛一箱被獻之、各申談遂披露外處、

一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寛延四年〕

九月六日

酒井左衛門尉

忠寄判

松平大隅守殿

965 全上

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲堀田相摸守可述外也、

〔朱〕
〔寛延四年〕

九月七日



松平大隅守殿

966 全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寛延四年〕

九月七日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

967 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、隨方干鱸殘魚一箱被獻之外、各申談遂披露

外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕
〔寛延四年〕

九月六日

酒井左衛門尉
忠寄判

松平薩摩守殿

968 全上

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲堀田相摸守可述外也、

九月七日



薩摩少將殿

969 全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕
〔寛延四年〕

九月七日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

970 重年公御譜中

正文在福昌寺

長者堀關布金地創建梵刹、忝示來今玉龍、曾臻獻水祥

鎮衛叢林、流及浩却祗苑稀杖莊樽孰願寶坊、膺選庭柏

欲抽太平山興國禪寺、素禪和尚宗門爪牙、法窟頭角隱

峰遊于淮水、擲錫西天宣監稱乎瀛山、罵祖他日鏡石巖

明現影像、金剛嶺靜巨須彌開不二門、鉗錐有妙密作用

施無盡藏、鐘鼓發鏗□、新聲辨河迦太白玄源談柄振真

梁妙旨、應機廣度隨緣茲留法範、齊平能須興隆僧苗愈

茂

皇祚安寧猶宜祝延邦本益固故疏、

寬延四稔辛未九月十二日

少將重年

971 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間

可御心易外、隨ち干鯛一箱被獻之外、遂披露外處一段之

御仕合外、恐々謹言、

(卷)

「寬延四年」

九月十三日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

972 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間

可御心易外、隨ち干鱈殘魚一箱被獻之外、遂披露外處一

段之御仕合外、恐々謹言、

(卷)

「寬延四年」

九月十三日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

973 全上

一筆令啓達外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座外間、可御心易外、

將亦家督以後歸國弥無吳在之外哉、爲 御尋御看一種被

下外、依之如此外、恐々謹言、

(卷)

「寬延四年」

九月十九日

松平右近將監

武元判

本多伯耆守

正珍判

堀田相摸守

正亮判

松平薩摩守殿

今茲九月十九日

大樹家重公賜_二重年佳肴_一駐十、執政本多伯耆守正珍召_二家

臣山澤小左衛門盛福_一江府留、附_二執政宿次奉書及正

珍驛路之證印_一授_二之、是因_二先規_一、所以賀_二重年襲封之

後始賜_レ告還_レ國、且以存_レ問_レ之也、使_二家臣比志島孫左

衛門國泰_一馬、谷山孫右衛門通音_一番新、其外步士二人・輕卒

六人警_レ衛_レ之、即日發_二江都芝邸_一、不_レ舍_二晝夜_一、經_二歷

東海・山陽・西海之三道_一、十月十五日到_二著薩府城_一、重

年乃拜_レ戴_レ之、同日使_二家臣山本利兵衛秀命_一新番・調所八

左衛門恒堅齋_一重年所_レ報_二謝于執政_一之書翰及向所_レ附之

驛路證印_一、往呈_二之執政_一、輕卒六人亦從行矣、此日又使_二

一門島津周防忠紀_一含_二重年之命_一往謝_レ恩賜_レ之辱_一、繼豐亦

以_二重年之辱_一恩賜_一、使_二家臣中江九衛門員張_一與物與_二忠紀_一

共東行以謝_レ之矣、秀命・恒堅等經_二西海山陽東海之三

道_一、先_二忠紀_一十一月十一日著_二江都_一、故如_二先躅_一山澤盛

福教導而候_二執政_一番用松平右近將監武元之第_一、呈_二上重年之

報翰_一、且復_二納正珍之證印_一矣、忠紀亦經_二九州之驛路_一、

到_二豐前小倉_一、駕_レ船著_二大坂港_一、歷_二東海之驛_一、十一月

十八日到_二著江都芝邸_一、同二十一日忠紀候_二執政_一番用酒井左

衛門尉忠寄之第_一、呈_二上重年憑_二執政_一所_レ奉_レ謝_二于

家重公_一之連署_一、候_二執政秋元但馬守涼朝之第_一、呈_二上重

年憑_二執政_一、所_レ奉_レ謝_二于

家治公_一之連署_一、候_二執政西尾隱岐守忠尚之第_一、呈_二上

重年憑_二忠尚_一所_レ奉_レ謝_二于

兩公_一之格書_一、且詣_二執政若年寄各位之第_一、亦呈_二重年

之書_一矣、十二月朔日應_二執政之奉書_一、忠紀登_レ城捧_二

重年之獻物二種・雙樽於白書院_一、奉_レ拜_二調

家重公及

家治公_一奉_レ禮_二謝恩賚之達_一薩府_一、松平周防守康福奏_二達

之_一、忠紀亦親自獻_二上御太刀一腰・御馬代白銀一枚・紗

綾二卷_一、再奉_レ拜_二調

兩公_一、松平康福奏_二達_一、即退_レ營直登_二西城_一、奏者

衆朽木土佐守玄綱出_二席于檜之間_一、捧_二重年之獻物一種

雙樽_一、奉_レ申_二謝恩賜_一、忠紀亦親自就_二朽木玄綱_一、獻_二上

御太刀一腰・御馬代白銀一枚退去、同十二日應_レ徵忠

紀登_レ營、松平武元出_二席于檜之間_一、手自授_二回翰於忠

紀_一、且拜_レ戴_レ紗綾三卷、奏者衆青山因幡守忠知執_二達_一之、

同十三日登_二西城_一松平武元手自授_二回翰於忠紀_一、同十

八日西尾隱岐守忠尚又召_二忠紀於己第_一、而使_二其用人者

繼豐公御譜中

今茲九月十九日

大樹家重公以佳肴尺十及宿次奉書驛路之證印賜于重
 年、即日家臣騎馬士・步行士及輕卒等警衛之、發江
 都、不舎晝夜經歷東海山陽西海之三道、十月十五日
 到著魔城、是因先躅、賀重年襲封之後始賜告歸、
 國而尋問安否也、同日重年爲恩賚之謝使島津周防忠
 紀發鹿城赴江都、是故繼豐亦使家臣頭物中江九右衛門
 員張爲謝重年之拜賜、副忠紀共東行矣、十一月十
 八日到著江都芝邸、同二十一日員張候執政用酒井左衛
 門尉忠寄之第一、呈上繼豐憑執政所奉謝于
 家重公、

家治公之連署二通、又因前件候執政西尾隱岐守忠
 尚之第一、呈上繼豐憑忠尚所奉謝之格書、且詣
 執政若年寄各位之第一、亦各呈繼豐之書牘、勤使价
 矣、十二月十三日徵員張於松平右近將監武元之第一、同
 十八日徵員張於西尾忠尚之第一、各以用人見授與報

全上

扣正文在右筆所

重年公御譜中

〔朱〕佐々木様御案文

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、今度琉球中山王自分繼目之御禮、如前々
 以使者爲申上度旨相同申外處、來年私召連參府可仕旨被
 仰渡、難有仕合奉存外、此段爲可申上呈飛札候、恐惶、

〔朱〕
 「寛延四年」
 九月廿三日

- 堀田相摸守樣
 - 酒井左衛門尉樣
 - 本多伯耆守樣
 - 松平右近將監樣
 - 秋元但馬守樣
 - 西尾隱岐守樣
- 人々御中
- 〔朱〕
 「早飛札候付、如此御座候、右調」
 人々御中

979

全上

御札令披見外、

有德院様御遺物、以上使同氏薩摩守并菊拜領之、難有

由得其意外、紙面之趣

大納言様_ニ及言上候、恐_ク謹言、

978

継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

有德院様御遺物、以上使同氏薩摩守并菊拜領之、難有

由得其意外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐_ク謹言、

〔_奉〕

「寛延四年」

九月廿七日
本多伯耆守
正珍判

松平大隅守殿

980

〔_奉〕

「寛延四年」

九月廿七日
本多伯耆守
正珍判

松平大隅守殿

重年公御譜中

正文在納戸方

御脇差一腰、信國

但御拵書在別紙

右

有德院様爲御遺物、寛延四年七月十日以

上使小出信濃守様

重年公御拜領之、御納戸方_ニ被渡置之條、聊無緩疎可納

置者也、仍如件、

寛延四年九月廿八日

鎌田典膳

政昌判

嶋津主餘

久郷判

義岡相馬

久中判

伊勢兵部

貞起判

嶋津主殿

久柄判

御納戸奉行

全上

寫正文在文庫

寫

鳴津三次郎殿

右元服之願被申出置候、

御直元服被仰付、御太刀一腰・裸背御馬壹疋・白木弓十

張・征矢百本・三種三荷進上可被仰付外、

右之通被仰付外條首尾懸可申渡外、

(卷)

「寛延四年」九月

兵部

繼豊公御譜中

正文在納戸方

御脇差 一腰 尻懸則長

但御捲書在別紙

右

有徳院様爲御遺物、寛延四年七月十日以上使小出信濃

守様 繼豊公御拜領之、御納戸方に被渡置之條、聊無緩

疎可納置者也、仍如件、

扣正文在家老座

(朱)御返答

今般以上使御遺物被遊御拜領

御兩殿様より御禮之儀、鳴津加賀守殿方御尋及無之處

其外被差廻候書付、無留置候、加賀守殿、御名代御勤付前御挨拶之儀、

上使之御方様より御差圖有之付、右御勤者最早屹と

不及相同答外得共、外之御勤同序ニ右通

上使之御方様方被成御差圖外段、御留守居より申上置

可相濟儀申談、御留守居に申渡、其通を御用番酒井左

衛門尉様江山澤小左衛門參上任、御取次に相達外處、

左衛門尉様方者、御名代ニ御禮被仰上り様御差圖被

成、御勤向相替外付、其譯去方様に誠之内ニ承合

全上

御納戸奉行

寛延四年九月廿八日

鎌田典膳

政昌判

鳴津主鈴

久郷判

義岡相馬

久中判

伊勢兵部

貞起判

鳴津主殿

久柄判

ハ筋を及委曲申越ハ處、被達 貴聞、御在國之節御拜領物ニ付、以 御名代御禮被仰上ハ儀無之ハ、且 上使之御方様より被成御差圖ハ上なから、最早御用番様ハ有徳院様御隱居御祝物御拜領之例書を以相伺候ハ、御差圖被成様及可有之處、不事足り付、右之旨趣を以堀田相摸守様ハ御内談被仰進相成儀ニハ、御使札御勤被遊度被思召上ハ付、御使者を及被差越ハ趣を以、淺井ハ兵衛ハ御留守居ニ得と爲致内談、相摸守様思召次第御勤被遊度段承知仕付ハ付ハ、赤松甚右衛門儀兼ハ相摸守様ハ御目見を及被仰付置、御内用之儀共分ハ甚右衛門ニ被仰達事ハ得者、甚右衛門ハ申含差越答ハ得共、其節甚右衛門病氣ニハ參上不相叶、小左衛門ニ者最前より之次第及有之ハ故、佐久間源太夫ハ被申越ハ旨趣委曲申含、猶又甚右衛門小屋ハ源太夫・小左衛門ニ及差越申談させハ上、先月十五日相摸守様ハ源太夫罷出、ハ兵衛ハ得と申込ハ筋ニ申付遣ハ處、ハ兵衛儀折節相摸守様御内用有之、取逢ハ儀不相叶ハ故、御用人倉次甚太夫ハ發端方之次第委申込、此節御使札御勤被遊度思召之段具ニ遂内談ハ處、甚太夫一存迄ニハ者何れの筋難申聞ハ聞、ハ兵衛并其外之御用人中ニ

及申談ハ上、何分之譯可申聞旨、甚太夫方致承達ハ段、源太夫申出置ハ、然處則日甚太夫手紙を以致内談置ハ一件、御用人中申談ハ迄ニハ者否之儀及難決ハ故、御序を以相摸守様ハ得と申上置ハ、相究趣追ハ可被仰聞旨申越ハ、左ハ同十九日書時迄之内勝手次第可罷出旨申來、源太夫參上ハ處、甚太夫罷出、此間御内談之趣相摸守様ハ得と申上ハ處、最御用番様御差圖之通、此節之御勤御名代を以可被成御勤旨被仰聞ハ段、別紙首尾書之通申出ハ、左ハ甚太夫方此儀及誠之内ニハ致咄ハ由ニハ申聞ハ者、右御勤之儀者、御用番様方最初御名代御勤之筋ニ御相談被成、外之御老中様方相摸守様ニ及御承知之上爲被相決置答と甚太夫ニ者相考ハ由申聞ハ段源太夫申出ハ、

一右通 御名代御勤之筋ニ相摸守様ニ及被成御差圖ハ付ハ者、 御名代之御方御登 城ニハ御禮被仰上筋ニ及可有之哉、又者御廻勤迄ニハ可相濟哉、何れ之筋難決ハ付、相摸守様御内ニ得御差圖ハ方可宜と申談、甚右衛門先月廿四日相摸守様ハ參上仕、ハ兵衛ハ取合、別紙首尾書之通ニ致内談ハ處、相摸守様ハ可申上旨承ハ付扣居ハ處、 有徳院様御隱居御祝物御拜領之節者

隅州様より若如何被成御勤り哉、被成御聞度旨八兵衛

を以被仰聞り付、其節若御在府に候得共、御病中故

御名代加賀守殿兩 御丸に登 城に御禮被仰上、御

老中様方に及廻勤有之由相達、相摸守様に申上り處、

此儀若御用番様に相伺り方可宜と被思召り、御鷹之鳥

類御拜領之節之御例若、似寄り儀に及無之り間 御

隱居御祝物御拜領之節之例書相添差出り様可仕旨、八

兵衛に及被仰聞り、左り今明日中右伺書差出、可然

旨八兵衛より承り付、御内意之趣拙者共申聞、今日

中伺書差出り様可仕旨八兵衛迄申達置り、

一 酒井左衛門尉様・秋元但馬守様當分御出勤及無之御事

り故、此節之御禮若差扣可申り、追り御出勤御座り節、

御禮被申達り筋に及可有御座哉之旨致内談り處、御禮

相濟り以後 御兩所様御出勤有之り及、御禮御勤に

若及間敷り、

大納言様に御禮之儀若、御用番様に被仰達相濟答り由

致承知り段、甚右衛門申出り、

一 書附一通

但有德院様御遺物 御兩殿様に御拜領御承知之上
御名代を以御禮被仰上り付、兩 御丸に御登 城

可被成哉之儀

一 例書一通

但有德院様御隱居爲御祝儀、御腰物 隅州様御在府

之節御拜領被遊、御病中故 御名代加賀守殿、兩

御丸に御登 城に御禮被仰上り節之例

御用番

本多伯耆守様

右に先月廿四日小左衛門持參仕、御取次に及差上り處

被成御請取り、追り可被仰聞旨、右御取次を以承知仕

り、

一 書附一通 御付紙有

但御遺物御拜領付、前條之伺書

右御同人様

右若先月廿五日御退出後參上可致旨、前日御取次より

小左衛門承知仕候付罷出り處、御付紙に及不及登 城、

御廻勤迄之筋に被仰渡、御用人を以御渡被成り旨申出

り、

一加賀守殿御父子に 御名代御願之儀、前以申上、日限

之儀若追り爲御知可申上旨相達置り處、右之通被仰渡

先月廿六日御勤被成^レ様、猶又申達、御口上書・御名

書前晚差上^レ處、翌廿六日加賀守殿御老中様 上使之

御方様^レ別紙之通御廻勤^ニ御禮被仰上、若御年寄様

方^レ若御番頭菱刈孫兵衛御使者、御側衆^ハ若表方御使

者^ニ御禮相濟申^レ、若御年寄様方・御側衆^ハ若御障

居被遊^レ以後、初^ニ御鷹之鳥御拜領之節之例を以、右

之通御禮被仰達^レ、

一 御連署一通

^但有徳院様御遺物 太守様 菊姫様^ハ御拜領付 隅

州様より之御禮

御用番

右御同人様

右^ハ同廿六日小左衛門持參仕、御取次^ニ差上^レ處、

御請取被成^レ由被仰聞^レ、

一 御書一通

^但右同斷付 大納言様^ハ隅州様より御禮被仰上^レ

付、秋元但馬守様御宛書

右御同人様

右若但馬守様御登 城不被成、 西之御丸御用御兼務

付、御書差上^レ處、被成御請取^レ由御取次^ニ被仰聞

^外、

一 御書一通

^但右同斷付、從 隅州様御禮被仰上^レ付

西尾隱岐守様

右^ハ小左衛門持參仕、御取次^ニ差上^レ處、請取置、

追^ル可申上旨承^レ旨小左衛門申出^レ、

右御連書御格書爰元調被仰付^レ段被申越^レ付、調方申

渡、右之通差出申^レ、

^但御案文御右筆差出^レ付差越申^レ、

一 御奉書一通

^但太守様 菊姫様^ハ御遺物御拜領之御禮、從 隅州

様被仰上^レ付

一 同一通

^但右同斷付 大納言様^ハ之御禮 隅州様より被仰上

^外付

本多伯耆守様

右より御奉書可被成御渡^レ間、御留守居壹人可罷出旨

御用人中より切紙到來、小左衛門參上^レ處、御用人^ニ

御渡被成^レ旨申出^レ間、本書若御右筆^ハ相渡寫差上

申^レ、

一 御返事六通

隅州様に御本丸御老女衆御五人様より

右老御遺物

姫君様 太守様 隅州様 菊姫様に御拜領被遊り付、

御内證御勤之儀

公方様 大納言様に 隅州様より御文を以御禮被仰上

り付る者、 御名代御使札御勤難被決り付、御文其元

調る難被差越り故、爰許調被仰り由承知仕り、

御名代御勤に相究り付、右御文爰許調申付、八月廿一

日之御日附に爲致り、

姫君様に御遺物御給り付る

隅州様より御禮之御文者、八月廿一日之御日附に被

差越由、朱書御返答相見得り共、御案文見合り得る者、

八月九日之御日附に致相違り故、御文爲披り處、弥

九日之御日附にり故、右御文之儀爰許に調替申付、

廿一日之御日附に爲致、先月廿六日 御守殿より被差

出り處、則日御返事相下り付差上申り、右御文被差出

り節、女使持参る御口上被相込被差出管り處、春井

其當日差支譯有之り付、右躰之節者

御守殿より御添文を以此跡被差出り先例者有之り得

る者、右御文女中使に不及、御添文を以被差出筋に可

有御座哉、又者翌廿七日春井被差上、御禮被仰上方に

可可有之哉之旨 御守殿に相伺り處、御添文に可被

差出り間、御文 御守殿に差上り様山野致承知り由申

出り付、御文六通差上り處、即日右之通御返事相下り

申候、太守様御拜領に付 隅州様より御禮御文之儀、

此節被差出り儀者如何可有御座哉と佐々木様に御右筆

を以御尋申上り處、表向御書に七月十日御拜領之段、

御案文に被認置り得共 太守様御頂戴不相濟内

隅州様より之御禮御文被差出りる者不苦由被仰り旨、

御右筆申出り付、一所に被差出り、此段爲御心得り、

其元も被差越り御日付違之御案文并爰許調相成り

御案文、前條同斷に付差越申り、

一 京都諸司代・大坂御城代に御勤向之儀、其元にも不相

知り故、御隠居御祝物御拜領之節之例今一往相糺、及

御勤儀りハ、其通首尾仕可申上旨被申越、御使番に

申渡、猶又相糺り得共、先例不相見得り間、此節之

儀も右被準御勤に及申間敷と申談り、

近衛様其外様且又

日光宮様・御三家様方・御一門様方に御知せ之儀者、

太守様御勤相濟_レ節御知せ有之筈之段を及御使番_レ申渡置_レ、

右之通 隅州様御勤相濟申_レ間、此段申越_レ條可被達貴聞_レ、以上、

但別紙九通差越申_レ、

(采) 市來左中
「寛延四年」十一月十四日

(采) 平田靱負
「上」

嶋津主殿殿

(采) 伊勢兵部殿

義岡相馬殿

嶋津主鈴殿

鎌田典膳殿

河野八郎左衛門殿

985

全上

扣正文在右筆所

有徳院様御靈前_レ私并從同氏大隅守、銅燈籠獻上可仕旨被仰渡置_レ、依之從私_レ先格之通二基獻上可仕_レ、從隱居差上_レ先例無之_レ得共、大隅守儀_レ譯及相替_レ付、私同様獻納爲仕度奉存_レ、此段御差圖被成可被下_レ、以上、

(采) 「寛延四年」十月六日

松平薩摩守

(采) 御付紙
大隅守より及御銅燈籠二基獻上候様可被致候

986

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、

有徳院様御遺物、以上使同氏大隅守并菊拜領之、難有由得其意_レ、紙面之趣各申談及 上聞_レ、恐々謹言、

(采) 「寛延四年」十月五日
堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

987

全上

御札令披見_レ、

有徳院様御遺物、以上使同氏大隅守并菊拜領之、難有由得其意_レ、紙面之趣大納言様_レ及言上候、恐々謹言、

(采) 「寛延四年」十月五日
堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

全上

返くめてたくかしく、

九月二日附の御ふみ下されり、七月十日

上使堀田相摸守にて

有徳院様御遺物

竹姫君様へしんしられ、御手前様ニ置有かたく思召被成

りよし、右の御禮

大納言様へ御申上被成度との御事、なにもよろしく申あ

けまいらせりへくり、めてたくかしく、

(朱) 「寛延四年」

梅その

松しま

うら尾

たきつ

さえた

松平

薩摩守様

御返事

人々御中

全上

返くめてたくかしく、

九月二日附の文下されり、

有徳院様御遺物、七月十日

上使小出信濃守にて御同氏大隅守殿并に菊姫方へ御拜領

被成、有かたく思召被成りよし、右之御禮

大納言様に御申上被成度との御事、右之段御表方も御申

上被成り得共、なを又御申上被成りとの御事、何もよろ

しく申上りへくり、めてたくかしく、

(朱) 「寛延四年」

右

梅その

松鳴

うら尾

たきつ

さえた

松平

薩摩守様

人々御中

全上

九月二日附にて御文下されり、

有徳院様御遺物、七月十日

上使小出信濃守にて御同氏大隅守殿ならひに菊姫御方へ

御拜領被成、有かたく思召被成り由、右之御禮御申上被

成度由、御表よりも御申上被成りへ共、猶御申上被成り

よし、御文の趣よろしく申上まいらせり、かしく、

(朱)

「寛延四年」

梅その

松平
薩摩守様 御返事
うら尾
たきつ
さえた

991 重年公御譜中

扣正文在右筆所

私儀來申年琉球人召連參府仕ハ様兼ハ被仰渡リ、從琉球
薩州ハ夏一度渡海仕ハ間、來秋召連國許出足仕候儀ヲ及
先達ル申上置リ、例年十一月參勤之時節相伺リ得共、右
之通御座ハ間、此節相窺不申リ、此等之御届申上候、以
上、

(卷)
「寛延四年」 十月十一日 松平薩摩守
(卷)
「上包御狀封紙ニ而披キいたし、御名相記佐、木様御案文」

992 重年公御譜中

正文在島津因幡忠郷

忠

寛延四未

十月廿一日

重年

(島津重年)

花押

No.2

鳴津因幡殿

993 全上

加冠

鳴津三次郎

宜爲

因幡

寛延四未

十月廿一日

御判

994 全上

久

郷

右之二字到以來二男以下、依人可被相用、依 仰如件、

寛延四年十月廿二日

伊勢兵部貞起判

鳴津因幡殿

995

重年公御譜中
扣正文在文庫

御記録奉行ハ

鳴津備中殿 (實傳)

鳴津因幡殿儀、先年和泉家相續、家格ヲ及結構被 仰付、
(忠勝)

御高壹萬千貳拾八石餘、私領今和泉并磯御屋鋪を被下置、新家故諸事家來迄の者難相調、段々御人を被召付置、重疊難有奉存り、然る當分之家來の者未家格動不相調候處、過分之御高被下置り儀如何り、往々込御取計御厚恩を以家相續不仕り不叶儀候、依之右高之内御見合次第一往御物に差上置せ度り、且亦私領之儀御用と被相成地方之由り得者、御練易を爲奉願度り得共、以御判物拜領被仰付置り得者、都る御練易之筋に難申上り間、右之内を被御用相成り地方者、御練易被仰付ると被御吟味次第存り、其外拜領高之内并佐多之内櫛植場、田代之内狩倉を被御用之場所者御練易又者差上筋のり被何分と被御見合次第被仰付度り、居屋鋪之儀被拜領爲被仰付儀に候得共、以前方之御假屋地の淨國院様御隱居後御屋鋪に被仰出、御一世爲被成御座所(音也)候間、差上候様爲仕度り、因幡殿幼年故、右之通御高并私領之儀者當分之通被下置候、佐多之内櫛植場者被差上下様被仰付り、現高有之外ハ、其分者返地可被下り、田代之内狩倉之儀者、追り何分と被可被仰付り、居屋鋪之儀者淨國院様より拜領之事候得共、以

前より之御假屋地之儀候得者被差上下様被仰付、磯内は掛持屋鋪壹ヶ所可被下置候、居屋鋪之儀者御城下は御見合を以可被下候、

右之通被仰付り間、帳面可記置り、

〔寛延四年〕十月

主鈴

996 重年公御譜中

今茲重年欲詣加世田日新寺、浴在山兒箇水在山之温泉、

且從先蹤巡見諸郡縣村落等上、十月二十三日發魔城、

島津空久峯、國老伊勢兵部貞起、側用人二階堂林左衛門

行通、近習役福山平太夫安都、迫水善左衛門久芳、納戸

奉行仁禮仲右衛門仲古等從行焉、過谷山・伊作・田布施・

阿多、同月二十五日到加世田、翌二十六日詣日新寺、

覽觀加世田之士歌舞俗謂之加世出踊於旅館之庭矣、同二十七日

經歷久志・泊・坊・鹿籠・知覽・穎娃、十一月朔日往

到兒箇水、留止浴温泉者十四日、同十六日到山川

麓、同十八日航于小根占、經歴大根占・田代・大始良・

始良・高山・大崎・志布志・串良・鹿屋・花岡・新城・

垂水等、遊覽諸勝景舊趾、十二月十一日自海瀉在重

航于櫻島有村、同十二日入横山假館、同二十二日駕

舟歸^二魔城^一矣、重年之過^二小根占^一也、有^二迫田源右衛門者^一、家^二居于國見城中^一、父母共没家貧無^二祭^一親之資、時俗皆信^二佛說^一謂、施^二惠於衆^一則益^二亡者之冥福^一也、國見險峻乏^二水、常汲^二數百步之外^一、行旅或困^レ渴焉、故自謂我不^レ若^二惠^一人以^レ水也、於是日遠汲^レ水盈^二之器^一、而施^二諸行道人^一、往來頗得^レ便矣、於^レ今既^二二十年未嘗^一一日間斷^二也、重年憫^二其志之切^一、同年十二月二十八日賜^二錢二千匹于源右衛門^一、其妻及其子茂右衛門亦褒^二賞^一之、事詳^二于左方^一、

全上

扣正文在家老座

此節 太守樣諸所 御巡見之節、小根占之内國見城内御通路外處^二、別有極貧者^一と相見得^レ家作有^レ之^レ、門口^二鹿相成小^一棚を拵、燒物^二水を入置、茶碗等相添往來之人^一に給させ^レ様子^二相見得^レ所有^一之、被遊御覽御尋之趣有^レ之、相糺^レ外處、左之通役^レ申出^レ付、達 貴聞候處朱書之通御褒美可被 仰付旨 御意候、朱書之通申渡^レ事、

寶曆元年未十二月

首尾伊勢兵部

〔朱〕右ノ書中朱ニテ書入左之如シ

小根占與力に

青銅二千疋 小根占衆中 迫田源右衛門

右者逼迫者故、亡親吊之志をも不相調故、爲吊之、居所門口^二水を出し置、往還之人^一に水施行いたし^レ、右居住之邊水無^レ之、遠方^レ水汲調數十ヶ年、右志を以往來又者其所^レ之者共水用事相達來^レ處、此節 御巡見御通路之節被遊 御覽、志之次第被 聞召上、爲御褒美右之通被下^レ之^レ、源右衛門妻并嫡子迫田茂右衛門儀も源右衛門同前之志有^レ之^レ外段達 貴聞、御褒美被 思召上^レ、右之段難有可奉承知^レ、

右御格之通申渡、首尾係にも可申渡^レ、

十二月

兵部」

一當年七拾歳 小根占衆中 迫田源右衛門

一同 五拾七歳 右之妻

一同 三拾八歳 嫡子 迫田茂右衛門

右源右衛門多年水施行之事、何様之志を以いたし^レ外哉承合^レ様こと被 仰渡^レ付、私共差越近所之者共^レに承^レ外處、源右衛門事別有極貧者^レの、亡親善提之吊等仕

ハ儀難成御座ハ故、爲孝養水施行相企、去ル子四月ヨリ當年迄二拾ケ年程施行爲仕旨、隣所中之者共申出ハ、最初之程者最通間敷ト皆々申候得共、當分迄引續志仕ハ儀、別條無御座段承申ハ外、何ぞ志有之爲仕儀ニハ無御座段を以承届ハ、源右衛門居所ハ水汲ハ場所五丁餘モ有之ハ、其内難所之坂壹丁餘モ御座ハ、五月之時分ハ三丁餘モ參ハル、水汲申場所有之由ハ、尤右道筋ニモ難所之坂有之由ハ、右之通間合、此段申上ハ、以上、

未十二月廿二日 小根占地頭横目
村木五兵衛印

鳥濱作兵衛印

1000 (朱)
「右ノ書中朱ニテ書入左之如シ」

小根占衆中國見城内罷居候

迫田源右衛門

右者内々承合可申上旨被 仰渡ハ付、承ハ處、右源右衛門事前々方國見城内居住仕、兼ハ極貧者ニハ漸ク渡世仕來候由ニハ得者、先祖之吊等も存之通ニ仕ハ儀難叶由ハ、右譯を以志仕ハ事ニハ哉、十年以來自分居屋敷木戸

脇通筋ニ龜相成棚拵、半トふニ水を入、茶わん等添置、國見城内筋罷通ハ諸人吞用ニ仕ハ由、只今迄毎日兩度程も水入替申由ハ、就中城内水不自由成所ニハ御座ハ得者、別ハ罷通諸人之重寶ニ罷成申由ニハ、尤源右衛門事平日實正之者ハ得者、右次第名聞ニ仕様子ニハハ有之間敷由承ハニ付、此段申出ハ、以上、

十一月廿三日 鹿兒島横目
別府太右衛門

一本文ニ付源右衛門妻并嫡子迫田茂右衛門事も源右衛門同然之志有之、源右衛門申談、折角水施行仕ハ由、是又横目より申出ハ事、」

1001 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、今度琉球中山王繼目之御禮、以使者爲申上度旨、先達ハ被相伺ハ處、來年其方召連參府候之様相達、難有由得其意ハ、紙面之趣各一覽之事ハ、恐々謹言、

(朱)
「寛延四年」 十月廿五日 松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

全上

1004 繼豊公御譜中 〔重年公御譜中ニモアリ〕
 寛延四年辛未十一月三日、改元號「寶曆」、同月二十七日
 至「魔府」傳令、

全上

御札令披見外、今度琉球中山王繼目之御禮、以使者爲申
 上度旨、先達而彼相伺外處、來年其方召連參府候之様相
 達、難有由得其意外、紙面趣令承知外、恐々謹言、

〔卷〕
 「寛延四年」 十月廿五日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

重年公御譜中

正文在琉球國國司

故王尚敬所勞之處養生不相叶、不慮之任合絶言語り、其
 元愁傷之程令察外、爲悔如是外、恐惶不宣、

〔卷〕
 「寛延四年」 十月廿八日 少將重年御判

謹上 中山王

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將
 又爲重陽之御祝儀、時服并御看拜領之、難有由得其意外、
 紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔卷〕
 「寶曆元年」 十一月五日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
 又從

公方様爲重陽之御祝儀、時服并御看拜領之、難有由得其
 意外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔卷〕
 「寶曆元年」 十一月五日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間
可御心易外、随而小熬海鼠一箱被獻外、各申談遂披露外
處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔系〕
「寶曆元年」十一月十二日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平薩摩守殿

1008 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御勇健御儀外間
可御心易外、随而小熬海鼠一箱被獻之外、遂披露外之處
一段之御仕合外、恐々謹言、

〔系〕
「寶曆元年」十一月十二日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1009 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、九月廿日東叡山

〔徳川吉宗〕
有徳院様御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面

之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔系〕
「寶曆元年」十一月廿五日 本多伯耆守 正珍判

松平大隅守殿

1010 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、九月廿日東叡山
有徳院様御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面
之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔系〕
「寶曆元年」十一月廿五日 本多伯耆守 正珍判

松平薩摩守殿

1011 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間
可御心易外、随而鯛一箱被獻之外、各申談遂披露外處一

段之御仕合ハ、恐ク謹言、

(采)
「寶曆元年」十二月九日

松平右近將監
武元判

松平大隅守殿

全上

御札令披見ハ、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相同ハ之ハ、益御安全御儀ハ間
可御心易ハ、隨テ琉球袖十端并鯉節一箱被獻ハ之ハ、遂披露ハ處一段之御
仕合ハ、恐ク謹言、

(采)
「寶曆元年」十二月九日

秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

1013 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相同ハ之ハ、益御安全御
儀ハ間可御心易ハ、隨テ琉球袖十端并鯉節一箱被獻ハ之ハ、
各申談遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

(采)
「寶曆元年」十二月九日

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

1014 全上

御札令披見ハ、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相同ハ之ハ、益御安全御儀
間可御心易ハ、隨テ琉球袖十端并鯉節一箱被獻ハ之ハ、
遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

(采)
「寶曆元年」十二月九日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

1015 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將
又同氏薩摩守家督以後歸國付テ 御尋之趣、以宿次奉書
相達、御看拜領之、難有由得其意ハ、依之爲御禮被差越
使者ハ、紙面之通各申談及 上聞ハ、恐ク謹言、

(采)
「寶曆元年」十二月十二日

松平右近將監
武元判

松平大隅守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又同氏薩摩守家督以後歸國付而 御尋之趣、以宿次奉書相達、從

公方様御着拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面趣

大納言様江及言上候、恐々謹言、

〔寶曆元年〕十二月十二日 松平右近將監 武元判

松平大隅守殿

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又家督以後歸國無吳有之外哉 御尋之趣、以宿次奉書相達、御着拜領、難有由得其意外、依之爲御禮以嶋津周防（患起）御樽着被獻之外、遂披露外處

御前江被召出之、入念外段御喜色之御事候、恐々謹言、

〔寶曆元年〕十二月十二日

松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦家督以後歸國無吳在之外哉 御尋之趣、以宿次奉書相達、從

公方様御着拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮以嶋津周防御樽着

大納言様江被獻之外、遂披露外處

御前江被召出之、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔寶曆元年〕十二月十二日 松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又同氏薩摩守家督以後歸國付の 御尋之趣、以宿次奉書相達、御看拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

(采) 「寶曆元年」 十二月十六日

松平大隅守殿

西尾隱岐守

忠尚判

1020 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又家督以後歸國無吳有之外哉 御尋之趣、以宿次奉書相達、御看拜領、難有由得其意外、依之爲御禮以鳴津周防御樽看被獻之外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

(采) 「寶曆元年」 十二月十六日

松平薩摩守殿

西尾隱岐守

忠尚判

1021 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺 御靈屋御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

(采) 「寶曆元年」 十二月十八日

松平大隅守殿

松平右近將監

武元判

1022 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得其意外、十月十六日御曲輪内出火之處、早速鎮外段被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

(采) 「寶曆元年」 十二月十九日

松平大隅守殿

松平右近將監

武元判

1023 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得
其意外、然者十月十六日御曲輪内出火之處、早速鎮_レ段
被承之、恐悦旨尤_レ、紙面之趣及言上_レ、恐_レ謹言、

(卷)
〔寶曆元年〕 十二月十九日

秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

1024 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、隨
而蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之_レ、各申談遂披露_レ處一段
之御仕合_レ、恐_レ謹言、

(卷)
〔寶曆元年〕 十二月十八日

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

1025 全上

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、隨
而蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之_レ、遂披露_レ處一段之御仕

合_レ、恐_レ謹言、

(卷)
〔寶曆元年〕 十二月十八日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

1026 全上

御札令披見_レ、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺 御靈屋
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤_レ、紙面之趣各申談及 上
聞_レ、恐_レ謹言、

(卷)
〔寶曆元年〕 十二月十八日

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

1027 全上

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得
其意外、然者十月十六日御曲輪之内出火之處、早速鎮_レ
段被承之、恐悦旨尤_レ、紙面之趣各申談及 上聞_レ、恐
_レ謹言、

(卷)
〔寶曆元年〕 十二月十九日

松平右近將監
武元判

重年公御譜中
正文在文庫

全上

松平薩摩守殿

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、目出度被存由得
其意外、然者十月十六日御曲輪内出火之處、早速鎮外段
被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔巻〕

「寶曆元年」
十二月十九日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

繼豊公御譜中
正文在文庫

御札令披閱外、寒氣之節弥無吳之由珍重外、我等無恙在
之事外、仍御念入外段欣然之至存外、恐々謹言、

〔巻〕

「寶曆元年」
十二月廿一日

尾張中將

宗陸判

松平大隅守殿

御報

重年公御譜中
正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲本多伯耆守可
述外也、

〔巻〕

「寶曆元年」
十二月廿七日

家重公
墨印

全上

正文在普賢院

獻上

福ヶ迫諏方大明神

御刀

一腰 披平
安周

右奉寄進者也、仍狀如件、

寶曆元末

十二月廿七日

少將重年御判

薩摩少將殿

1033 全上

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱) 「寶曆元年」 十二月廿七日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1034 継豊公御譜中

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲本多伯耆守可述外也、

(朱) 「寶曆元年」 十二月廿七日



松平大隅守殿

1035 全上

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱) 「寶曆元年」 十二月廿七日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1036 全上

御札令披見外、雖甚寒外其元御無吳之由珍重外、仍御念入外段欣然之至存外、我等無恙在之事外、恐々謹言、

(朱) 「寶曆元年」 十二月廿七日 尾張中納言 宗勝判

松平大隅守殿

御報

1037 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今年號改元之儀被承之、珍重由得其意外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

(朱) 「寶曆元年」 十二月廿八日 松平右近將監 武元判

松平大隅守殿

1038 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又今年號改元之儀被承之、玆重由得其意、紙面之趣
及言上、恐々謹言、

〔采〕寶曆元年 十二月廿八日
秋元但馬守 涼朝判

〔采〕寶曆元年 十二月廿八日
秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1039 重年、公御譜中
正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將
又今年號改元之儀被承之、玆重由得其意候、紙面之趣
各申談及 上聞、恐々謹言、

〔采〕寶曆元年 十二月廿八日
松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

1040 全上

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將
亦今年號改元之儀被承之、玆重由得其意、紙面之趣
及言上、恐々謹言、

(表紙)

繼豐公

寶曆二年 自正月

重年公

至十二月

追
錄
舊
記
雜
錄
卷百四

1041 繼豐公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(采) 本多伯耆守
「寶曆二年」 正月七日 正珍判

松平大隅守殿

1042 全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(采)

「寶曆二年」 正月七日

松平大隅守殿

秋元但馬守
涼朝判

1043 重年公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(采) 本多伯耆守
「寶曆二年」 正月七日 正珍判

松平薩摩守殿

1044 全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(采) 秋元但馬守
「寶曆二年」 正月七日 涼朝判

松平薩摩守殿

1045 繼豐公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被

獻之候、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕

「寶曆二年」
正月十一日

松平右近將監
武元判

本多伯耆守
正珍判

堀田相摸守
正亮判

松平大隅守殿

1046
全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被

獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕

「寶曆二年」
正月十一日

秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

1047
重年公御譜中

正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨、可有沙汰之狀如件、

寶曆二年正月十一日
重年御判

1048
全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被

獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕

「寶曆二年」
正月十一日

松平右近將監
武元判

本多伯耆守
正珍判

堀田相摸守
正亮判

松平薩摩守殿

1049
全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被

獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕

「寶曆二年」
正月十一日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

1050
繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、如承改年之慶賀玆重_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟と目出度被存由得其意_レ、隨_テ御樽肴被獻之候、各申

談遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_ク謹言、

〔實曆二年〕 二月六日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

1051 全上

御札令披見_レ、如承改年之慶賀玆重_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟と目出度被存由得其意_レ、隨_テ御樽肴被獻之_レ、遂披

露_レ處一段之御仕合_レ、恐_ク謹言、

〔實曆二年〕 二月六日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1052 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、如承改年之慶賀玆重_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟と目出度被存由得其意_レ、隨_テ御樽肴被獻之候、各申

談遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_ク謹言、

〔實曆二年〕 二月六日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平薩摩守殿

1053 御札令披見_レ、如承改年之慶賀玆重_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟と目出度被存由得其意_レ、隨_テ御樽肴被獻之_レ、遂披

露_レ處一段之御仕合_レ、恐_ク謹言、

〔實曆二年〕 二月六日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1054 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤_レ、然

老家督以後初_テ歸國爲

御尋、以宿次奉書御肴拜領、爲御禮被差越使_テ處、

御前に被召出拜領物有之、難有被存由得其意_レ、紙面之

趣各一覽之事、恐、謹言、

(奉)

「寶曆二年」
二月十八日

松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

1055

全上

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、然
者家督以後初、歸國爲 御尋、以宿次奉書御看拜領、爲
御禮被差越使者、處

御前、被召出拜領物有之、難有由得其意、紙面之趣令

承知、恐、謹言、

(奉)

「寶曆二年」
二月十八日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

1056

全上

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將
又爲歲暮御祝儀、從

公方様其方妻女、拜領物有之、難有由得其意、紙面之

趣令承知、恐、謹言、

(奉)

「寶曆二年」
二月十八日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

1057

繼豊公御譜中
正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將
又爲歲暮之御祝儀、時服并御看拜領之、難有由得其意、
紙面之趣各申談及 上聞、恐、謹言、

(奉)

「寶曆二年」
二月十九日

松平右近將監
武元判

松平大隅守殿

1058

全上

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將
又爲歲暮之御祝儀、從

公方様時服并御看拜領之、難有由得其意、紙面之趣及
言上候、恐、謹言、

〔卷〕
「寶曆二年」 二月十九日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1059 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又爲歲暮之御祝儀、其方妻女に拜領物有之、難有由得其意外、紙面趣各一覽之事外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆二年」 二月十九日

松平薩摩守殿

松平右近將監 武元判

1060 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦爲歲暮之御祝儀、從

公方様其方妻女に拜領物有之、難有由得其意外、紙面趣令承知外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆二年」 二月十九日

秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1061 重年公御譜中

正文在志布志大慈寺

大慈寺住持職事任先例可令執務之狀如件、

寶曆二年二月廿八日 少將重年御判

古道西堂

1062 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又正月十二日

竹姫君様被爲 入外節、菊事御懇之蒙 上意、從

公方様 大納言様拜領物被 仰付、從

〔家治室〕
五十宮御方被遣物有之、重疊難有由得其意外、紙面趣各

一覽之事外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆二年」 三月十一日 堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

1063

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又正月十二日

竹姫君様被爲 入外節、菊事御懇之蒙 上意、從

公方様 大納言様拜領物被 仰付、從

五十宮御方被遺物有之、重疊難有由得其意外、紙面之趣

令承知外、恐々謹言、

(朱)
「實曆二年」三月十一日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1064

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又正月十二日

竹姫君様被爲 入外節、菊事御懇之蒙 上意、從

公方様 大納言様拜領物被 仰付、從

五十宮御方被遺物有之、重疊難有由得其意外、紙面之趣

各一覽之事候、恐々謹言、

(朱)
「實曆二年」

三月十一日

堀田相摸守

正亮判

松平薩摩守殿

1065

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

亦正月十二日

竹姫君様被爲 入外節、菊事御懇之蒙 上意、從

公方様 大納言様拜領物被仰付、從

五十宮御方被遺物有之、重疊難有由得其意外、紙面之趣

令承知外、恐々謹言、

(朱)
「實曆二年」

三月十一日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

1066

全上

扣正文在文庫

寫

種子嶋宇左衛門

右者京都即宗院より

(島津宗信)

淨國院様・慈徳院様御位牌御安置被 仰付、御茶湯器御

靈膳御道具御入付被 仰付被下度外、御佛餉料之儀老、

兼る御寄附料被仰付置外付、願之所存無御座旨被申出、

先達申出置趣有之、先例御物より屹と御安置之筋不相

見得、御留守居并御屋鋪守より奉安置外筋ニ爲被仰付儀

と相見得候、依之 御兩靈様御位牌御物調ニ御留守居

より奉安置、御茶湯器 御靈膳御道具之儀も輕一通ツ、

御物調ニ、是又御留守居より寄進之筋ニ被仰付外、損

シ外節引替繕等之儀不相見得由外間、以後之儀表其通可

相心得外、尤即宗院ニ可相達儀、右之心得を以相應ニ申

達、御位牌并器物共ニ當分之位ニ應外様調方申付可致首

尾外、

右申渡首尾懸ニ表可申渡外、

(卷) 〔實曆二年〕三月 (島津久郷) 主鈴

1067 繼豊公御譜中

去歲訟レ公繼豊雖、蒙下至今夏一在國療養之 恩免上、宿

病還未レ癒矣、今茲寶曆二年三月十五日 重年呈ニ使翰於

執政一、又寛ニ繼豊參府之期一、届ニ來歲夏一也、詳ニ于後一、

1068 全上

担正文在家老座

一筆致啓上外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅奉存外、然

者同氏大隅守儀病氣同篇ニ相勝不申外付、國元ニ罷在

致入湯養生爲仕度旨去年奉願、當夏迄被下御暇、當年參

府仕苦御座外得共、今以相勝不申、温泉之場所ニ表存外

儘罷越外儀難成外、只今之通ニ老長途之旅行難仕御座

外、年々御斷申上參府延引仕外段恐入迷惑仕外得共、右

躰之譯故可罷成儀ニ外ハ、來夏迄御暇被下外様奉願外、

其内ニ表快罷成外ハ、相同參府爲致候様可仕外、右之

段何分表御差圖被成可被下外、此段爲可申上呈使札候、

(卷) 〔實曆二年〕三月十五日

堀田相摸守様

酒井左衛門尉様

本多伯耆守様

松平右近將監様

西尾隱岐守様

重年公御譜中

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺

御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申

談及 上聞外、恐々謹言、

(朱) 「寶曆二年」

三月廿五日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺

御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申

談及 上聞候、恐々謹言、

(朱) 「寶曆二年」

三月廿五日

堀田相摸守

正亮判

松平薩摩守殿

重年公御譜中

正文在文庫

御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之外、遂披露外處一段之御

仕合外、恐々謹言、

(朱)

「寶曆二年」

四月廿一日

堀田相摸守

正亮判

全上

正文在飯隈山蓮光院

薩摩・大隅・日州諸縣郡年行事職之儀

聖護院御門跡以御許容被仰付、御書物拜戴之上者大峯修

行無怠慢當家之祈禱可抽誠精者也、仍狀如件、

寶曆二年四月四日

少將重年御判

飯隈山

蓮光院

松平薩摩守殿

全上

御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆二年」四月廿一日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦同氏大隅守病氣同篇ニ而當年參府難成ニ付、來夏迄御暇被下外様被致度外、其内ニ表快罷成外者、參府相伺外

様被致度旨被申越令承知外、依之被差越使者外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆二年」四月廿三日

堀田相摸守
正亮判

松平薩摩守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲西尾隱岐守可述外也、

〔卷〕
「寶曆二年」五月二日

家重公
墨印

松平大隅守殿

全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆二年」五月二日

秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

重年公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲西尾隱岐守可述外也、

〔卷〕
「寶曆二年」五月二日

家重公
墨印

薩摩少將殿

全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之、遂披露、
處一段之御仕合、恐々謹言、

(奉)

「寶曆二年」五月二日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

重年公御譜中

正文在南泉院

此度

御袖判を以 仰出趣別紙寫相渡、謹る被奉承知、配
下中、及可被申聞、面々法式之儀、悉緩疎有之間、鋪、得
共、間々形躰色、の規則を取失、耽名利輩、及有之由、
宗門開祖之遺戒を深切ニ存 思召相叶、勤行不懈道儀、與
隆、様連々可被致接得、以上、

寶曆二年申五月二日

(寺社奉行)
宮之原甚五兵衛
通興判

(同)
鳴津十太右衛門
久命判

南泉院

重豪公御譜中

寶曆二年壬申夏五月二日重年公賜三刀一腰治工法、式、脇
尺九分半有、長式、脇
長、尺一寸五分有、拵、及肴一折、

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

大納言様益御機嫌能被成御座、三月十四日東叡山
(家治、梅侯氏)
至、心院様御靈前 御參詣之段被承之、恐悦旨尤、紙面
之趣及言上、恐々謹言、

(奉)
「寶曆二年」五月十六日

秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

大納言様益御機嫌能被成御座、三月十四日東叡山
至、心院様御靈前 御參詣之段被承之、恐悦旨尤、紙面
之趣及言上、恐々謹言、

(奉)
「寶曆二年」五月十六日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

繼豊公御譜中
扣正文在家老座

一筆致啓上外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存外、然
者私儀病氣同篇ニ由今以相勝不申候付、來夏迄國元罷在
致養生參府仕度、同氏薩摩守相伺外處、願之通被仰渡外
段御奉書之趣致承知、忝仕合奉存外、此旨爲可申上呈飛
札外、恐惶、

〔實曆二年〕
五月廿一日

- 堀田相摸守様
- 酒井左衛門尉様
- 本多伯耆守様
- 松平右近將監様
- 西尾隱岐守様
- 秋元但馬守様

扣正文在家老座
一筆致啓上外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存外、然
者同氏大隅守病氣同篇ニ由今以相勝不申外付、來夏迄國
本罷在致養生參府爲仕度段相伺外處、願之通被仰渡外旨
御奉書之趣忝仕合奉存外、此段爲可申上呈飛札外、恐惶、

〔實曆二年〕
五月廿一日

- 堀田相摸守様
- 酒井左衛門尉様
- 本多伯耆守様
- 松平右近將監様
- 西尾隱岐守様
- 秋元但馬守様

1086
繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌被相伺外、益御安全御儀外間
可御心易外、隨而饜節一箱被獻候、各申談遂披露外處一

段之御仕合ハ、恐ク謹言、

(卷)

「寶永二年」六月十二日

酒井左衛門尉

忠寄判

松平大隅守殿

1087

全上

御札令披見ハ、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌被相同ハ之ハ、益御安全御儀ハ間

可御心易ハ、隨テ琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤

御仕合ハ、恐ク謹言、

(卷)

「寶曆二年」六月十二日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1088

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相同ハ、益御安全御儀

ハ間可御心易ハ、隨テ琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・

赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻ハ之ハ、各申談遂披露

ハ處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

(卷)

「寶曆二年」六月十二日

酒井左衛門尉

忠寄判

松平薩摩守殿

1089

全上

御札令披見ハ、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相同ハ、益御安全御儀

ハ間可御心易ハ、隨テ琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤

貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻ハ之ハ、遂披露ハ之ハ處一

段之御仕合ハ、恐ク謹言、

(卷)

「寶曆二年」六月十二日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

1090

全御譜中

去歲八月二十二日重年從ニ先規ニ、假奉レ安ニ置ニ

(徳川吉宗)有徳院殿之靈牌于薩府南泉院ニ、自ニ同二十三日ニ至ニ同

二十五日ニ、修ニ四十九日及百箇日之梵儀ニ矣、其後更

彫ニ刻靈牌上野准於薩府后親、今茲六月十四日奉レ安ニ置ニ之於

南泉院ニ、同十六日修ニ遷座之法ニ、翌十七日修ニ供養之

法ニ、此日重年使ニ島津備中貴備詣ニ南泉院ニ、獻ニ納香奠

白銀十枚于 尊靈前、繼豐亦同使_二島津内記久臆_一、
獻_二納香奠白銀三枚_一也、

1093 全上

御札令披見外、

○今茲自_二六月十七日_一至_二同十九日_一、

將軍家於東叡山修_二

公方樣 大納言樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將

亦其方病氣同篇_二而今以不相勝付、來夏迄罷在致養生參

有德院殿一回忌之梵儀_一、故同月二十二日重年使_二家臣

府被致度段、同氏薩摩守相願外處、願之通被仰出、難有

番 掘堀右衛門貞紀獻_二納香奠白銀十枚于 尊靈前_一、

由得其意外、紙面趣各一覽之事外、恐_レ謹言、

1091 繼豐公御譜中

於_二東叡山_一修_二

有德院殿一回忌之法式_一、故繼豐以_二使者_一今茲六月二十

1094 重年公御譜中

二日獻_二納御香奠白銀二枚_一矣、

御札令披見外、

公方樣益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山 御靈前

1092

全上

正文在文庫

御札令披見外、

公方樣益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐_レ謹言、

(朱) 實曆二年

六月廿五日

酒井左衛門尉

忠寄判

1095

全上

御札令披見外、

松平大隅守殿

公方樣益御機嫌能被成御座、四月廿九日增上寺 御靈屋

(朱) 實曆二年

六月廿五日

酒井左衛門尉

忠寄判

松平薩摩守殿

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤^レ、紙面之趣各申談及 上
聞^レ、恐^レ謹言、

〔天〕
「寶曆二年」六月廿八日
酒井左衛門尉 忠寄判

松平薩摩守殿

1c.96
継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿九日増上寺 御靈屋
御參詣之儀被承之、恐悅旨尤^レ、紙面之趣各申談及 上

聞^レ、恐^レ謹言、

〔朱〕
「寶曆二年」六月廿八日
酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

1097
全上

御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤^レ、將
亦其方病氣同篇之由今以不相勝付、來夏迄罷在致養生參
府被致度段、同氏薩摩守相願^レ處、願之通被 仰出、難

有由得其意^レ、紙面趣令承知^レ、恐^レ謹言、

〔朱〕
「寶曆二年」六月廿九日
秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1098
継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤^レ、將
亦爲端午之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意^レ、
紙面之趣各申談及 上聞^レ、恐^レ謹言、

〔朱〕
「寶曆二年」七月五日
西尾陸岐守 忠尚判

松平大隅守殿

1099
全上

御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤^レ、將
又從 公方様爲端午之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有
由得其意^レ、紙面之趣及言上候、恐^レ謹言、

〔朱〕
「寶曆二年」七月五日
秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1100 継豊公御譜中
正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露_レ處一段
之御仕合_レ、恐_レ謹言、

(悉) 「寶曆二年」七月六日

西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

1101 全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露_レ處一段
之御仕合_レ、恐_レ謹言、

(悉) 「寶曆二年」七月六日

秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1102 重年公御譜中
正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露_レ處一段
之御仕合_レ、恐_レ謹言、

(悉) 「寶曆二年」七月六日

西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

1103 全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露_レ處一段
之御仕合_レ、恐_レ謹言、

(悉) 「寶曆二年」七月六日

秋元但馬守 涼朝判

重年公御譜中
川正文在右筆所

松平薩摩守殿

今御譜中

川正文在右筆所

一筆致啓上候、

有徳院薨御付、從琉球中山王

公方様 大納言様江御悔爲可申上、鹿兒嶋迄使簡差渡、

右書簡以使者差上申候、可然様御執成所仰候、恐惶、

〔寶曆二年〕

七月六日

堀田相摸守様

〔卷〕
但琉球人來着御届より
五六日前以此御書被差出

酒井左衛門尉様

本多伯耆守様

〔卷〕
七月六日御馬廻比志
嶋孫左衛門御使者ニ被差
立候事

松平右近將監様

西尾隱岐守様

大納言様御方

秋元但馬守様

人々

継豊公御譜中

正文在文庫

今度

有徳院様一回御忌御法事御執行付、以使者御香奠被獻

之外、於東叡山奉納之事候、右之趣及言上、恐々謹言、

〔寶曆二年〕

七月廿日

西尾隱岐守

忠尚判

松平大隅守殿

一筆致啓上候、從琉球中山王自分繼目爲御禮、使者差上

候儀申聞、先規之通被仰付難有仕合奉存、御禮申

上度旨私迄申越、右使者・從者迄今十一日鹿兒嶋來着仕

外、如例旅支度等付、日數六十日餘手間取申、仕

舞次第召連可致出足候、此段爲可申上呈使札候、恐惶、

〔寶曆二年〕

七月十一日

堀田相摸守様

〔卷〕
先例此御書御連署計
ニ而被差出候付、此節

酒井左衛門尉様

茂例之通御連署計
被差出候事、
七月十二日使江戸江被
差越候事

本多伯耆守様

松平右近將監様

西尾隱岐守様

人々御中

正文在文庫

今度

有德院様一回御忌御法事御執行付り、以使者御香爨被獻

外、於東叡山奉納之事候、右之趣及言上外、恐々謹言、

(奉)

「寶曆二年」七月廿日

西尾隱岐守

忠尚判

松平薩摩守殿

老君繼豐退休後、因二病痾一自二寬延二年一數訟二幕府一、

爲二温泉治療一留二在于薩府四配館一、故去歲日州佐土原城

主島津加賀守忠雅訪二來二于薩府一問二繼豐之起居一、乃許レ

之、因今茲七月二十五日發二居城一、經二高岡・高城・都之

城一、同二十七日二至福山一、同二十八日航二于魔府一、乃衛二

居於客舍一、八月二日忠雅登二府城一也、家老用人等出迎二

之於虎之間、過二對面所一入二書院一、獻二色杉原紙五束一・塩

鴨五羽一・美酒一樽、謁二見于重年一、登二四配館一、獻二色

奉書三束一・塩鴨五羽一・美酒一樽、謁二見于繼豐一、同六日

重年招二忠雅於府城座之間一薦二饗饌一與二太平布十四一、且

覽二觀琉球人座樂於書院一焉、同十八日忠雅登二府城一、請二

還レ郷之暇一、則重年見二忠雅於座之間一饗レ之渥矣、既而

后候二四配館一還二客舍一、此日重年使二側廻之者一贈二白銀百

枚于客舍一、繼豐使二側廻之者一贈二細上布三端一・島紬二端于

客舍一矣、其他應二忠雅之需一、贈二惠人參一・牧馬一、杜一匹靴

八日御三中間之者奉、チケケ杜、此品豐年四月送

也、忠雅留止數日之際詣二南泉院一獻二納御太刀一腰一、白銀

一枚于大權現御宮、白銀一枚于

台德院殿

大猷院殿

嚴有院殿

常憲院殿

文照院殿

有章院殿

有德院殿、詣二福昌寺一進二納金子百匹于慈眼廟一、白銀一

枚于祖先廟一、詣二淨光明寺一進二納白銀一枚于祖先廟一、

詣二南林寺一進二納金子百匹于大中廟一、且詣二郡山花尾權現

社及谷山慈眼寺一・觀音等一、而同十九日辭二魔府一、取二路

於重富一・帖佐一・加治木一・溝邊一・横川一・踊一・西霧島一・曾於

郡一・清水一・日當山一・國分一・敷根一・福山一・財部一・都之城一・

高城一・高岡一・穆佐一・倉岡一、同二十六日還二佐土原一也、

重年公御譜中
正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之、遂披露、處一段之御仕合候、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆二年」
八月四日

西尾隱岐守
忠尚判

松平右近將監
武元判

本多伯耆守
正珍判

酒井左衛門尉
忠寄判

堀田相摸守
正亮判

松平薩摩守殿

1110
全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之、遂披露、處一段之御仕合、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆二年」
八月四日

秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

1111
重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、然
者琉球中山王繼目御禮、以使者申上度之段被申聞、
先規之通被 仰付、難有由其方迄御禮申達、旨得其意、
依之被差越使者、紙面之趣各申談及 上聞、且又右
使者・從者迄去月十一日其地着、如例支度有之、
仕廻次第召連可有發足由令承知、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆二年」
八月十八日
松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

1112
全上

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、中山王繼目御禮、
以使者申上度之段被申聞、先規之通被 仰付、難有
由其方迄御禮申達、旨得其意、依之被差越使者、紙
面之趣及言上、且又右使者・從者迄去月十一日其地着
、如例支度有之、仕廻次第召連可有發足由令承知候、
恐々謹言、

(卷)
「寶曆二年」 八月十八日
秋元但馬守
涼朝判
松平薩摩守殿

1113 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

有徳院様一回御忌御法事於東叡山御執行相濟、六月廿日

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣各申

談及 上聞外、恐々謹言、

(卷)
「寶曆二年」 八月廿六日
松平右近將監
武元判

松平大隅守殿

1114 全上

御札令披見外、

大納言様益御機嫌能被成御座、今度於東叡山

有徳院様一回御忌御法事御執行相濟、六月廿一日 御靈

前 御參詣之段被承、恐悦旨尤外、依之被差越使者外、

紙面之趣及言上外、恐々謹言、

(卷)
「寶曆二年」 八月廿六日
秋元但馬守
涼朝判
松平大隅守殿

1115 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

有徳院様一回御忌御法事於東叡山御執行相濟、六月廿日

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面趣各申談

及 上聞外、恐々謹言、

(卷)
「寶曆二年」 八月廿六日
松平右近將監
武元判

松平薩摩守殿

1116 全上

御札令披見外、

大納言様益御機嫌能被成御座、今度於東叡山

有徳院様一回御忌御法事御執行相濟、六月廿一日 御靈

前 御參詣之段被承、恐悦旨尤外、依之被差越使者外、

紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔寶曆二年〕^(卷)
八月廿六日
秋元但馬守
涼朝判

松平薩摩守殿

1117 口達之覺

頃日御預犬江疵付儀間々有之、病犬又老無據相障り
外節ハ、時宜次第可取計外へとも、危忽ニ疵付儀不可
然外條、向後入念外様ニ可致通達外、

寶曆二申八月

勘解由^(藏訪邦卷)

1118 每朔御條書 御留守中二三度も弘外様先年被 仰出置

外得共、每朔弘外様ニ被仰出外條、此旨御右筆へ申渡、
可承向々へも可申渡外、

寶曆二年申九月

典膳^(鎌田政昌)

1119 繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之、益御安全御儀外間
可御心易外、隨而干鯛一箱被獻之、各申談遂披露外處
一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寶曆二年〕^(卷)
九月六日
堀田相摸守
正亮判

松平大隅守殿

1120 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之、益御安全御儀外間
可御心易外、隨而干鯛一箱被獻之、遂披露外之處一段
之御仕合外、恐々謹言、

〔寶曆二年〕^(卷)
九月六日

秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

1121 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之、益御安全御儀外間
可御心易外、隨而干鯛殘魚一箱被獻之、各申談遂披露
外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寶曆二年〕^(卷)
九月六日
堀田相摸守
正亮判

松平薩摩守殿

1122 全上

御札令披見、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之、益御安全御儀、間

可御心易、隨、手干鱈殘魚一箱被獻之、遂披露之處

一段之御仕合、恐、謹言、

(末) 〔寶曆二年〕 九月六日

松平薩摩守殿

秋元但馬守 涼朝判

1123 継豊公御譜中 正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平右近將監可述、也、

(末) 〔寶曆二年〕 九月七日



薩摩少將殿

1124 全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之、遂披露、處一段之御仕合、恐、謹言、

(末) 〔寶曆二年〕

九月七日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1125 重年公御譜中 正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平右近將監可述、也、

(末) 〔寶曆二年〕

九月七日



松平大隅守殿

1126 爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之、遂披露、處一段之御仕合、恐、謹言、

(末) 〔寶曆二年〕

九月七日

松平薩摩守殿

秋元但馬守 涼朝判

1127 重年公御譜中 正文在琉球國司

芳簡令披見、去歲

有德院様薨御奉絶言語、依之爲見舞榮野川親方被差越、目錄之表被相贈之、入念儀存、恐惶不宣、

〔采〕 寶曆二年 九月九日 少將重年御判

謹上 中山王

1128

全上

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、今度琉球人其御地に召連罷越滞留中、自然居宅近所出火之節、琉球人爲退場高輪・品川・大井三ヶ所之屋鋪に遣外儀、且又右三ヶ所に難遣節、愛宕下青松寺に爲立退外様仕度旨申上候處、伺之通被仰渡、忝仕合奉存外、此段爲可申上如斯御座外、恐惶、

〔采〕 寶曆二年 九月十一日

本多伯耆守様
人、

1129

全上

扣正文在右筆所

琉球中山王代替付、從大清國封王使請外先規御座外、依之大清に相願、封王使來ル丑年渡來外様仕度由中山王申越外間、先例之通可致旨申付外、此段申上候、以上、

〔采〕 寶曆二年 九月十一日

御名

1130

全御譜中

今歲夏中山王尚穆、使襲封謝使今歸仁王子及副使小波津親方、先來于薩府、今茲寶曆二年壬申九月十一日重年發居城、述職于江都、時琉使正副及從者九十四人、且家老義岡相馬久中・島津主鈴久郷、側用人本田久米右衛門親房・二階堂林左衛門行通・福山平太夫安都、近習役河野安之右衛門通古等屬從焉、監琉使、家老島津主殿久憑、表用人伊集院十藏久東、近習役伊地知新太夫季周等屬從焉、同十二日著向田假館、同日琉使亦到水引大小路、同十七日琉使及琉人監官並諸有司到于薩西京泊、駕船航西海船數大小、同十六日重年發向田取陸於九州、十月四日重年駕船於豐之大里、至同二十八日著船于播州坂越、翌十九日執陸路經山陽道、十一月三日到尼ヶ崎、駕船、翌四日至大坂河河口、直乘船于住吉丸、與琉使相會著于大坂港、是故兼日奉台命、松平大膳大夫重就・細川越中守重賢・小笠原伊豫守忠總自港出河船、溯河流、接待琉使、且以賜小艇三十八艘寬延元年賜二十四艘 今載依譜載三艘、運輪琉使之旅具、琉使之船從重年乘船之後、戲下諸有司亦棹小艇、各出令警衛琉使之船、指揮之其法尤嚴也、且見除涉河之

大小船、總如二先規一矣、重年著二大坂假館一、休止三

日 疏使及疏人乘船先二于重年一入二大坂港、
日 從二先規一止二宿島津加賀守忠輝飯亭一

○去歲六月

前大樹吉宗公薨御、凶問至三于琉球國一、故今茲六月中

山王尚喜^{後改名}、使^下榮野川親方齋^中吊書^來魔府^上、於

是從二先規一使^三馬廻比志島孫左衛門國泰獻^三之於東武

柳營一矣、乃執政見^レ投^三報書一矣、^(奉)

1131 全上

正文在文庫

御札令披見^レ、就

有德院樣薨御、從琉球中山王

公方樣 大納言樣^レ御悔爲可申上、鹿兒嶋迄使翰相渡^レ、

依之右書翰以使者被越之、遂一覽及言上則返札遣^レ間、

可被相達^レ、恐^レ謹言、

^(奉)「寶曆二年」

九月廿六日

西尾 隱岐守

忠尚判

松平右近將監

武元判

本多伯耆守

正珍判

酒井左衛門尉

忠寄判

堀田相摸守

正亮判

松平薩摩守殿

1132 全上

御札令披見^レ、就

有德院樣 薨御、從琉球中山王

公方樣 大納言樣^レ御悔爲可申上、鹿兒嶋迄使翰相渡^レ、

依之右書翰以使者被越之、遂一覽及言上則返札遣^レ間、

可被相達^レ、恐^レ謹言、

^(奉)「寶曆二年」

九月廿六日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

1133 重年公御譜中

寶曆二年壬申十一月八日、重年率^三疏使及從者^二發^三大坂假

館一、溯^レ流其夜泊^二牧方一、翌九日着^二城州伏見假館一、茲

日侯伯諸有司出^三諸船一、派^二河流一施^レ令警^三衛疏使船一同^二

前件一、重年休^二止假館二日、

重年公御譜中
正文在文庫

全上

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將

又爲參勤去月十一日國許發足、從琉球中山王差上ハ使者
被召連之由得其意候、紙面之趣各一覽之事ハ、恐々謹言、

(朱)

「寶曆二年」

十月十一日

本多伯耆守

正珍判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見ハ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將

又爲參勤去月十一日國許發足、從琉球中山王差上ハ使者
被召連ハ由得其意ハ、紙面之趣令承知ハ、恐々謹言、

(朱)

「寶曆二年」

十月十一日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

御札令披見ハ、

(家継生母、勝田氏)
月光院様御逝去之段被承之、被絶言語由得其意ハ、依之

御機嫌被相同之ハ、被爲替御儀無之ハ間可御心易ハ、紙

面之趣各申談及 上聞ハ、恐々謹言、

(朱)

「寶曆二年」

十月廿六日

本多伯耆守

正珍判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見ハ、

月光院様御逝去之段被承之、被絶言語由得其意ハ、依之

御機嫌被相同之ハ、被爲替御儀無之ハ間可御心易ハ、紙

面之趣及言上候、恐々謹言、

(朱)

「寶曆二年」

十月廿六日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將

又琉球中山王使者召連、長州赤間關迄着船之由得其意外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

新西方村

一高五百七拾四石四斗七升三合九夕六才

(朱) 一寶曆二年 十月廿八日 本多伯耆守 正珍判

右同

松平薩摩守殿

右同

岩本村

一高四百五拾六石貳斗壹升貳合七夕貳才

右同

右同

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將

又琉球中山王使者召連、長州赤間關迄着船之由得其意外、

紙面之趣令承知外、恐々謹言、

一高千四百六拾五石三斗壹升壹合九夕八才

薩州顯娃郡

小牧村

(朱) 一寶曆二年 十月廿八日 秋元但馬守 涼朝判

今和泉

松平薩摩守殿

池田村

一高五百六拾壹石貳斗貳升壹合八夕八才

右同

右同

重年公御譜中

正文在島津因幡忠郷

今和泉領知目錄

利永村

一高五百四拾四石三升八合五夕四才

合高三千六百壹石貳斗五升九合八才

薩州揖宿郡

右御方事

今和泉

總州様乍御三男就和泉家名跡相續、延享二年二月朔日

繼豊公御譜中

大守繼豊公以 御直書、顯娃攝宿之内號今和泉一所之地
被宛行之條全可被領知者也、其節地面散在今般相纏、故
依 仰如件、

寶曆二年壬申十一月朔日

鎌田典膳

政昌判

伊勢兵部

貞起判

鳴津因幡殿

重年、公御譜中

扣正文在右筆所

高野山蓮金院考、中納言家久代爲當家宿坊致興隆、庄園
令寄附畢、到當代弥不可有相違之條、先祖之日牌寺内之
修造等如舊規聊緩疎有間鋪者也、仍狀如件、

寶曆二年十一月五日 少將重年御判

高野山

蓮金院

当日於大坂被相渡候、

高野山
蓮金院 少將重年

上包同紙
間似合

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

月光院様御逝去之段被承之、被絶言語由得其意、依之

正文在文庫
御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將

又爲重陽之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意、

紙面之趣各申談及 上聞、恐、謹言、

〔寶曆二年〕

十一月九日

酒井左衛門尉

忠寄判

松平大隅守殿

全上

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將

又爲重陽之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意、

紙面之趣及言上、恐、謹言、

〔寶曆二年〕

十一月九日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

御機嫌被相伺之外、被爲替御儀無之外間可御心易外、紙面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

〔采〕
「寶曆二年」 十一月十一日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

1145 全上

御札令披見外、

月光院様御逝去之段被承之、被絶言語由得其意外、依之御機嫌被相伺之外、被爲替御儀無之外間可御心易外、紙面趣及言上外、恐々謹言、

〔采〕
「寶曆二年」 十一月十一日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1146 重年公御譜中

同年十一月十二日重年出「伏見假館」、經「歷江州・濃州・

東海驛路」、是故賜「傳馬百匹・擔夫六百五員」
寛延元年六百二十四員令藏

依レ簡滅二、十九員一

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、去月十四日増上寺 御靈屋御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

〔采〕
「寶曆二年」 十一月十二日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平薩摩守殿

1148 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、隨而小熬海鼠一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
「寶曆二年」 十一月十三日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平薩摩守殿

1149 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間

1147 全上

可御心易レ、隨テ小熬海鼠一箱被獻之レ、遂披露之處
一段之御仕合レ、恐々謹言、

〔朱〕「寶曆二年」十一月十三日
秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1150 全上

御札令披見レ、

公方樣 大納言樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤レ、將

又琉球中山王使者召連 去四日大坂着船レ由得其意レ、

紙面之趣令承知レ、恐々謹言、

〔朱〕「寶曆二年」十一月十三日
秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1151 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見レ、

公方樣益御機嫌能被成御座、去月廿四日東叡山

〔家重生母大久保氏〕深徳院樣 御靈前 御參詣之儀被承之、恐悅旨尤レ、紙

面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

〔朱〕「寶曆二年」十一月十六日
酒井左衛門尉 忠寄判

松平薩摩守殿

1152 繼豐公御譜中

正文在文庫

大納言樣被遊御庖瘡御快然レ爲御祝儀、以使者目錄之通
被獻之レ、遂披露レ處一段之御仕合レ、恐々謹言、

〔朱〕「寶曆二年」十一月廿五日
西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

1153 全上

大納言樣被遊御庖瘡御快然レ爲御祝儀、以使者如目錄被
獻之レ、遂披露レ處一段之御仕合レ、恐々謹言、

〔寶曆二年〕十一月廿五日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1154 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御勇健被成御座、恐悦旨尤外、然者

大納言様被遊御庖瘡外處、輕御様躰之段被承之、目出度

被存由得其意外、猶以御機嫌以使者被相伺之外、弥御順

快御事外間可御心易外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐

々謹言、

〔寶曆二年〕十一月廿五日 堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

1155 全上

御札令披見外、

公方様益御勇健被成御座、恐悦旨尤外、然者

大納言様被遊御庖瘡外之處、輕御様躰外段被承之、目出

度被存由得其意外、猶以御機嫌以使者被相伺之外、弥御

順快御儀外間可御心易外、紙面趣及言上外、恐々謹言、

〔寶曆二年〕十一月廿五日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1156 全上

大納言様被遊御庖瘡御快然外爲御祝儀、以使者目錄之通

被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔寶曆二年〕十一月廿五日 西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

1157 全上

大納言様被遊御庖瘡御快然外爲御祝儀、以使者如目錄被

獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱) 〔寶曆二年〕 十一月廿五日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又琉球中山王使者召連、去四日大坂着船之由得其意外、

紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

(卷) 〔寶曆二年〕 十一月廿五日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

1160 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又琉球中山王使者召連、去十九日三州岡崎驛迄被相越外

由得其意外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

(卷) 〔寶曆二年〕 十一月廿七日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1161 重年公御譜中

正文在納戸方

御納戸奉行に

從

家重公

重年公に

御刀 來國眞象眼銘代金貳拾枚

折紙有

長貳尺三寸

一腰

一御三所物赤銅七子金銀若松色繪

但 御小柄并金浦咄

一御繻二重金無垢

1159 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然

者琉球中山王使者召連、去十九日參州岡崎驛迄被相越外

由得其意候、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

(朱) 〔寶曆二年〕 十一月廿七日 堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

一御切羽金無垢

一御縁赤銅七子

一御鐔赤銅無地

一御柄頭角黒塗

一御柄鮫白糸巻

一御鞘黒塗

一御小刀志津三郎兼氏

一御鷓目金無垢

一御下緒

一御袋紫緞子裏白縐子緒紫房附

右

太守重年公御家督初^ニ御國許^ニ之御暇御給、寛延四年末

四月十五日御禮被、仰上候節、於御黒書院被遊御頂戴^外、

右御道具御納戸御讓物之内致格護、後年紛敷無之様帳面

可記置^外、以上

寶曆二年申十一月

兵部

典膳

1162 重年公御譜中

同年十二月二日重年率^ニ疏使及從者^一著^ニ于東郡芝邸^一、翌

三日詣^ニ執政^番西尾隱岐守忠尚^一之第一、奉^レ窺^ニ

將軍家之安否^一、厥后詣^下

家治公之執政秋元但馬守涼朝之第一、奉^レ窺^ニ安否^一、同日

上使松平右近將監武元來^ニ于芝邸^一勞^ニ遠來^一、乃詣^ニ執政各

之第一奉^レ申^ニ謝^一之、

1163 全上

扣正文在右筆所

去年御暇被下歸國仕^外節、左衛門尉殿^ニ差上置^外當分養

子願書、被返下之請取申候、恐惶、

〔寶曆二年〕

十二月三日

御名御諱御判

西尾隱岐守様

脇付なし
上包のり付封之字

〔去年御暇之節左衛門尉^ニ被差出^外當分養子願書、

致返進候、以上、

十二月三日

西尾隱岐守

松平薩摩守様

右寛延四年末四月御暇御給^ニ付、御發駕前御用番酒井左

衛門尉様^ニ御假養子之御願書被差出置^外處、翌年申十二

月二日御參府^ニ付、同三日御用番西尾隱岐守様^方御返被

成_レ付、本文之通則御請之御書相認_レり、御家老衆に
差上_レり處、西尾様_方之御使者に、御家老衆_方直_レ御渡被
成_レ事、

但 早晚_者最前被差出置_レり御老中様より御返被成事_レ
處、此節_者左衛門尉様病氣_ニ付、先例_ニ相替_レり
付、御請之御文章相替_レり、

1164 重年公御譜中

正文在文庫

米 貳千俵

〔_米實曆二年申十二月六日〕

1165 全御譜中

同年十二月六日大御目附伊丹兵庫頭直賢爲_ニ 上使_ニ來_ニ
芝第_ニ、賜_ニ粟米二千俵_ニ、是因_レ率_ニ疏使_ニ來_ニ于江都_ニ之先
觸_レ也、乃詣_ニ執政各之第_ニ奉_レ申_ニ謝_レ之、

全上

正文在文庫

明十二日五半時登

城、參勤之御禮可被申上_レり、以上、

〔_米實曆二年〕 十二月十一日

西尾隱岐守

松平右近將監

本多伯耆守

堀田相摸守

松平薩摩守殿

1167 全上

正文在文庫

家來二人 御目見被 仰付_レり間、召連可被罷出_レり、

〔_米實曆二年〕

1168 全御譜中

同月十二日重年應_ニ執政之教諭_ニ、登_ニ營於黒書院_ニ拜_ニ
謁

家重公、奉_レ申_ニ謝_レ述職之禮_ニ、因獻_ニ上御太刀一腰、御
馬代白銀五十枚・白縮緬二十卷于

家重公、御太刀一腰・御馬代白銀五十枚于

家治公、且家老義岡相馬久中・島津主鈴久郷各獻_ニ上

御太刀一腰・御馬代白銀一枚・紗綾二卷于

家重公、御太刀一腰御馬代白銀一枚于

家治公、拜_二謁_一、台顏_一、是因_二先規_一也、

○同年十二月十三日

大樹家重公使_三山岡五郎作_使芝郎_一、賜_二俊鷹所_一持擊鶴一隻_一、乃重年詣_二執政各位之第_一奉_二禮_一謝_二之_一、

繼豐公御諸中

繼豐退休後因_二病痢_一爲_二温泉浴養_一、自_二寬延二年_一數訟_一、公留_二在薩府四配館_一、爾來今茲寶曆二年十二月十三日

大樹家重公始以_二尊鷹所_一捉之鶴一隻及執政奉書_一賜_二繼豐於江府_一、以故執政西尾隱岐守忠尚出_二驛路證印_一而授_二與之_一、乃使_二家臣橫山新右衛門安當_一、汾陽次郎左衛門盛專

新、其外步士二人輕卒數人警_二衛_一之_一、即夜發_二江都_一不

舍_二晝夜一經_一歷東海・山陽・西海之三驛_一、同三年正月十

一日到_二著四配館_一、繼豐則拜_二戴_一之_一、同使_二家臣内田八右

衛門長貞_一、有川七左衛門貞典_一、齋_二繼豐之報翰及忠尚

所_二與驛路證印_一、而馳_二于江都_一矣、同日又使_二肝付彈正兼

昌_一番頭_一爲_二謝使_一赴_二江都_一、長貞・貞典等經_二西海・山陽

東海之三驛_一、快快先_二兼昌_一二月九日著_二江都_一、直候_二執

政_一番_一堀田相摸守正亮之第_一、呈_二上繼豐之報翰_一、復_二納驛路

證印_一矣、兼昌亦經_二西海之驛_一正月十九日到_二豐州小倉_一、

翌二十日駕_二船_一同月二十三日到_二防州上之關_一、阻_二風數日

風尚不順也、於_二此二月四日_一上岸取_二陸於山陽_一、同月九

日著_二攝州大坂_一、自是不_レ舍_二日夜_一取_二驛路於東海_一、同月十八日到_二著江都芝郎_一、同月二十二日候_二執政之各第_一、

捧_二呈繼豐之書翰_一勸_二使者_一、三月朔日兼昌登_レ營_二捧繼豐之獻物一種_一荷于

家重公、白書院而拜_二謁

家重公

儲君家治公_一勸_二使節_一、鳥居伊賀守忠胤奏_二達_一之_一、兼昌亦

親自獻_二上御太刀一腰・馬代_一一枚_一・紗綾二卷于

家重公、奉_レ拜_二謁

兩公、太田攝津守奏_二達_一之_一、且登_二西城_一捧_二繼豐之獻

物一種_一荷于

家治公、兼昌亦親自獻_二上御太刀一腰・馬代_一一枚_一、謁_二奏

者内藤大和守頼由_一捧_二呈_一之_一、同月六日再登_レ營_二於_二檜

間_一執政本多伯老耆守出席而以_二賜_一繼豐_二奉書_一被_レ附_二與

之_一、以_二紗綾三卷_一賜_二於兼昌_一拜_二戴_一之_一、同日候_二西城執

政秋元但馬守涼朝之第_一則涼朝以下賜_二繼豐_一奉書_一被_レ附_二

與_一之_一、同月十九日兼昌發_二芝郎_一五月五日還_二薩府_一、六日

登_二府城及四配館_一而復命、

1170

全御譜中

正文在文庫

一筆令啓達外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座外間、可御心易外、

將又御鷹之鶴拜領外條、以宿次差越之外、恐々謹言、

〔悉實曆二年〕

十二月十三日

西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

1171

全上

寫正文在文庫

寫

此狀箱并鶴壹從江戸至薩州鹿兒嶋、松平大隅守所相届、返札可來外間、於江戸月番之老中口急度可持參者也、

〔悉實曆二年〕

十二月十三日

隱岐印

右宿中

1172

重年公御譜中

正文在文庫

猶以慰斗目長袴可有着用外、

御本丸相濟西丸口召連可被罷出外、以上、

明十五日四時中山王使者召連可有登城外、以上、

〔悉實曆二年〕

十二月十四日

西尾隱岐守

松平右近將監

本田伯耆守

堀田相摸守

松平薩摩守殿

1173

全御譜中

同年十二月十五日應執政之奉書、重年普長携務疏使今歸

仁登營、於天廣間先重年取見於

家重公、而後今歸仁獻備中山王所捧之數品、奉拜

調

家重公、時使執政降懇篤之、尊詞於重年、乃傳達之、

重年奉禮謝之、畢而家臣島津主殿久馮奉拜調台

顏獻御太刀一腰・紗綾二卷・御馬代白銀一枚、是因

監疏使至江都也、同日今歸仁登西城、捧中山王

之獻物、勤_レ謝使_一、恩_レ許許多品、拜禮畢而退去矣、同十八

日重年^{舊長}、率_二今歸仁及副使・樂正・中官・樂童子數輩_一

登_レ營、於_二大廣間_一樂童子奏_二音樂_一奉_レ備_二

家重公

家治公之台覽_一、畢而執政述_二台命_一傳_二達之於疏使_一今歸

仁_一賜_レ御暇_一、且自_二中山王_一至_二正副疏使_一疏人從者_一、各拜

賜若干品、

家治公亦降_二恩命_一賜_二數品_一也、同十九日今歸仁登_二

東叡山_一敬_二拜_一

東照宮大權現宮_一、奉_レ獻_二中山王所_レ捧之品物_一、同二十八

日今歸仁發_二東武_一、令_二家老市來左中政方、用人伊集院十

藏久東・堀堀右衛門貞紀、近習役鎌田六郎太夫政方司_一之

行裝_上、經_二歷東海・濃州驛_一、翌年正月二十四日駕_二船於

大坂_一、同三月朔日歸_二于薩府_一矣、

1174 継豊公御譜中

正文有文庫

御札令披見_レ、

公方樣益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤_レ、紙面之趣各申談及 上

聞_レ、恐_レ謹言、

〔卷〕 寶曆二年 十二月十六日

西尾隱岐守 忠尚判

松平大隅守殿

1175 今上

御札令披見_レ、就寒中

公方樣 大納言樣御機嫌被相伺之_レ、益御安全御儀_レ間

可御心易_レ、隨_レ而一箱被獻之_レ、各申談遂披露_レ處一

段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

〔卷〕 寶曆二年 十二月十六日

西尾隱岐守 忠尚判

松平大隅守殿

1176 今上

御札令披見_レ、就寒中

公方樣 大納言樣御機嫌被相伺之_レ、益御勇健御儀_レ間

可御心易_レ、隨_レ而一箱被獻之_レ、遂披露_レ處一段之御

仕合_レ、恐_レ謹言、

〔卷〕 寶曆二年 十二月十六日

秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1177 重年公御譜中

正文在文庫

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之、遂披露之處一段之御

仕合、恐々謹言、

〔卷〕
〔寶曆二年〕 十二月十六日 忠尚判

松平薩摩守殿 忠尚

〔在右裏〕
西尾隱岐守

1178 全上

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之、遂披露之處一段之

御仕合、恐々謹言、

〔卷〕
〔寶曆二年〕 十二月十六日 涼朝判

松平薩摩守殿 涼朝

〔在右裏〕
秋元但馬守

1179 全上

猶以熨斗目長袴可有着用、

御本丸相濟西丸江表召連可被罷出、以上、

明十八日琉球人音樂被 仰付之、且又御暇可被下候條四

時召連可有登 城外、以上、

〔卷〕
〔寶曆二年〕 十二月十七日 西尾隱岐守

松平右近將監

本多伯耆守

酒井左衛門尉

堀田相摸守

松平薩摩守殿

1180 緒豊公御譜中

正文在文庫

御札令披閱、寒氣之節弥御無吳之由珍重、我等無恙

在之事、仍御念入段欣然之至存、恐々謹言、

〔卷〕
〔寶曆二年〕 十二月廿三日 尾張中將 宗睦判

松平大隅守殿

御報

1181 全上

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十月廿四日東叡山

深徳院様 御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙

面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔朱〕
「寶曆二年」十二月廿五日 西尾隱岐守 忠尚判

松平大隅守殿

1182 軍年公御譜中

同年十二月二十五日、重年從參勤之流例、獻上御馬二

匹、黒毛四歳四寸剛州末吉牧、立具附之、下向栗毛四歳四寸薩州吉野牧于

大樹家重公、同一匹黒栗毛三歳三寸剛州福山牧于

儲君家治公、乃執政各見、投奉書、後倣之、

1183 全上

正文在文庫

御馬二疋被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹

言、

〔朱〕
「寶曆二年」十二月二十五日 忠尚判

松平薩摩守殿

忠尚

〔朱〕
「在右裏」
西尾隱岐守

1114 全上

御馬一疋被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹

言、

〔朱〕
「寶曆二年」十二月廿五日 涼朝判

松平薩摩守殿

涼朝

〔朱〕
「在右裏」
秋元但馬守

1185 継豊公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲酒井左衛門尉

可述外也、

〔朱〕
「寶曆二年」十二月廿七日

〔朱〕
家電公
墨印

松平大隅守殿

1116 全上

爲歳暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外

全文在琉球國國司

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱實曆二年〕 十二月廿七日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

全上

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲酒井左衛門尉可述外也、

〔朱實曆二年〕 十二月廿七日 家重公 墨印 薩摩少將殿

重年公御譜中 正文在文庫

處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱實曆二年〕 十二月廿七日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

全上

今度其方繼目付有、今歸仁王子被差上召連致參府外處、其國不失舊規、至遠境使者差上外段御感悅有之、御會釋等段々結構被仰付外間、難有奉存、國中之政務猶正道可被申付儀尤外、委曲家老共可相達外、恐惶不宣、

〔朱實曆二年〕 十二月廿七日 少將重年御判

謹上 中山王

芳墨令披閱外、其方繼目之御禮今歸仁王子被差上外處、江府首尾好相勤一段外、且又太刀馬代并別錄之表被相贈之欣然之至外、恐惶不宣、

〔朱實曆二年〕 十二月廿七日 少將重年御判

謹上 中山王

(表紙)

繼豐公

實曆三年 自正月
至七月

重年公

追
錄
舊
記
雜
錄
卷百五

1191 繼豐公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御
仕合外、恐々謹言、

(朱) 「實曆三年」 正月七日 松平右近將監 武元判

松平大隅守殿

1192 全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御
仕合外、恐々謹言、

(朱) 「實曆三年」 正月七日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1193 重年公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之候、遂披露外處一段之御

仕合外、恐々謹言、

(朱) 「實曆三年」 正月七日 武元判

松平薩摩守殿

武元

(朱) 「在右裏」

松平右近將監

1194 全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之候、遂披露外處一段之御

仕合外、恐々謹言、

(朱) 「實曆三年」 正月七日 涼朝判

松平薩摩守殿

涼朝

(朱) 「在右裏」

秋元但馬守

1195 繼豐公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采實曆三年〕 正月十一日

西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

1196 全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采實曆三年〕 正月十一日

秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1197 全上

御札令披見外、

公方様益御勇健被成御座、恐悅旨尤外、然者

大納言様被遊御庖瘡外處、輕御様躰之段被承之、目出度
被存由得其意外、猶以御機嫌被相伺之外、弥御快然御儀
外間可御心安外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔采實曆三年〕 正月十一日

松平右近將監 武元判

松平大隅守殿

1198 全上

御札令披見外、

公方様益御勇健被成御座、恐悅旨尤外、

大納言様被遊御庖瘡外之處、輕御様躰外段被承之、目出
度被存由得其意外、弥御快然御儀外間可御心易外、紙面
之趣及言上外、恐々謹言、

〔采實曆三年〕 正月十一日

秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1199 重年公御譜中

正文在文庫

吉書

一 神社佛閣修造興行事、

一 可專勸農事、

一 可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨、可有沙汰之狀如件、

寶曆三年正月十一日

重年

(鳥津重年)

(花押 No.2)

1200

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者

大納言様御痾瘡被遊御快然、御酒湯被爲 召外段被承之、

目出度被存由得其意外、依之被差越使者外、紙面趣各申

談及 上聞外、恐々謹言、

(朱)
「寶曆三年」
正月廿八日

松平右近將監
武元判

松平大隅守殿

1201

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、

大納言様御痾瘡被遊御快然、御酒湯被爲 召外段被承之、

目出度被存由得其意外、依之被差越使者外、紙面之趣及

言上外、恐々謹言、

(寶曆三年)

正月廿八日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1202

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟と目出度被存由得其意外、隨ち干鯛一箱・御樽一荷被

獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱)
「寶曆三年」

二月六日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

1203

全上

御札令披見外、如承改年之慶賀玆重外、

1205

全上
御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又同氏薩摩守儀參府付、以上使御懇之上意之趣被承
之、難有由得其意外、紙面之通令承知外、恐々謹言、

1204

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又同氏薩摩守參府付、以上使御懇之上意之趣被承之、
難有由得其意外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

〔卷〕
「實曆三年」
二月七日

堀田相摸守
正亮判
松平大隅守殿

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相
濟と目出度被存由得其意外、隨而御樽肴被獻之外、遂披
露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕
「實曆三年」
二月六日

秋元但馬守
涼朝判
松平大隅守殿

1207

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又同氏薩摩守琉球之使者召連外付、以上使御米拜領
之由申越、難有旨得其意外、紙面之趣令承知外、恐々謹
言、

〔卷〕
「實曆三年」
二月十一日

秋元但馬守
涼朝判

1206

〔卷〕
「實曆三年」
二月七日

松平大隅守殿

秋元但馬守
涼朝判

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
亦同氏薩摩守琉球之使者召連外付、御米拜領、難有由得
其意外、紙面趣各一覽之事外、恐々謹言、

〔卷〕
「實曆三年」
二月十一日
堀田相摸守
正亮判

松平大隅守殿

松平大隅守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又舊臘同氏薩摩守參勤之御禮申上、御懇之蒙 上意、難有由得其意外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

(朱) 「寶曆三年」 二月十二日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又舊臘同氏薩摩守儀參勤之御禮申上之、御懇之蒙 上意、難有由得其意外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

(朱) 「寶曆三年」 二月十二日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫
今度

(家宣幸近衛氏)
天英院様十三回御忌ニ付、私并同氏大隅守・菊より御香奠献上仕度外、此段相伺申候、以上、

(朱) 「寶曆三年」 二月廿一日 松平薩摩守

(朱) 御紙紙
御香奠不及献上候、大隅守・菊より者伺之通可有献上外」

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又爲歳暮之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

(朱) 「寶曆三年」 二月廿五日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將

又舊臘爲歲暮之御祝儀、從

公方様時服并御看拜領之、難有由得其意^レ、紙面之趣及

言上候、恐^レ謹言、

(卷) 實曆三年 二月廿五日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1213 繼豊公御譜中

於増上寺修^二

天英院殿十三回忌之法事^一、故繼豊以^二使者^一今茲實曆三年

二月二十八日獻^二納御香奠白銀二枚^一矣、

1214 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將

又舊臘琉球中山王繼目御禮之使者、同氏薩摩守召連登

城^レ外處御目見被 仰付、其上御暇之節中山王并其外之者

江^レ表拜領物有之、西丸江^レ表登 城拜領物仕、難有由得其

意^レ、依之被差越使者^レ、紙面之趣各申談及 上聞候、

恐^レ謹言、

(卷) 實曆三年 三月朔日 堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

1215 全上

御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將

又舊臘琉球中山王繼目御禮之使者、同氏薩摩守召連登

城^レ外處 御目見被 仰付、其上御暇之節中山王并其外之

者江^レ表拜領物有之、西丸江^レ表登 城拜領物仕、難有由得

其意^レ、依之被差越使者^レ、紙面之趣及言上^レ、恐^レ謹

言、

(卷) 實曆三年 三月朔日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1216 繼豊公御譜中

正文在文庫

御鷹之鶴拜領付^而、爲御禮差越^レ松平大隅守使者肝付^彈

正、明日四時 御城江可差出候、以上、

(卷)
「寶曆三年」三月五日

(本多正珍)
本伯耆

松平薩摩守殿
留守居

1217
全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又舊臘以宿次奉書御鷹之鶴拜領、難有由得其意外、依之
爲御禮以肝付彈正御樽肴被獻之候、遂披露外處、
御前に被召出之、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

(巻)
「寶曆三年」三月六日

西尾隠岐守
忠尚判

松平右近將監
武元判

本多伯耆守
正珍判

酒井左衛門尉
忠寄判

堀田相摸守
正亮判

松平大隅守殿

1218
全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又舊臘以宿次奉書御鷹之鶴拜領之、難有由得其意外、依
之爲御禮以肝付彈正御樽肴被獻之外、遂披露外處、
御前に被召出、入念之段御喜色之御事外、恐々謹言、

(巻)
「寶曆三年」三月六日

秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

1219
継豊公御講中

正文在文庫

なを〜何もよろしく申上まいらせ外、めてたくか
しく、

正月十三日付にて御ふみ下され外、

公方様 大納言様益御機嫌よく成せられ、御めてたく思
召外よし、さては舊臘十六日御鷹の鷹、御同氏薩摩守様
奥さまに拜領なされ外御事、有かたく思召外よし、御禮
御申上被成り通、よろしく申上まいらせ外、めてたくか
しく、

〔本〕「寶曆三年」

松たいら

大隅守様

御返事
人々御中

梅その

まつ嶋

うら尾

たきつ

さゑた

1222

松平大隅守殿

御返報

重年公御譜中

正文在文庫

敬白 天罰靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、去歲三司官役被 仰付冥加不淺、難有仕合奉存候、弥以御國許御奉公入念可相勤候事、

一乍恐、奉對

重年様 糺豐様、毛頭不可奉存疎意候事、

一從 御國許被 仰下候諸事、御條書之趣堅可相守候、

若企惡意邪儀者於有之者、則可致披露候事、

一對國王無別心可抽忠勤候事、

一國中之掟并諸事無蟲眉親疎可致沙汰候事、

右條々僞於申上者、

罰文略之

與那原親方

良暢判

寶曆三年癸酉三月二十三日

1221

全上

御札令披見外、

正文在文庫

1220 絳豊公御譜中

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

〔本〕「寶曆三年」

三月十八日

本多伯耆守

正珍判

松平大隅守殿

芳翰令披見外、今般以宿次奉書御鷹之鶴拜領之旨玆重外、依之入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

〔本〕

「寶曆三年」

三月十九日

紀伊大納言

宗直判

1223

全上

敬白 天罰靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、去歲三司官役被 仰付冥加不淺、難有仕合奉存候、弥以御國許御奉公入念可相勤候事、

一乍恐、奉對

重年様 繼豐様、毛頭不可奉存疎意候事、

一從 御國許被 仰下候諸事、御條書之趣堅可相守候、

若企惡意邪儀者於有之者、則可致披露候事、

一對國王無別心可抽忠勤候事、

一國中_レ之擬并諸事無鼠胤親疎可致沙汰候事、

右條々僞於申上者、

罰文略之

寶曆三年癸酉三月二十三日

東風平親分

朝衛判

1224

重年公御譜中

扣正文在右筆所

私儀去々年御暇被下置候節、假養子ニ弟島津李申上置外、然者私家督以前先妻ニ出生之男子嶋津善次郎(久老)と申、當酉九歲罷成、家中一門並ニ致、國許罷在候、去々年此者相願申度内存ニ御座外得共、其節迄者虚弱有之見合罷在外

處、頃日丈夫罷成外、因茲御暇被下置外節、假養子右善(卷一)写

次郎相願申度御座外、尤妻ニ男子致出生外者嫡子可仕外、御付紙

善次郎儀者其内假養子仕所存御座外、此段奉伺候、以上、可爲伺之通候

〔寶曆三年〕

四月二日

御名

〔右御伺書四月二日御用御賴之御先手衆小笠原縫殿助様を以、(采)

御用番御老中西尾隱岐守様(再)忠被差出置外處、四月八日隱岐守

様御留守居被召呼、山澤小左衛門罷出外處ニ、御伺之通御

付紙ニ而被仰渡外事〕

1225

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披閱外、以宿次奉書御鷹之鶴拜領之由、依之就被

差越使者外、御念入外段欣然之至存外、恐々謹言、

〔寶曆三年〕

四月七日

尾張宰相

宗睦判

松平大隅守殿

御報

1226

繼豐公御譜中

去歲訟レ公繼豐蒙下至今夏ニ在國療養之 恩許上、雖レ然舊制尚未レ愈、乃今茲寶曆三年四月九日重年訟レ執政、又

延_二繼豐參府之期_一、屆_二來歲夏_一也、詳見_二于後_一、

全上

正文在文庫

同氏大隅守儀、多年病氣、_二付_レ國元_一罷在、入湯養生爲
仕度旨先達_レ奉願_レ外處、菟角不相勝_レ付、去年奉願、當
夏迄御暇被_レ下置_レ外、當年參府仕筭御座_レ得共、今以同篇
_二の暑寒又者依天氣相差障有_レ之、温泉之場所_レ存_レ存_レ儘
罷越_レ儀難成御座_レ付、遠境之所參府難叶致迷惑_レ、因
茲可罷成儀御座_レ外者、來夏迄國元_二罷在養生爲仕度奉願
外、尤此以後快罷成、旅行仕躰御座_レハ、相伺參府爲
致_レ外様可仕_レ外、此旨を以何分_二表可然様御差圖被成可被
下候、以上、

(采) 「寶曆三年」 四月九日 松平薩摩守

(朱) 一_レ置_レ紙
可爲願之通_レ外

重年公御譜中

寶曆三年癸酉四月十五日

大樹家重公使_二執政松平右近將監武元來_一芝邸_一、賜_二歸國

之暇_一、拜_二戴縮緬三十卷・白銀百枚_一焉、

儲君家治公亦使_二武元賜_レ紗綾二十卷_一、乃重年詣_二執政各
位之第_一奉_レ禮_二謝之_一、同十八日登_レ營、拜_二謁

兩公於黑書院_一、奉_レ禮_二謝賜_レ告、時

家重公加_二懇篤之_一 尊言_二賜_レ龍蹄一匹_一、乃奉_レ禮_二謝之_一、
直登_二西城_一、因_二奏者衆內藤大和守賴由_一禮_二謝前件_一、
此日芝邸留守家老島津主鈴久鄉從_二先觸_レ附_二從重年_一登_レ
袴、獻_二上御太刀一腰・馬代白銀一枚・紗綾二卷于
家重公、御太刀一腰・馬代白銀一枚于

家治公_一、奉_レ拜_二謁

兩公_一矣、

全御譜中

相正文在家老座

大守様御暇御給之 上使、今日松平右近將監様

大納言様より之 上使表、御兼御出被成_レ外旨、御當番

御目付衆より被仰越、右之御手當_レ外處、先達_レ御拜領

物右近將監様御家來御使者_二の被差越、受取方并大御

書院御上段_レ相備置_レ儀共、先例之通御座_レ外、

一上使右近將監様今日晝時芝御屋鋪_レ御出、大守様先

例之通御出迎御案内、大御書院に御着座、國元之御

暇被下、拜領物被仰付、近々御目見可被仰付旨被蒙

上意、縮緬三十卷・白銀百枚御拜領、

大納言様より表御本丸より御暇被仰渡り付、拜領

物被仰付り旨御承知、紗綾二十卷御拜領御頂戴被遊、

御熨斗御茶差上、御料理御斷るり、左り御請被仰

上 上使御立之節御送被遊り、

一 島津淡路守殿(久松)ニ表先例之通御出迎有之り、

一 上使御立以後

太守様爲御禮御老中様方に御廻勤被遊、若御年寄様は

(島津久松)老主殿御使者、御側衆は老物頭御使者ニ御禮被仰達

り、

一 上使御給付、御内證御勤先例を以 御守殿に相伺り上

御兩公様に 太守様より女中御使今日被差上筈り得

共、今日老御使留るり明日被差上、御禮被仰上筈り、

菊姫様より表右御使るり御口上御相應御禮被仰上筈

り、

一 右付

公方様

大納言様に御銘々 御前様より表御文を以御禮被仰上

筈り、

一 隅州様御勤之儀、以 上使御暇御給、御拜領物被遊并

御禮被仰上り節、被蒙 上意、御馬御拜領之御禮迄表

被相込、御一所御文を以御禮被仰上、表向御勤ニ不及

先例御座り、近日御禮被仰上り節、猶又右之段可申越

り、

一 御暇御給付、先例之通

御兩殿様に御役人老當日御祝儀申上、諸士老御帳相付

御祝儀申上り、

一 隅州様御女中様方に、私共より御祝詞之儀御禮被仰上

り節申上筈り、

一 御留守被差置り御家老

御目見之儀、先例を以御願被仰上置、主鈴(島津久松) 御目見被

仰付筈り、

一 御暇之御禮被仰上り節老、猶又可申越り條、隣國爲御

知御國元御祝儀等之儀、先例を以被申渡るり可有之り、

右之通以 上使御暇御給、御先格不相替

御兩公様より御拜領物被遊、恐悅御同意奉存り、此段

早々爲可申上急飛脚差立、此旨申越候條

隅州様被達 貴聞、御女中様方可被達 御聽候、以上、

〔寶曆三年〕^(卷) 四月十五日^(上)

島津主鈴^(久世)
義岡相馬^(久世)
島津主殿^(久世)

伊勢兵部殿^(貞起)

鎌田典膳殿^(政昌)

平田親負殿^(正輔)

市來左中殿^(政之)

1230

〔御返答〕^(卷)

本文被申越趣致承知、隅州様達 御聽、御女中様方に

表申上り、御先格不相替

御兩公様より御拜領物被遊、恐悅御同意奉存り、以上、

五月十四日

(本文書ハ一二三九号文書ノ行間朱書ナリ)

1231

重年公御譜中

正文在文庫

明日五半時登

城御暇之御禮可被申上り、以上、

〔寶曆三年〕^(卷)

四月十七日

西尾隠岐守

1232

全上

家來一人

御目見被 仰付り間、召連可被罷出り、

松平薩摩守殿

松平右近將監
本多伯耆守
酒井左衛門尉
堀田相摸守

1233

全上

花巻栗毛^{五歳}

〔寶曆三年〕^(卷)

申年
南部立

1234

重年公御譜中

扣正文在家老座

太守様御暇之御禮昨十八日可被仰上旨、前日御奉書并

御留守被差置り御家來 御目見被仰付り、御切紙御到

來則日御請之御書被差出候、

一十八日朝六半時、

太守様御屋敷御出、御登 城御黒書院に

公方様

大納言様 出御、土岐伊豫守様御奏者(願也)の、御敷居外

の御暇之御禮被仰上り處、西尾隠岐守様方國元への御暇被下、難有奉存り段御取合、夫にと上意有之、

御敷居之内に御進被遊り處、ゆるりと休息、馬をと

上意、隠岐守様御取合有之御退座、左りの御白書院御

縁類に御扣被遊、御老中様方御列座之節被蒙 上意、

御馬御拜領、家來之者 御目見被仰付り御禮被仰上、

隠岐守様方宗門之儀可被入念り、重る參勤之節人數少

可被召列旨被仰渡、御請被仰上御退座、直に 西御丸

に御登 城、御奏者内藤大和守様(願也)に御禮被仰上置、夫

より御老中様方に御廻勤被遊、若御年寄様方に老主殿

御使者、御側衆は老物頭御使者の御禮被仰達り、

一 右付、當日御内證よりの御禮

御守殿に表相伺、先例之通 御本丸に春井被差上

御兩公様に御禮被仰上、 菊姫様方の御禮及御一所に

被仰上り、

一 公方様

大納言様に 御前様より銘々御文を以御禮被仰上、御

勤相濟り、

一 隅州様右之段御承知之上、去ル十五日飛脚便に表申越

り通 上使を以御暇御給、御拜領物被遊

大納言様より表御拜領物被遊、十八日御禮被仰上り處、

御懇之被蒙 上意、御馬御拜領被遊り、御禮及被相込

り御文言の

御兩公様に御銘々御文を以御禮可仰上り、表向御勤に

及不申り間、被達 御聽御文貳通被差越りハ、日積

を以可差出り、

一 上使を以御暇御給

御兩公様より御拜領物被遊、御禮被仰上り節被蒙

上意、御馬御拜領被遊り段 隅州様御承知之上 姫君

様に御祝詞并御禮可被仰上儀に奉存り、且亦從 姫君

様 隅州様に御歡御口上書を以被仰進り、

隅州様 お榮様 お嘉久様に從 大守様御口上書被差

越り間、先例之通可被致首尾り、 (續貴國室、江田氏) 信證院様に老 御

意之趣早晚之通書狀を以各々に申越り、

一 右之通御禮首尾能被仰上、御拜領物被遊り付、當日御

役人老

御兩殿様に御祝儀申上、御家老致對面、諸士老當日又

老來ル廿一日兩日御帳相付、御祝儀申上替り、 隅州

様御方御祝儀帳追ふ可差上り、其元御祝儀先例を以可被申渡り、

一隅州様御女中様方へ、私共より今日便昨十八日之日付書状を以御祝儀申上り、

一御隣國爲御知先例を以被致首尾に有可有之り、

一主鈴儀

公方様 大納言様へ先例之通献上物仕

公方様 大納言様へ御目見被仰付、御役人様方へ御太

刀・馬代持参仕御禮申上り、

右申越り條 隅州様被達 御聽、御女中様へ及可被申

上り、御禮首尾能被仰上、御馬御拜領被遊、恐悦御同

意奉存り、以上、

〔寶曆三年〕

四月十九日

〔朱〕

嶋津主鈴

義岡相馬

嶋津主殿

〔朱〕

伊勢兵部殿

鎌田典膳殿

平田靱負殿

市來左中殿

1235

〔朱〕
一御返答

本文被申越越致承知、隅州様達 御聽、御女中様方へ

及申上り、御勤之御文貳通昨十三日之御日付被仰付、今

日便被差越り條、日積考之上可被差出り、 姫君様へ

隅州様より御口上書を以、今日便御祝詞御禮被 仰進り、

太守様へ御祝詞之儀者、御中途へ被仰進り、爰元御祝儀

隣國爲御知等之儀、先例之通致首尾へ、

姫君様 御前様 菊姫様 お喜代様へ、拙者共より今日

便御祝詞申上り、御暇之御禮首尾能被仰上、御馬御拜領

被遊、恐悦御同意奉存り、以上、

五月十四日

〔本文書ハ一二三四号文書ノ行間朱書ナリ〕

1236

重年公御譜中

扣正文在右筆所

私儀今度御暇被下置國元へ罷越り、未妻に男子無御座り

付、在國中若不慮之儀及御座り者、家督以前先妻に出生

之男子島津善次郎當酉九歳罷成、國元へ罷在り此者、跡

式無相違被仰付被下り様奉願候、以上、

寶曆三酉四月廿一日

松平薩摩守御書判

堀田相摸守殿

酒井左衛門尉殿

本多伯耆守殿

松平右近將監殿

西尾隱岐守殿

御口上之趣

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存_レ、御

自分様ニ及弥御堅固御勤珍重存_レ、私儀御暇被下置近日

發足仕管御座_レ付奉伺御機嫌_レ、依之在國中假養子書付

差上置申候、

四月廿一日

日付なし

右御用番之御老中西尾隱岐守様_ニ御持參被成_レ付御口上
之趣御覺_ニ上_ル、

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、

大納言様益御機嫌能被成御座、二月廿六日東叡山

(象重云、梅侯氏)

至心院様御靈前 御參詣之段被承之、恐悦旨尤_レ、紙面

之趣及言上_レ、恐_ク謹言、

(卷)
「實曆三年」 四月廿三日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

重年公御譜中

同年四月二十三日重年發_ニ江都芝邸_一、家老義岡相馬久中、

側用人二階堂林左衛門行通・澁谷喜三左衛門貫通・福山

平大夫安都_{安都以備用人途中、携行近習役之事}、近習役河野安之右衛門通古等屬

從焉、經_ニ東海・伊勢路之驛_一、五月八日著_ニ城州伏見假

館_{留止一日}、同十日出_ニ假館_一、駕_ニ船_一從_レ流下、著_ニ攝州大坂假

館_{留止二兩日}、同十三日出_ニ假館_一、駕_ニ船_一至_ニ尼ヶ崎_一、取_ニ路_一於播

州_一、同十六日著_ニ坂越_一、直乘_ニ船_一翌十七日開帆、同二十

七日夜著_ニ船日州細島港_一、然先_レ是細島失_レ火民屋大半燒

亡、故在_レ船三日、以待_レ所_ニ傳送_一之人馬_上而六月二日出_ニ

於船_一、陸行宿_ニ都濃_{秋月佐渡守、種美領内}、同三日宿_ニ都_{島津加賀守、忠雅領内}、

同四日入_ニ我日州高岡_{留止一日}、同六日宿_ニ高城_一、同七日宿_ニ

都之城_一、同八日宿_ニ福山_一、同九日自_ニ福山_一航_ニ廳府築地

亭_一、直入_ニ府城_一、乃使_レ番頭喜入安次郎久福爲_ニ謝恩使_一

赴_ニ東都_上、故久福取_ニ路_一於九州、解_ニ纜_一於豐前小倉著_ニ船

攝州大坂_一、經_ニ東海・伊勢路之驛_一、七月十一日到_ニ著江都

1240

芝邸、同二十八日久福應_二執政之奉書、捧_三重年之獻物
芭蕉布二十端・三種二荷、登_レ營拜_二謁
家重公

家治公於白書院、土岐伊豫守頼熙奏_二達之、久福亦尋
獻_二上御太刀一腰・馬代白銀一枚・紗綾二卷、再奉_レ拜_二
謁 台顏、井上河内守利容奏_二達之、既而又登_二西城
謁_三奏者衆永井伊賀守直陳於松之間、呈_二重年之獻物三種
二荷、久福亦親自呈_二上御太刀一腰・馬代白銀一枚、而
八月六日久福應_レ徵再登_レ營、執政西尾隱岐守忠尚召_二久
福於檜之間、手自附_二回答之奉書、且使_二奏者衆土岐頼
熙_三辱賜_二紗綾二卷於久福、同日又 西城之執政秋元但馬
守涼朝亦召_二久福於其第、手自附_二回翰、是故同二十八
日久福發_二芝邸、經_二東海之驛、自_二大坂_一駕_レ船航_二西海、
十一月六日還_二薩府_一復命、

重年公御譜中

扣正文在江戸家老座

當秋より於御料所、粗圍置候様被仰付_レ間、萬石以上
之面々、當秋收納之節より分限高壹萬石付粗千俵ツ
、圍置_レ様被仰出_レ、

1242

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲本多伯耆守可
述_レ也、

〔_采實曆三年〕

五月二日

家重公
墨印

1241

〔_采實曆三年〕 四月

一萬石以上江戸表廻米之儀、三年以來之石高御勘定所_レ
可被書出_レ、
右委細之儀者御勘定奉行_レ可被承合_レ、

〔_采〕堀田相摸守様被仰聞_レ御書付并松平阿波守様・松平陸
奥守様衆より之添廻狀、只今到來仕_レ付差上申_レ、右
式仰渡之節者、私共之内罷出 御中途_レ可申上旨御請、
跡々申上儀御座_レ間、此節_レ先例之通相摸守様_レ參上
御中途_レ可申上由御取次迄可申上_レ、此段申上_レ、以
上、

四月廿九日

〔_{鳥津久柄}〕

主殿様

山澤小左衛門
〔_{盛福}〕

松平大隅守殿

1243 全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外
處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱)
「寶曆三年」 五月二日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1244 重年、公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲本多伯耆守可
述外也、

(朱)
「寶曆三年」 五月二日

家重公
墨印

薩摩少將殿

1245 全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外
處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱)
「寶曆三年」 五月二日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1246 重年、公御譜中

正文在文庫

返々御國元にて

隅州様御機嫌よく御座あそハし外御事、御同前ニ御
めてたくよろしく存まいらせ外、御もしさまこも
折から々御安全にて御旅行被成りやうこと御めて
たくそんしまいらせ外、めてかしく、

御ふみのやういよ々御安全の御事にて、たん々御旅
行なされ外よし、めてたくそんしまいらせ外、さては御
もしさま御ほつ駕こ付

公方様より 上使にて拜領物いたし外御事、御承知にて
御よろこひ仰被下、忝さ何も々ありかたき御事にそん
しまいらせ外、めてたくかしく、

(朱)
「寶曆三年」

まつたいら

薩摩守殿

御返事

(竹姫・慈豊緒室)
竹

1247 全上

なをくこなたにて御揃にて無事にて御さふらいま
いらせり、折かくく御安全にて御旅行被成りやう
ことそんしまいらせり、山御越今切御わたしの事こ
たんく御左右にてうけ給、いかほとくうれしく
存まいらせり、めて度かしく、

御ふみ被下、忝そんしまいらせり、いよく御安全にて
たんく御旅行被成り御事、めてたくそんしまいらせり、
扱は先月廿六日に

公方様方 上使松嶋殿にて御拳の鶴拜領いたし、忝さ右
御承知にて御よろこひ仰被下、何もかたしけなくそんし
まいらせり、御國元にて

隅州様御機嫌よく御座あそハしり御事、御同前に御めて
度御嬉しくそんしまいらせり、めてたくかしく、

(朱)
「實曆三年」

まつ平
薩摩守殿
御返事

竹

重年公御譜中

扣正文在江戸家老座

當秋より糶圍置り儀、且三年以來廻米之儀、書出り様堀

田相摸守様より被仰渡趣承知仕り、旅中薩摩守方に申越、
於國許相糶何分可申上り、暫延引可仕と奉存り、此段申
上置り、以上、

五月五日

御名内

山澤小左衛門

(朱)
「書附壹通」

但當秋より糶圍置り儀、江戸廻米高可被仰出旨被仰渡り付、
御國元ニ而被相糶り間御延引之御届」

(朱)
「御勘定組頭」

依田茂八郎様

佐久間郷右衛門様

右老御勘定所に罷出、當秋より糶圍置り由、且又三年
以來江戸廻米高可申上旨、堀田相摸守様より被仰渡
承知仕り、御中途に申上御國元之石高相糶何分可申上
り、暫延引可仕由申上、御届之書付差出り處、御受取
御奉行に可被仰上置り、御國元より御到來次第可申出
由承知仕り、

一糶壹俵斗數且又萬石餘分之御知行ニ及、割合を以糶被
圍置り哉之旨御尋申上候處、是又御奉行に被仰出、追
可被仰聞由承知仕り、

右之通首尾申上外、以上、

五月五日

山澤小左衛門

主殿様」

1250 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、今度

大納言様御前髪被爲執外段被承之、目出度被存由得其意

外、紙面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

(巻) 「寶曆三年」 五月十九日

酒井左衛門尉

忠寄判

松平大隅守殿

1251 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、今度

大納言様御前髪 本ノマ、 執外段被承之、目出度被存由得其意外、

紙面之趣及言上外、恐々謹言、

(巻) 「寶曆三年」 五月十九日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1252 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、去月八日東叡山

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申

談及 上聞候、恐々謹言、

(巻) 「寶曆三年」 六月朔日

酒井左衛門尉

忠寄判

松平薩摩守殿

1253

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

亦其方多年就病氣於國許養生被在之外、當夏迄御暇被下

置外處、今以不相勝付來夏迄罷在、得と養生被致度段同

氏薩摩守相願外處、願之通被 仰出、難有由得其意外、

紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

(巻) 「寶曆三年」 六月十六日

松平右近將監

武元判

松平大隅守殿

1254 全上

御札令披見^レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^レ、將又其方儀多年就病氣於國元入湯養生有之^レ得共、今以不相勝^レ付、來夏迄罷在、養生被致度段同氏薩摩守相願^レ處、願之通被 仰出、難有由得其意^レ、紙面之趣令承知^レ、恐^レ謹言、

(米) 「寶曆三年」 六月十六日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1255 繼豊公御譜中

於^二東叡山^一修^二

^(吉恋) 有徳院殿三回忌之法事、故繼豊以^二使者^一今茲寶曆三年六月二十二日獻^二納御香奠白銀二枚^一矣、

1256 重年公御譜中

今茲自^二六月十七日^一至^二同十九日^一

將軍家見^レ修^二

有徳院殿三回忌之梵儀於東叡山、故同二十二日重年使^レ

用人諏訪甚兵衛兼方以^二番頭^一獻^中納香奠白銀十枚于

尊靈前^上 此日繼豊使物頭町田孫七實純獻^中納香奠白銀二枚、夫人使目附上村藤之丞上 行中假以納殿役人獻^中納香奠白銀一枚、猶姫使御守殿添御用達梅田老兵衛盛庸獻^中納香奠、白銀一枚也

1257 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見^レ、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤^レ、紙面之趣各申談及 上聞^レ、恐^レ謹言、

(米) 「寶曆三年」 六月廿六日 本多伯耆守 正珍判

松平大隅守殿

1258 全上

御札令披見^レ、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌被相伺之^レ、益御勇健御儀^レ間、可御心易^レ、隨^レ齎節一箱被獻之^レ、遂披露^レ之處一段之御仕合^レ、恐^レ謹言、

(米) 「寶曆三年」 六月廿七日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1259 全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌被相伺之、益御安全御儀外間
可御心易外、隨之麴節一箱被獻之、各申談遂披露外處
一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱) 〔寶曆三年〕 六月廿七日 松平右近將監 武元判

松平大隅守殿

1260 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺外、益御安全御儀
外間可御心易外、隨之琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・
赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之、各申談遂披露
外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱) 〔寶曆三年〕 六月廿七日 松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

1261 全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺外、益御勇健御儀
外間可御心易外、隨之琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・
赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之、遂披露外之處
一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱) 〔寶曆三年〕 六月廿七日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1262 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之、遂披露外處一段

之御仕合外、恐々謹言、

(朱) 〔寶曆三年〕 七月六日 西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

1263 全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆三年」
七月六日

松平大隅守殿

秋元但馬守
涼朝判

1264 重年公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆三年」
七月六日

西尾隱岐守
忠尚判

松平右近將監
武元判

本多伯耆守
正珍判

酒井左衛門尉
忠寄判

堀田相摸守
正亮判

松平薩摩守殿

1265 全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆三年」
七月六日

松平薩摩守殿

涼朝判

1266 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又爲端午之御祝儀、時服并御着拜領之、難有由得其意外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆三年」
七月九日

松平大隅守殿

堀田相摸守
正亮判

1267 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又爲端午之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意、紙面之趣及言上、恐、謹言、

〔寶曆三年〕 七月九日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1268 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、五月八日東叡山

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤、紙之趣各申談

及 上聞、恐、謹言、

〔寶曆三年〕 七月十五日 堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

1269 繼豊公御譜中

今度

有徳院様三回御忌御法事御執行付、以使者御香燹被獻之、於東叡山奉納之事、右之趣及言上、恐、謹言、

〔寶曆三年〕 七月廿日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

1270 重年公御譜中

正文在文庫

今度

有徳院様三回御忌御法事御執行付、以使者御香燹被獻之、於東叡山奉納之事、右之趣及言上、恐、謹言、

〔寶曆三年〕 七月廿日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平薩摩守殿

1271 全上

扣正文在江戸家老座

午年 一米九千八百八拾石餘

未年 一同九千九百貳拾石餘

申年 一同七千九百五拾石餘

右者先達被仰渡、江戸廻米三ヶ年之石高、薩摩守用分并家中飯料右之通御座、此節國元より申越、

此段申上、以上、

〔寶曆三年〕 七月廿一日 松平薩摩守内 佐久間源太夫

〔朱〕
書附壹通

但江戸御廻米三ヶ年石高御用分御家中飯料御尋付」

〔朱〕
御勘定組頭

〔大〕
大塚權之助様

右今日 御城大手後御勘定所罷出、最初山澤小左衛門
江被仰聞外御首尾考、組頭衆依田茂八郎様・佐久間郷
右衛門様江御取合申上可差上旨相達外處、御兩人當分
御病氣ニ由御出勤無之、依之右權之助様御請取可被成
外間、可扣居旨承知仕、權之助様被成御逢、右御届書
付被成御受取外由致承知外、私相勤外首尾申上外、以
上、

七月廿一日

佐久間源太夫

主殿様」

(表紙)

繼 豐 公

實曆三年 自八月
至十二月

重 年 公

追 舊 記 雜 錄 卷百六

1273 重年公御譜中

正文在文庫

貴翰拜見仕外、最前被仰聞外薩摩國加世田村之沖に漂來之廣南出唐船一艘、警固之者御添被成被遣之、委曲御紙上之趣承知仕外、恐惶謹言、

(卷) 「實曆三年」 八月二日 (發給奉行) 大橋近江守 親義判

松 薩摩守様 参貴答

1274 全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(卷) 「實曆三年」 八月四日

西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

(多) 本田伯耆守 正珍判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

1275 全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(卷) 「實曆三年」 八月四日 (秋元但馬守) 涼朝判

松平薩摩守殿

1276 全上

御札令披見外、

1277

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又今度御暇、白銀・巻物頂戴之、其上御馬被下之、從
大納言様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、國許到着

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又今度御暇、白銀・巻物頂戴之、其上御馬被下、從
大納言様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、國許到着
付而爲御禮、以喜入安次郎琉球芭蕉布二十端并御樽肴被
獻之外、遂披露外處

御前江被召出之、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆三年」
八月六日

西尾隱岐守
忠尚判

松平右近將監

武元判

本多伯耆守

正珍判

酒井左衛門尉

忠寄判

堀田相摸守

正亮判

松平薩摩守殿

1278

付而爲御禮、以喜入安次郎如目錄被獻之外、遂披露外處
御前江被召出、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆三年」
八月六日
松平薩摩守殿

秋元但馬守
涼朝判

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又今度日光山

御宮御修復出來

正遷宮相濟外段被承之、目出度被存由得其意外、紙面之
趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆三年」
八月七日
西尾隱岐守
忠尚判

松平大隅守殿

1279

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

亦今度日光山

御宮御修復出來 正遷宮相濟外段被承之、目出度被存由

得其意外、紙面之趣及言上候、恐々謹言、

(卷)
「寶曆三年」 八月七日 秋元但馬(マ) 涼朝判

松平大隅守殿

1280 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將

又今度日光山

御宮御修復出來 正遷宮相濟外段被承之、目出度被存由

得其意外、依之被差越使者外、紙面趣各申談及 上聞外、

恐々謹言、

(卷)
「寶曆三年」 八月七日 西尾隱岐守 忠尚判

松平薩摩守殿

1281 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤外、將

又今度日光山

御宮御修復出來 正遷宮相濟外段被承之、目出度被存由

得其意外、依之被差越使者外、紙面趣及言上外、恐々謹言、

(卷)
「寶曆三年」 八月七日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1282 重年公御譜中

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悅奉存外、然

者去年琉球中山王使者差上候處、首尾好 御目見被仰付、

御懇之蒙 上意、其上品々被下之并使者從者迄拜領物被

仰付、重疊難有仕合冥加之至奉存外、依之御禮申上度奉

存、今般以使者湊川親方、書翰并献上物鹿兒嶋迄差越申

外、彼使節留置、從是以使者右品々指上之申外、可然様

御執成所仰候、恐惶、

(卷)
「寶曆三年」 八月十六日 「佐々木様御案文」 江戸御用紙調

1284

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披閱外、如來意日光山

御宮御修復出來 正遷宮相濟日出度御事外、依之御念入

外段欣然之至存外、恐々謹言、

1283

重年公御譜中

大納言樣御方

秋元但馬守樣

人々

去歲琉球中山王尚穆遣_二謝恩使今歸仁王子於東都_一、使職

既畢還_二琉國_一、是故今茲尚穆使_下湊川親方齋_乙所_レ獻_二於

幕府_二之書翰及獻物_甲來_中薩府上、從_二先躰_一八月二十一日使_下

家臣村田藤兵衛經芳_馬馳_二東都_一傳_中獻之 柳營上矣、

1285

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方樣益御機嫌能被成御座、今度

(徳川吉宗)有徳院樣三回御忌御法事於東叡山御執行相濟、六月廿日

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、依之被差越使

者外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

(朱)「寶曆三年」

八月廿八日

西尾隱岐守

忠尚判

松平大隅守殿

1286

全上

御札令披見外、

大納言樣益御機嫌能被成御座、今度於東叡山

有徳院樣三回御忌御法事御執行相濟、六月廿一日 御靈

前 御參詣之段被承、恐悦旨尤外、依之被差越使者外、

紙面之趣及言上外、恐々謹言、

(朱)「寶曆三年」

八月廿一日

尾張中納言

宗勝判

薩摩少將殿
御報

(朱) 「寶曆三年」 八月廿八日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

有徳院様三回御忌御法事於東叡山御執行相濟、六月廿日

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、依之被差越使

者外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

(朱)

「寶曆三年」

八月廿八日

西尾隠岐守

忠尚判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

大納言様益御機嫌能被成御座、今度於東叡山

有徳院様三回御忌御法事御執行相濟、六月廿一日

本ッ、

御靈前 御參詣之段被承之、恐悦旨尤外、依之被差越使

者外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

(朱) 「寶曆三年」 八月廿八日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

全御譜中

扣正文在江戸家老座

寫

灰吹銀・潰銀等銀座之外他所ニ有賣買停止之旨前々相觸、

銀道具・下銀入用之者老銀座ニ有可買請旨、去ル亥年及

相觸外處、又々猥相成外段相聞外、且町方ニ有銀櫛・弁

其外銀器類專相用外旨相聞不埒外、以來右躰之無益之銀

道具拵外儀一切致間敷外、

右之通堅可相守、若内々ニ有致賣買外者於有之者、急

度可申付外、

(朱)

「寶曆三年」

酉八月

右之通可被相觸外、

(朱) 「大御目附様御廻狀并御書付寫壹通、細川越中守様・松平大臈

大夫様衆より添廻狀持廻ニ而到來仕外間、寫差上申外、以上、

九月廿三日

山澤小左衛門

主鈴様」

御札令披見外、

重年公御譜中
正文在文庫

1293

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之、益御安全御儀外間

可御心易外、随、干鯛一箱被獻之候、各申談遂披露外處

一段之御仕合外、恐、謹言、

〔悉〕

〔實曆三年〕

九月六日

本多伯耆守

正珍判

松平大隅守殿

1292

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之、益御勇健御儀外間

可御心易外、随、干鯛一箱被獻之、遂披露外之處一段

之御仕合外、恐、謹言、

〔悉〕

〔實曆二年〕

九月七日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1295

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲堀田相摸守可

述外也、

〔悉〕

〔實曆三年〕

九月七日

家重公
墨印

1294

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之、益御安全御儀外間

可御心易外、随、干鯨殘魚一箱被獻之、遂披露外之處

一段之御仕合外、恐、謹言、

〔悉〕

〔實曆三年〕

九月七日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

松平大隅守殿

1296 全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之、遂披露、
處一段之御仕合、恐、謹言、

(采) 「寶曆三年」 九月七日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1297 重年公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲堀田相摸守可
述べ也、

(采) 「寶曆三年」 九月七日



薩摩少將殿

1298 全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之、遂披露、
處一段之御仕合、恐、謹言、

(采) 「寶曆三年」 九月七日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1299 重年公御譜中

扣正文在文庫

寫

(忠) 嶋津周防殿一所之地

一重富

右始羅郡に被相付、

嶋津因幡殿一所之地

一今和泉

右揖宿郡に被相付、

右之通此節被相究、右兩所に相懸り何そ、付

公邊に被 仰出儀共、餘外城右躰入交、諸所同前、

古來より被定置、郷村之通、可有之間、此旨御勝手方

に相達、御記録奉行・郡奉行に可申置、

(采) 「寶曆三年」 九月 (伊勢貞起) 兵部

1300 重年公御譜中

扣正文在江戸家老座

當秋より高壹萬石付、粃千俵、相圍候様、先達、被仰

1302

物成江戸廻米高之内、當酉年より亥年迄三ヶ年之間貳分

重年公御譜中
扣正文在江戸家老座

右に持參仕差上申外處御請取置、追可被成御挨拶由
右庄兵衛を以被仰聞外、此段申上外、以上、
九月廿五日
山澤小左衛門(盛徳)
主殿様

1301

御書付一通(朱)

但琉球國取納早、當年老圍糶相調不申候付、如何可
被成哉之儀、

堀田相摸守様
御用人

春日井庄兵衛

「寶曆三年」九月十九日
(島津重年)
御名

渡り、然老琉球國之儀老夏中收納仕、其上右時節通船罷
成不申候付、當年之儀老、何分ニ老圍糶仕外儀相調不申
外、如何可仕哉、薩摩・大隅・日向之國知行高之内、
糶圍置外様ニ老可仕哉、此段相窺申外、以上、

1304

物成江戸廻米高之内、當酉年より亥年迄三ヶ年之間貳部通
可相減旨被仰渡り、先達を申上外通薩摩守廻米御當地ニ

全上
扣正文在江戸家老座

御同人被仰聞外、此段申上外、以上、
九月廿三日
山澤小左衛門(島津久朝)
主殿様

1303

通相減外様可被致り、
(朱)
「寶曆三年」九月

御勘定奉行(朱)

一色周防守様(政統)
大井伊勢守様(瀧秀)

右より被仰聞儀外間、今日御勘定所に罷出旨被仰下、
私罷出申外處、物成江戸廻米高當年より亥年迄三ヶ年二
分通被相減外様と、伊勢守様御直ニ被仰渡、御書付被
成御渡り付差上申外、右付先立る被仰渡り通、江戸廻
米老、爰元御用分被差廻儀御座候、右ニ老被相減事
ニ御座外哉と御尋申上外得老、追可相伺外様可仕旨、

之之用事并家中飯料迄差廻、賣米無御座也、右之表相減申儀御座也哉、此段承知仕、國本に申越度奉存也、以上、

上、

〔卷〕
「寶曆三年」

九月廿八日

御名内

山澤小左衛門

1305

〔卷〕
「書付一通」

但江戸廻米・御拂米無之、御用分并御家中飯料迄被差廻り、右之表貳分通り被相減也哉之儀、

「御勘定與頭」

小木藤助様

右者御勘定所にて罷出、藤助様にて懸御目、書付差出申也處、被請取置、御奉行に可被仰上り、追而御奉行方御挨拶可有御座旨承知仕也、此段申上り、以上、

九月廿八日

山澤小左衛門

「主殿様」

1306

重年公御譜中

在白木御文書五番箱中十五

正文在文庫

寶曆三年酉九月廿日

重年公於御廣庭御馬被爲召、比志嶋彦一被召出拜見被仰付候、右相濟、於御茶屋彦一に御羽織拜領被仰付、御暇被下罷歸、今日

御暇被下罷歸、今日

重年公御馬被爲召拜見被仰付也處、別而御上達被遊り、尤御流儀之儀者不殘兼而御傳授申上置候、依之

吉貴公より

宗信公に御傳授被遊置候神當流馬書、都而

重年公御讓之筋、拙者より可達

御聽旨彦一より申付候付、同廿四日右之段

重年公達 貴聞候、其節

御前に嶋津久隣に被相詰り、仍爲後證如件、

寶曆三年

酉九月廿八日

村上彦八

範村判

1307

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見也、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤也、然

者去年琉球中山王使者差渡り處、首尾能

御目見、其上品に被下之、且亦使者從者迄拜領物被仰

付、重疊難有由得其意也、依之爲御禮其國迄以湊川親方、

書翰并目錄之通獻上付面、以使者被差越之遂披露、則返翰遣外條可被相達、恐、謹言、

(奉) 〔寶曆三年〕 十一月六日

西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

1308 全上

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、然者去年琉球中山王使者差渡、首尾好 御目見、其上品、被下之、且又使者從者迄拜領物被 仰付、重疊難有由得其意、依之爲御禮其國迄以湊川親方、書翰并目錄之通獻上付面、以使者被差越之遂披露、則返翰遣外條可被相達、恐、謹言、

(奉) 〔寶曆三年〕 十一月六日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1309 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又參勤時分之儀以使者被相伺、紙面之趣令承知候、恐、謹言、

(奉) 〔寶曆三年〕 十一月七日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1310 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又爲重陽之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其意、紙面趣各申談及 上聞、恐、謹言、

(奉) 〔寶曆三年〕 十一月十一日 松平右近將監 武元判

松平大隅守殿

1311 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又從

公方様爲重陽之御祝儀、時服并御着拜領之、難有由得其

意候、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆三年」十一月十一日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1312 重年公御譜中
正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間

可御心易外、隨而小熬海鼠一箱被獻之外、各申談遂披露

外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆三年」十一月十三日 松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

1313 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間

可御心易外、隨而小熬海鼠一箱被獻之外、遂披露外之處

一段之御仕合外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆三年」十一月十三日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1314 重年公御譜中
正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將

又參勤時分之儀以使者被相伺之外、及 上聞外處、來年

七月中可致參府由被

仰出外條可被存其趣外、恐々謹言、

〔卷〕
「寶曆三年」十一月廿五日 西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

1315

松平薩摩守殿

酒井左衛門尉
忠寄判
堀田相摸守
正亮判

重年公御譜中

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、

公方様 大納言様益御機嫌克被成御座、恐悦奉存外、然者

(家治室、五十宮倫子)
姫宮様御事

大納言様江御入興之儀、先月十一日御弘被 仰出外、段承

知仕、誠以目出度御事不可過之奉存外、右御祝儀爲可申

上呈使札外、恐惶、

(卷)
「寶曆三年」十二月六日

堀田相摸守様

酒井左衛門尉様

本田伯耆守様

松平右近將監様

西尾隱岐守様

人、御中

1316

大納言様御方
秋元但馬守様
人、御中

継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將

亦十月十五日

竹姫君様被爲 入外節、菊事御懇之蒙

上意、從

公方様 大納言様拜領物被 仰付、從

姫宮様被遺物有之、重疊難有由得其意外、紙面之趣各一

覽之事外、恐々謹言、

(卷)
「寶曆三年」十二月十三日 西尾隱岐守 忠尚判

松平大隅守殿

1317

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又十月十五日

竹姫君様被爲(續豐緒卷) 入外節、菊事御懇之蒙

上意、從

公方様 大納言様拜領物被 仰付、從

姫宮様被遺物有之、重疊難有由得其意外、紙面之趣令承

知外、恐々謹言、

(卷) 「寶曆三年」

十二月十三日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1318 重年、公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又十月十五日

竹姫君様被爲 入外節、菊事御懇之蒙

上意、從

公方様 大納言様拜領物被 仰付、從

姫君様被遺物有之、重疊難有由得其意外、紙面趣各一覽

之事外、恐々謹言、

(卷) 「寶曆三年」

十二月十三日

西尾隱岐守

忠尚判

松平薩摩守殿

1319 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又十月十五日

竹姫君様被爲 入外節、菊事御懇之蒙

上意、從

公方様 大納言様拜領物被 仰付、從

姫宮様被遺物有之、重疊難有由得其意外、紙面之趣令承

知外、恐々謹言、

(卷) 「寶曆三年」

十二月十三日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿

1320 全上

なをく御表より御禮御申上被成りへとも、御ふみ

の趣よろしく申上まいらせ外、めてたくかしく、

十一月十一日附にて御ふみ下され外、

公方様 大納言様ますく御機嫌よく成らせられ、御め

てたく思召なされ外由、しかれは年頭の御祝儀として、

先月十五日大おくへ

竹姫君様御登 城あそハしりニ付、菊姫方御事 御上り
被成り所ニ、御懇の 上意にて

公方様 大納言様 姫宮様方御拜領もの仰付させられ、
(田安宗武) 右衛門督様 (二橋宗尹) 刑部卿様 (清水重好) 萬次郎様よりもつかハされ、有

かたく思召被成りよし、且又御家來へ御料理被下、拜領
物 仰付させられ、召つれられり女中 御目見 仰付さ
せられ、御料理下され、拜領物 仰付させられ、御見送
として春井・山野上られり所に 御目見仰付させられ、
御料理下され、拜領もの仰付させられ

大納言様方も御家來女中へ、はい領物仰付させられ、重
疊有かたく思召被成り由、右の御禮御申上被成り御文の
おもむき、よろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

(朱)
「寶曆三年」

1321 全上

なをく何もよろしく申あけまいらせり、めてたく
かしく、

十一月十一日附にて御文下されり、
公方様 大納言様ますく御機嫌よくならせられ、御目
出度思しめしりよし、扱ハ先月十五日大奥へ
竹姫君様御登 城被遊り所

公方様 大納言様 姫宮様方段々御懇の御事にて品々被
進、さてまた御登 城に付、菊姫方御事御同道あそハし
り様こと 仰出させられり御事も御承知被成、御手前様
ニ置、有かたく思しめしりよし、右の御禮

大納言様へ御申上被成りとをり、よろしく申あけまいら
せり、めてたくかしく、

(朱)
「寶曆三年」

松しま

岩はし

うら尾

たきつ

さえた

松平

薩摩守様

御返事

人々御中

松平

薩摩守様

御返事

人々御中

松しま

岩はし

うら尾

たきつ

さえた

1322 重豪公御譜中

同三年癸酉冬十二月十五日、善次郎元（重豪）服（謂之）於薩府、
重年公親自加冠命曰「兵庫久方（時九）、乃賜脇刀一腰（治平）、
安広、長巻、國老新納内藏久品勤三理髮、
尺寸五分

1323 〔采〕
〔近秘野卿重豪公御傳中〕

寶曆三年癸酉初（重年）圓徳公爲兵庫久季後至、慈徳公（宗徳）薨無
子可嗣、圓徳公入襲封爵命（重孝）大信公嗣久季後、於是十
二月十五日 圓徳公手加之冠、新納内藏久品理髮、乃名
久方稱兵庫、前此 圓徳公還自江戸未有他子、故以元配
子既告 大府、假爲儲嗣（善次郎）、所謂假養子也、

1324 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御勇健御儀外間
可御心易候、隨而鯛一箱被獻之外、各申談遂披露外處一
段之御仕合外、恐々謹言、

〔寶曆三年〕
十二月十六日

西尾隱岐守
忠尚判
松平大隅守殿

1325 全上

御札令披見外、就寒中
公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御勇健御儀外間
可御心易外、隨而鯛一箱被獻之外、遂披露外處一段之御
仕合候、恐々謹言、

〔采〕
〔寶曆三年〕
十二月十六日

秋元但馬守
涼朝判
松平大隅守殿

1326 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見候、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之候、益御安全御
儀外間可御心易外、隨而琉球紬十端并鏝節一箱被獻之候、
各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕
〔寶曆三年〕
十二月十六日
西尾隱岐守
忠尚判

松平薩摩守殿

1327 全上

御札令披見外、就寒中

1329

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨
ゝ蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕
合外、恐々謹言、

松平薩摩守殿

十二月十八日

西尾隱岐守

忠尚判

1328

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨
ゝ蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

松平薩摩守殿

十二月十六日

秋元但馬守

涼朝判

1330

重年公御譜中

正文在文庫

一筆令啓達外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座外間可御心易候、
將又御鷹之鶴拜領外條、以宿次差越之外、恐々謹言、

〔寶曆三年〕 十二月廿五日

西尾隱岐守

忠尚判

松平右近將監

武元判

本多伯耆守

正珍判

酒井左衛門尉

忠寄判

堀田相摸守

正亮判

松平薩摩守殿

1331

重年公御譜中

寶曆三年癸酉十二月二十五日、執政西尾隱岐守忠尚以二奉

〔寶曆三年〕 十二月十八日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

書^一、命^下治^二美濃・伊勢・尾張之諸川^一助役於重年上、在邸

之家老告^二之重年于藩^一、於是重年命^二家老平田靱負正輔、

大目附伊集院十藏久東^一之領^レ事、同四年正月二十一日留

守居山澤小左衛門盛福、普請奉行川上彦九郎親英及諸吏

步行士發^二東郡邸^一至^二於美濃大牧村^一、二月五日受^レ置^レ役

館之地於^二台家有司上^一、假^二富農本藩兵内之家^一修^レ購^レ爲^レ之役^一也、是、
同^二本木邸^一正輔、久^レ等視^レ見^レ之所也

二十九日正輔發^二鷹府^一、同晦日久東亦發、各經^二小倉路^一

駕^レ船、二月十六日至^二大坂^一、預計^二助役之費用^一、大抵金

三十萬兩也、是芝邸之所^レ傳也、以故正輔・久東在^二大

坂・伏見^一與^二藩邸留守居^一、京都上原十郎方衛門助令・大坂久等^一議^二用

金於銀師^一、假^レ金取^レ息而頼^レ我者是^二白^一立人之銀師^一、後^二念^一計^二雜費^一銀老万三千

兩也、借^二銀師^一、余因^二西及叔^一三士度^一以充^レ之、閏一月六日發^二伏見^一、同九日至^二大牧村^一、

用人掘堀右衛門貞紀、物奉行石川正右衛門長澄・山元藤

兵衛秀周、目附村田五右衛門經芳・中村與太夫種曉・肥

後八右衛門盛望^一・中村八兵衛種香・大脇彌五右衛門爲名・

土岐市左衛門賀充^一、ノリミツ土岐次郎八常房、郡奉行大野傳兵衛

清純・黒田次郎兵衛清安・町田正左衛門實有・面高善右

衛門英常・三原善兵衛經方・淵邊良右衛門元苗、馬廻三

原九兵衛經傳・永田新五兵衛良起・田中孝右衛門守邦・

家村彦左衛門住矩・山口佐左衛門興通・有馬正左衛門純

春・高橋半藏種常・平田長兵衛正央・園田佐次兵衛實房・

江田源助兼富・野村八郎右衛門盛香、新番永山與三右衛

門盛富・木藤彦左衛門成昌・弟子丸小右衛門弘增・本田

次兵衛親富・澁谷次郎太國福・岸良彌右衛門兼張・荒武

藏右衛門祐壽・丸田金左衛門實元・伊東藤五郎祐養・高

城六右衛門貞朋・兒玉新藏實興・新納藤右衛門時峯・友

野五郎右衛門長堅・柏原彌太右衛門公明・伊地知越右衛

門季達・税所次郎右衛門篤仁其外諸吏・步行士及輕卒・

丁夫發^二鷹府^一、用人諏訪甚兵衛兼方、近習役伊地知新太

夫季周、留守居佐久間源太夫盛邦、目附愛甲源左衛門季

平、馬廻横山新右衛門安當・川上喜藤太親毗・川田次右

衛門國中・比志島孫左衛門國泰・岩切六右衛門壽資、新

番平田善大夫正應^一、永田佐左衛門良金・國分藤之丞友相・

有川七左衛門貞典・大島孫右衛門有情・富山彌右衛門儀

安・長束市郎右衛門政憲・是枝長右衛門快滿・山田覺太

夫眞明・川上安左衛門親常^一、ノシテ二階堂與右衛門當行及諸吏・

步行士發^二東郡邸^一相屬^一至、而芝邸以^二總奉行正輔、副奉

行久東、用人貞紀・兼方、近習役季周、留守居盛邦・盛

福、普請奉行親英、キトシメ元占役長澄・秀周、目附季平・經芳、

場所奉行清純・清安我從^レ役之有司、聞^二于執政堀田相模

守正亮、御勘定奉行一色周防守政沅^一也^{各以其職}、所^二其

治^一之水也最東者曰^二木曾川^一、在^二其次^一曰^二長良川^一、在^二

其次^一曰^二伊尾川^一、在^二其次^一曰^二段海川^一、在^二其次^一曰^二牧

田川^一、五水南流數會數分、其外諸流溉^レ之者亦多焉、木

曾川分爲^二、東分爲^二佐屋川^一、西分稱^二木曾川^一、長良川分

爲^二、其東分者會^二木曾川^一、西分者稱^二大檜川^一會^レ於伊

尾・段海・牧田三水之會流^一、是爲^二伊尾川^一而又溉^二木曾

川^一、又分爲^二其西分爲^二桑名川^一、東分者會^二佐屋川^一而

分爲^二三、其東分稱^二筏川^一西分稱^二加路戸川^一、中流稱^二鍋

田川^一、以上營事之所^レ繫也^{依俗南北十四五里東西一里或四五里隨配}、水大豈諸州

所^レ在哉、水間造^二防隄^一爲^二村落^一者稱^二之某輪中^一、而其間

起^レ隄設^レ堰^一以塞^二水路^一、鑿^レ地以引^レ水、壘^二石屯^一作^二

水柵^一以防^二水衝^一、浚^レ川修^二閘^一、有^二新起者^一有^二

仍^レ舊增減者^一、有^二補損者^一、所^二其營^一不可^レ敢枚舉^一也、

而石野^三三次郎^{御目}・高木新兵衛^{交代寄合}所^レ治自^二濃州桑原輪

中^一至^二尾州神明輪中^一、是稱^二一之手^一、大久保荒之助^{御目}・

青木次郎九郎^{美濃御}所^レ治自^二尾州梶島村^一至^二勢州田代輪

中^一、是稱^二二之手^一、淺野左膳^{御目}・高木内膳^{交代寄合}所^レ治

自^二濃州墨俣輪中^一至^二同國本阿彌輪中^一、是稱^二三之手^一、

新見又四郎^{御目}・高木玄蕃^{交代寄合}所^レ治自^二勢州金廻輪中^一

至^二同州海落口濱地藏邊^一、是稱^二四之手^一、各有^二所^レ從之

吏^一、吉田休左衛門^{代官}爲^二普請見廻^一、我亦置^二役館於石

田・金廻・太田・大藪等^{是日由}各^二騎馬步行士^一應^二其

指揮^一焉、以下及^二夏月暑雨之時^一則山上之雪漸解、水勢滋

盛^一不可^レ復治^一、便起^二事于二月二十七日^一先治^二所^レ其急^一

之處^一、至^二五月二十二日^一止、而諸有司各歸焉、同年九月

二十一日初所^レ來之有司及御勘定頭倉橋武右衛門等來、

起^二事於同二十二日^一至^二翌年三月二十八日^一遂成矣、御目

附牧野織部、御勘定吟味役細井九助等自^二東都^一來、與^二諸

有司^一共自^二四月十六日^一至^二五月二十二日^一點^二檢其成者^一

以爲^レ可^レ復^二是事^一、是日^二出來見分^一、而我從役衆歸^レ藩或至^二

東郊邸^一、正輔去歲在^二疾未^一復、今又病^二積聚^一在^二床褥^一而

尚視^レ事、五月二十四日歐^レ血數、二十五日死矣、即夜輿^二遺

骸^一至^二伏見^一而葬^二大黒寺^一、二十六日久東發^レ行、六月六

日至^二東郊邸^一、十三日執政奉書重年親戚代^二重年^一登^レ營

就^二中酒井左衛門尉忠寄述^一、高命^二曰^一、以下助^二治川^一之功

成^レ上時賜^二時服五十^一也、而定多復至^二執政各邸^一拜^二謝^一、高

恩^一、九月五日正亮傳^レ令召^二從役之臣十三人^一、初以家臣十四人之

餘^二于^一營^一、所^レ賜各有^二差^一、載詳^レ後、

此所ニ治川ノ各所繪圖アレトモ略ス

(註、治水關係文書・記事中大樽川は大樽川の編者誤記なり)

1332 全御譜中

正文在文庫

濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳被仰付外間、可被存其趣外、尤此節不及參府外、恐々謹言、

(奉)

「寶曆三年」十二月廿五日

西尾隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

1333 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲西尾隱岐守可述外也、

(奉)

「寶曆三年」十二月廿七日



1334 全上

松平大隅守殿

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之、遂披露外處一段之御仕合候、恐々謹言、

(奉)

「寶曆三年」十二月廿七日

秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1335 重年公御譜中

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲西尾隱岐守可述外也、

十二月廿七日



薩摩少將殿

1336 全御譜中

扣正文在家老座

今度濃州・勢州・尾州川々御普請付、御勘定奉行一色

(奉)「御返答

周防守様并御目付様御用被仰付旨、一昨廿七日別紙之

本文被越申趣一々承知、別紙相摸守様より仰渡之御書付其外相添

1337

通被仰渡候付、周防守様は則晩若下佐次右衛門差越、
達首門左之通御返寄申越候御用人高坂專右衛門に取合、此度濃州・勢州・尾州川
 々御普請御手傳被仰付旨御奉書被成御渡り付、則國元
 に申越候、右付御用係今日周防守様は被仰付り由致承
 知り、諸事不案内之儀御座り間、萬端御差圖被成可被
 下り、此段申上り様こと家老共申付、致伺公り由申達、
 左り致演説り者、來年何月比より御普請御取付御座
 り哉、御留守中之儀候得者御家中別り少人數に被差
 置り、出火之節 御守殿御除場其外火消方に相掛り人
 數迄に、其内を何程減りるを御普請場に差越り人數
 相調不申積に故、早く御國元は申越り、遠國之儀に
 り得者、何程差急キりるを往反之間有之り故、急に致
 着り儀も難成り、此段を委御咄申達り由相達り處、周
 防守様御逢被成、今日御手傳方御用係被仰付り得共、
 此御方様に御手傳被仰付り儀、未仰渡無之り、兩日中
 可被仰渡り哉、其上に可御意と存り、御普請御取
 付者、來正月末方より御取懸、四月に罷成り得者山々
 雪とけ水も相増り故、三月末比引取、又々九十月比よ
 り御取付、十一月に掛り御仕廻り様こと存り、此儀も
 外に御勘定方御役々、其外美濃衆并御代官に兼り川筋

御用を被仰付置り間、此節御用係可被仰付と存り、右
 仰渡有之候上に繪圖面仕様書等可被相渡り、先内
 々此段申聞置り由被仰聞り、左り御用人衆に相達り通、
 當時留守居少人數被差置り付、其内を相減、御普請場
 に被差出儀者難成積に御座り付、御國元は追々申越り
 由申上候處、餘り多數被遣に及間鋪り、兩日中仰渡
 有之り上に得と可相達旨被仰聞り由、首尾書之通申
 出り、且又御目付代石野三次郎様・大久保荒之助様・
(氏從)淺野左膳様・新見又四郎様は佐久間源太夫罷出、此度
(正榮)(龜手)(忠興)右之通川々御普請御手傳被仰付り付、爲御目付御越被
 成り間、何角無御心置御差圖被成可被下り旨、役人共
 申付り段御銘々様御用人に申達り處、追り可申上旨承
 り由、是又首尾書之通申出り、
 一昨廿八日堀田相摸守様方御留守居壹人可罷出旨御用人
 中切紙到來、佐次右衛門致參上り處、御用人倉次甚
 太夫を以御普請御手傳被仰付り付、被相伺り儀者、相
 摸守様に可被仰達り、且前條周防守様に御用被仰付り
 間、諸事御聞合可被成り、御目付衆御四人被差遣り段、
 別紙御書付御渡被成り、且又御普請之儀、町人請負等
 不被仰付、此度目論見之通を以其村々百姓共に申付り

様ニ可仕、又老御手傳方及役人多被差出候ニ不及、

於場所人足員數見届并掛引之世話なと致、役人有之、
老、可相濟儀ニ、ハ間御用向弁、ハ老無益之人數不差出、
様ニ可仕、委細老周防守様ニ承合、様可仕旨、御家

來之御書付御渡被成、旨、別紙首尾書之通申出、

〔米〕本文被申越候通、相違守様より御書付を以被仰渡候付、御書可被仰達
右通御書付を以被仰渡、被成御承知、上、相

摸守様ニ御答可被仰達儀奉存候間、被達 貴聞被申越

外老、日積相考首尾可仕、御家來ニ右通御書付を以

被 仰渡、夜前遲成、今朝源、太夫致參上、

御用人ニ取會御請之儀申上候處、追、可申上由申聞候

段申出、

一 御普請御取付之儀、前條之通來正月末方御取付可被
成旨周防守様方被仰聞、得老、御普請場ニ其元方被差
越人數等不逢間、御當地詰之内より被遣候儀老

御守殿を及御引受、殊ニ御留守中火消方旁爲差究人數

被召置、其内を被相減、御普請場所に被遣、儀老

難被成事、故、御國元より人數被遣到着之上御取付御

座、様ニ相換守様ニ奉得御内意、御賢慮之程をも承知

仕、其趣を以其元ニ及可申上と申談、昨廿八日佐次右

衛門致參上、御用人岩瀧五兵衛に取會、御手傳被仰付

外付、來、何月比より御取付可被成哉、當分御留守

中之儀御座、得老、御家中別、少人數被差置、出火

等之節 御守殿御除場其外火消方被掛置、人數迄、

御普請場ニ差出、儀相調不申、御國元ニ惣奉行初

役、早、差越、様ニ申遣、若急御取付有之、ハ、

右之内方差越不申、不叶、咎御座、左、得老、出火之

節 御守殿御除場用ニ掛置、内方差遣、萬一騒働之節

龐末之儀、有之、老家老共別、いか、數奉存、何

と、相成申儀御座、御國元より差越、人數到着仕

外、御取附御座、様奉存儀、御留守中之儀、及御

頼爲被置事ニ御座、得老、御賢慮之程をも承知仕、御

國元ニ及申越、度、奉得御内意候由演説致、外、五

兵衛引入、追、罷出、右之趣委細申上、ハ、田地ニ相

懸、御普請之儀、ハ、故、被延候儀、及相成間數候間、何

れ、及正月末方御取付可有之事思召、尤 御守殿

御除場ニ被掛置、人數少、被相減、其外繰合ニ遣、外

差、御支ニ及相成間數、夫共、一色周防守様、右之

御咄仕置、様ニと被仰聞、左候、周防守様、直ニ佐

次右衛門罷越、御用人高坂専右衛門に取會御手傳付、

周防守様ニ御用係被仰付、諸事可得御差圖旨、今

日堀田相摸守様より御書付を以被仰渡り付、此段申上
 外由相達、引次ニ相摸守様ニ申上り通、御國元方被
 差越外人數到着之上ニ御取付有之外筋者相成間敷哉
 之旨右同斷 御守殿御除場等之儀委ク申演外處、周防
 守様に委細申上御承知被成り、御勘定方御役々明日方
 御用係被仰付筈外得者、可被仰談り、當分詰合之人數
 方強る何程計可差出哉、士方足輕迄惣人數之高書付、
 來月二日可致持參り、左候る其節御吟味被成、御普請
 場應人數ニ御取付も可有之事り、何れにも二日罷出候
 ハ、可被仰談旨被仰聞り由、右引次ニ

公義御見賦金高之儀、内々相知候者承度旨用人に申達
 外處、凡十萬兩計之御見賦之由承り、十四五萬兩にも
 及可申哉と存り段申り由、首尾書之通申出外、

一 御普請場に被差越外人數等之儀、相決り儀者未難申越
 外、昨日被相渡り別紙御書付之通、御手傳より及役人
 多差出ニ不及旨被仰渡り付る者、別る多人數被差越ニ
 者不及筈外、然とも御普請場所之様子ニより人數之多
 少者御吟味可有之事り、右通來月二日ニ若周防守様方
 場所繪圖面等御見せ可被成との事り、御當地詰之内よ
 り被差越外人數之儀及其節申出筈外間、何分被仰聞り

趣を以、其元方被差越外人數之儀者相究申越り様ニ可
 致り、右次第ニ候故、別紙脇々聞合迄ニ有者此節吟味
 難成り、惣奉行ニ添奉行之儀者不被差越外不叶筈外
 間、仕舞次第早々被差立り様被仰渡度外、爰元又者直
 ニ御普請場に被差越り儀共、周防守様御方ニ有之御模
 様次第、則申越り様ニ可致り、

一 御手傳被仰出り段、御用御頼之御先手様に者主鈴より
 爲御知申上、御用御頼御目付様に御留守居より爲御知
 申上外、

一 御手傳ニ付、御役人様方御附届并其外京・大坂・長崎
 御隣國爲御知等之儀、御使番に奉伺り様ニ申渡り外
 近衛棟杆京都諸司代、大坂御城代共、今日便御書被遣候、長崎其外隣國御
 申しせ之儀ハ先便にも申越候通、去ル廿二日出相濟候

一 御手傳付御入用金京大坂に及今日便御借入之儀折角差
 急り様申越り得共、先達り申越り通、其元方御見合を
 以大坂に被差越、御借入之儀被申越ニ可有御座外、
 尤其御元ニ有御金出方御吟味可有御座儀ニ得共、猶
 又此段申越り、御當地ニ有及專御借入吟味申渡事外、
 右之通申越り條、可被達 貴聞り、當日迄脇々承合

外分、聞合書付右通仰渡御書付寫三通・首尾書六通
 差越申り、承合等及差急申事外得共、時節柄にも外
 候、以上

得者、埒明兼申事、尤早速方別紙之御役、其内

之御用筋相勤り様申渡、座相立折角差急半吟味申渡

事、追々相究趣飛脚を以可申越り、以上、

〔寶曆三年〕

十二月廿九日

〔正月廿五日〕

〔上〕

嶋津主鈴

嶋津主殿

伊勢兵部殿

義岡相馬殿

新納内藏殿

鎌田典膳殿

平田鞆負殿

市來左中殿

寫

十二月廿七日

御勘定奉行

一色周防守

右老濃州・尾州・勢州川々御普請御用被 仰付旨、於美

蓉間老中列座、隱岐守申渡之、

大久保豊後守組

石野三次郎

秋田大和守組

大久保荒之助

稻葉紀伊守組

淺野左膳

水野山城守組

新見又四郎

右老濃州・尾州・勢州川々御普請ニ付、爲御目付被遣旨、
御右筆部屋於縁類、相摸守申渡之、佐渡守侍座、

1339

寫

松平薩摩守

濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳被仰付外付、被相同
外儀者相摸守に可被申聞外、

御勘定奉行

一色周防守

右御用被 仰付外間、諸事可被承合外、

御小姓組大久保豊後守組

石野三次郎

同秋田大和守組

大久保荒之助

同稱葉紀伊守組

淺野 左膳

御書院番水野山城守組

新見又四郎

右爲御目附被差遣之間、可被得其意、

寫

松平薩摩守家來江

濃州・勢州・尾州川々御普請之儀、町人請負等ニ不申付、此度目論見之通を以、其村々百姓共江申付様ニ可仕、

一御手傳よりも役人多差出ニ不及、於場所人足員數見届并掛引之世話など致、役人有之候者可相濟儀之間、御用向辨、無益之人數不差出様可仕、

右之通可得其意、委細之儀、一色周防守可承合、

(表紙)

繼 豐 公

實曆四年 自正月
至閏二月

重 年 公

追 舊 記 雜 錄
卷百七

1341 繼豐公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之候、遂披露_レ處一段之御
仕合_レ、恐々謹言、

(朱)
「寶曆四年」 正月七日 本多伯耆守 正珍判

松平大隅守殿

1342 全上

(業脱丸)

爲若之御祝儀、鯛一折被獻之_レ、遂披露_レ處一段之御仕

合_レ、恐々謹言、

(朱)
「寶曆四年」 正月七日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1343 重年公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之候、遂披露_レ處一段之御
仕合_レ、恐々謹言、

(朱)
「寶曆四年」 正月七日 本多伯耆守 正珍判

松平薩摩守殿

1344 全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之_レ、遂披露_レ處一段之御
仕合_レ、恐々謹言、

(朱)
「寶曆四年」 正月七日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1345 重年公御譜中

正文在文庫

吉書

1347

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

松平薩摩守殿

西尾隱岐守 忠尚判
松平右近將監 武元判
本多伯耆守 正珍判
堀田相摸守 正亮判

1346

全上

一神社佛閣修造興行事、
一可專勸農事、
一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨、可有沙汰之狀如件、

寶曆四年正月十一日 重年御判

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合候、恐々謹言、
〔卷〕
「寶曆四年」 正月十一日

1349

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

松平大隅守殿

西尾隱岐守 忠尚判
松平右近將監 武元判
本多伯耆守 正珍判
堀田相摸守 正亮判

1348

継豊公御譜中
正文在文庫

〔卷〕
「寶曆四年」 正月十一日
秋元但馬守 涼朝判
松平薩摩守殿

〔卷〕
「寶曆四年」 正月十一日
秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1350 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者
(五十右衛門)
姫宮様

大納言様に 御入興之儀御弘被 仰出外段被承之、目出
度被存由得其意候、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹
言、

(巻)
「寶曆四年」 正月十二日

松平大隅守殿

本多伯耆守
正珍判

1351 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者
姫宮様

大納言様に 御入興之儀御弘被 仰出外段被承之、目出度
被存由得其意外、紙面之趣及言上候、恐々謹言、

(巻)
「寶曆四年」 正月十二日

秋元但馬守
涼朝判

松平大隅守殿

1352 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者
姫宮様

大納言様に 御入興之儀御弘被 仰出外段被承之、目出度
被存由得其意外、依之被差越使者外、紙面趣各申談及
上聞外、恐々謹言、

(巻)
「寶曆四年」 正月十二日

松平薩摩守殿

本多伯耆守
正珍判

1353 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者
姫宮様

大納言様に 御入興之儀御弘被 仰出外段被承、目出度被
存由得其意外、依之被差越使者候、紙面之趣及言上外、

恐々謹言、

〔巻〕
「寶曆四年」 正月十二日
秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1354
全上

なをく御表より御申上被成りへ共、なを御申上被成り通何もよろしく申上まいらせり、めて度かしく、十二月六日附にて文下されり、公方様 大納言様ますく御機嫌よくならせられ、御めてたく思しめしり由、しかれハ 姫宮様御事 大納言様へ御入輿の御事、先月十一日御弘目仰出されり段御承知被成、誠に御めてたき御事に思召りよし、右之御祝儀御申上被成りとをりよろしく申あけまいらせり、めてたくかしく、

〔巻〕
「寶曆四年」

お

松平 松 鳴
薩摩守様 御返事 岩 橋
人々御中 浦 尾
たきつ

さえた

1355
重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又舊冬妻女御鷹之鷹拜領之、難有由得其意り、紙面趣各一覽之事り、恐々謹言、

〔巻〕
「寶曆四年」 正月十八日
本多伯耆守 正珍判

松平薩摩守殿

1356

全上

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又十一月十九日從

公方様、妻女御鷹之鷹拜領之、難有由得其意り、紙面之趣令承知候、恐々謹言、

〔巻〕
「寶曆四年」 正月十八日
秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

正文在文庫

御札令披閱外、如來意舊冬

大納言樣に

姫宮様御入興之儀御弘被 仰出、目出度御事外、依之御

念入外段欣然之至存外、恐々謹言、

(朱)

「寶曆四年」 正月廿三日

尾張中納言

宗勝判

薩摩少將殿

御報

去歲十二月二十五日

家重公放鷹、而賜下所其獲之鶴一隻於國上、執政西尾隱

岐守忠尚召留守居山澤小左衛門盛福、屬二鶴及奉書・宿

次證文、盛福奉之還芝第一矣、即夜使下馬廻兄玉四郎

兵衛實行、新番友野五郎右衛門長堅爲中之宰上發芝邸、

步士二人足輕六人附從焉、逾年今茲寶曆四年甲戌正月

二十一日到着于麗城、乃迎之於對面所以拜其賜矣、

即日爲謝恩使島津圖書久亮赴東武、繼豐亦使物頭

小林中太兵衛政央齎書謝執政各第政央二月二十三日到江府、

發江府、四月二、使下新番町田孫右衛門實興・鎌田平左衛門政

十五日還麗府胤復宿次證文以連署謝執政上、於是實興、政胤先

久亮經西海・山陽・東海之三驛、日以繼夜二月十五

日到江府、直詣執政堀田相摸守正亮之第、呈連署

復宿次證文矣、久亮亦同月二十四日到江府、同二十

七日詣正亮之第呈連署、到秋元但馬守涼朝西丸御之

第呈格書、至其餘執政・若年寄亦各呈書矣、閏二

月朔日召久亮于營、然以病也故不能登、於茲使下

留守居岩下佐次右衛門方峯獻納二種一荷于

家重公、同品于

家治公上、且久亮自己所獻二

家重公御太刀一腰・御馬代銀一枚・紗綾三卷、所獻二

家治公御太刀一腰・御馬代銀一枚、亦令方峯獻納之

使者聞二御營則詣二執政・若年寄各第進呈御太刀馬代銀・謝下拜三萬・台頭一

之辱上、即今久亮雖有自己之獻物不レ謝二台頭不知三以所レ怨三各位、故

除間レ言官謂使下人代久亮一動上レ之可、不レ然則似レ欠三先規、待二

病愈一亦遲急也、於茲翌二日使三馬土代二久亮一進呈如三先規、一 同二十

三日應教久亮登營即於檜之間執政酒井左衛門尉忠

寄附與奉書焉、乃 家重公令三忠寄一賜三紗綾三卷於久亮矣、既而三月十八日

發江府、六月四日還麗府復命、

全上

正文在文庫

返く御表よりも御申上被成りへとも、なを御申上被成り通何もよろしく申上まいらせり、めてたくかしく、

十二月十六日付にて御ふミ下されり、

公方様 大納言様益御機嫌よくならせられ、御めて度思しめしりよし、さては先月十九日

公方様より御鷹の鷹おく方さまへ御はいれう被成、御手前様にも有かたくおほしめしりよし、右御禮御申上被成り、御文の趣よろしく申あけまいらせり、めてたくかし

く、
〔巻
「寶曆四年」

方

松しま

岩はし

うら尾

たきつ

さえた

松平

薩摩守様

御返事
人々御中

返く何もよろしく申上まいらせり、めてたくかし

十二月十六日付にて御ふミ下されり、

公方様 大納言様益御機嫌よくならせられ、御めて度思しめしり由、さては先月十九日

公方様よりおく方さまへ、御鷹の鷹被遣り御事、御手前様にも有難思しめしりとの御事、右の御禮

大納言様へ御申上被成り、御文の趣よろしく申あけまいらせり、めてたくかし、

く、
〔巻
「寶曆四年」

方

松しま

いは橋

うら尾

たきつ

さえた

松平

薩摩守様

御返事
人々御中

継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將

全上

又同氏薩摩守參勤時分之儀相同り處、當七月中參府外様
相違難有由得其意外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、
(鳥津重年)

〔寶曆四年〕 正月廿九日 本多伯耆守 正珍判

松平大隅守殿

1362

御札令披見外、

全上

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
又同氏薩摩守參勤時分之儀相同り處、當七月中參府外様
相違難有由得其意外、紙面之趣令承知り、恐々謹言、

〔寶曆四年〕 正月廿九日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1363

重年公御譜中 扣正文在家老座

中馬源(箱)兵衛

右老今度御手傳被 仰出候付ぬ者、御入用銀何程と及不
相知り得共、大概金子拾四五萬兩程及御入用可有之哉、
右御用金御當地より被差上り儀者何分難調り、何れ上ら

表御借入に無之り得者決り難成り、右通大分之金高上
方表當分之様子にては別り重キ方と相聞得り、然共此節
之儀尋常ニ相替、格別成御用銀ニり、銀主之儀者兼り
右躰大分之御用金不圖有之り節、出銀無支相調候様と之
儀ニり、銀主之内ニ御合力等も被下被頼置儀故、此度
之御用金出銀有之り様、段々事を分、無據頼掛何様いた
し外り者、御用銀さへ相調り得者頂上之儀故、銀主共ニ
隨分致熟談、響應又老附届等いたし外儀者申談、何ケ度
及時宜次第可致り、右之段上原十郎左衛門・久保七兵衛
に及申聞、京・大坂算用役共及申談、何分及不及御差支
様可申談り、

右之通可申渡り、
〔寶曆四年〕 正月 〔金田正徳〕 鞆負

全御譜中 扣正文在家老座

〔采〕「色周防守様五差出候書付左之通、
覺 本文ケ条書吟味之上相認、去ル二日周防守様御宅五岩下佐次右衛
門致持參、入御駕候処、銘々御付紙ニ而被相渡候」
一御普請御場所御繪圖・御帳者、近く相渡申儀御座外哉
〔采〕「御張紙 繪圖相渡申候、帳面ハ近日相渡可申候」
之事、
〔采〕「御張紙 是書青木次郎九郎濃州五罷歸正月下旬引渡可申候」

1365 1364

1366

1367

1368

1369

1370

1371

一 御手傳方居小屋之場所、何比御引渡被 仰付候哉之事、

〔朱〕「本文御付紙之通、当月下旬御引渡御究候故、御場所請取之御役、其外相附被遣候人数、別紙名書之通出立致候様申当申渡置候」

一 御普請所不案内ニ付、居小屋何方ニ申付手配宜敷と申

〔朱〕「御張紙、是書紙面之縁合承知候、於場所次郎九郎より可申談候」

一 難申上ノ間、相應成場所御差圖被成被下ノ様仕度

〔朱〕「押札ニ而、本文御付紙之通於御場所、次郎九郎様へ御尋申上候様申渡置候」

一 出張之小屋所々ニ取立可申候哉、其所ニ相應之百姓家

〔朱〕「是書可為對面之通候」

一 又老寺院等御座外ハ、相對を以借受可申哉之事、

〔朱〕「押札ニ而、本文於御場所最寄見計を以所ニ出張木屋取立、又ハ本宅之家居等相對を以借受候様申渡置候」

一 御普請御場所御取付御時節兼承知仕度候事、

〔朱〕「御張紙、是書二月中旬ニ取付候様可被相心得候、猶次郎九郎より可申談候」

一 御普請所御取付被成外以前、一通り御案内ニ御見せ

〔朱〕「御張紙、是書銘々所わけ細張いたし相渡可申候」

一 被成外哉之事、

〔朱〕「押札、本文御付紙之通御引渡有之候節、御役と混出候儀賜、承合之儀を以諸事無滞様申渡置候」

一 御普請御場所ハ罷出外其所之人夫者、

〔朱〕「御張紙、是書致御普請候人夫者其所之者を遣ひ申候、共、右取計者勿論實公義御役人中より御手配被成、御手傳より老賃錢迄を議共ニ御手伝方より相渡事ニ候、但、揚所之人夫裁も有之候間、於場所次郎九郎より可申渡候」

一 相拂申事御座外哉之事、

〔朱〕「押札、本文御付紙之通人夫等出方於彼地請方ニ申渡、實錢私其外之儀共都而本々役より諸事宜様ニ見計之筋ニ申渡置候」

一 御普請之儀、町人請負等不申付様可仕旨被 仰渡外、木

〔朱〕「御張紙、書面之通御普請請負、町人ニ書被申付間敷候、且又御手伝方木屋屋掛又老家中用向等町人ハ申付外分老不苦外哉之事、掛其外家中用事等勝手次第何方之者江申付候而度不苦候」

〔朱〕「寶曆四年」 正月

〔朱〕「押札、本文御手伝方木屋掛等其外被差越候忍人敷賄方之儀共都而町人請方可申付候、右引札之連申候、此致申候候、以上」

〔朱〕「鶴津主錦」

〔朱〕「正月四日」

伊勢兵部殿

義岡相馬殿

新納内蔵殿

鎌田典勝殿

平田龜負殿

市来左中殿

1366

全上 〔朱〕「色周防守様江差出候書付左之通」

覺寫

用人 壹人

用人格 壹人

留守居 壹人

本ノ役 壹人

目附 壹人

醫師 四人

外小役人

右元木屋江差置分

馬廻 十貳人

步行士 三拾六人

足輕

右御場所（采）に差出（平山正輔）り分

右之外惣奉行を初、國元より近々罷越善（采）ニ御座候、以上、

「寶曆四年」正月

全上

寫

（采）「色周防守様より御被被成候御書付左之通」

役人於場所、金銀請拂、人足差引等致（采）りもの大概三拾人程（采）の可然哉、尤惣奉行夫々之役人（采）に下役人・足輕（采）者右之外（采）の候、

寫

小奉行

三拾人

歩行士

百人

足輕

貳百人

（采）「正月廿一日一色周防守様より」
（采）「御付紙 小奉行人数之儀書可為候之通候、歩行士足輕之儀書御普請所場広
右人数御手傳御普請場所（采）に御當地（采）の差越、且又國元よ
之儀（采）候間、歩行士三百人足輕五百人程被差出可然候、右人数御普請所

り追々差遣（采）り人数（采）ニ取かへ、大概右之通御座（采）り、不足
（采）「差出候計之人数之面候」
仕儀御座（采）りハ、又々國許（采）に可申遣（采）り、

一御手傳御普請御用（采）ニ付、御場所（采）に差越（采）り諸色荷物等（采）ニ御手傳方御用と目印札相附、道中差通（采）り様仕度奉存（采）り、

一御普請場所（采）に家中人数追々差越申（采）り付（采）り未、道中駄賃（采）人馬無滞差出（采）り様兼（采）り宿（采）に被仰渡置被（采）り下度奉存（采）り、

以上、

（采）「寶曆四年」正月

目印札

濃州 勢州 川々御手傳御用
尾州

全上

一本木屋（采）に被差立（采）り御役々并小役人之内、無札之人外方（采）に罷出（采）り節、又老罷歸（采）り節時々御近習役（采）に首尾可申出（采）り、

一御役人之内無札（采）ニ（采）り無之人、御用又老無據儀付外方（采）に罷出（采）り節、御用人（采）に申出（采）り上、證文を以御近習役（采）に御

門通可申渡（采）り、

一小役人之内無札（采）ニ（采）り無之面々、御用（采）ニ付外方（采）に罷出（采）り

節者、其支配人より御用人に申出、御門通之儀證文を以御近習役に可申渡り、

一 右面々無據儀ニ付、外方に罷出り難叶節者、其譯支配之支配頭方御用人に申出、御門通之儀證文を以御近習役に可申渡り、

一 右面々無據儀ニ付、外方に罷出り難叶節者、其譯支配頭方御用人に申出、御門通之儀證文を以御近習役に可申渡り、

一 御馬廻・新番・御歩行就御用、外方に罷出り節御用人に申出、御門通之儀證文を以御近習役に可申渡り、

一 右面々無據儀ニ付、外方に罷出り難叶節者、其譯御用人に申出、御門通之儀證文を以御近習役に可申渡り、

一 本木屋より出張木屋に懸る相勤面々有之りハ、名書御門番所に御近習役方相渡置、罷出り節又老罷歸り節時々御近習役に首尾可申出り、

一 與力被附置り御役人之家來・下人、無據儀ニ付外方に不差出り難叶節者、其譯與力より御近習役に申出、證文を以御門通可申渡り、

一 右外之御役人家來・下人并其外之面々家來・下人、無

據用事ニ付外方に不差出り難叶節者、其譯主人より御近習役に申出、證文を以御門通可申渡り、

一 御國足輕・人足并外足輕・人足、御用ニ付外方に罷出り節、支配人方御近習役に申出、證文を以御門通可申渡り、

一 右之者共無據儀ニ付外方に罷出り節者、其譯支配頭委曲承届候上御近習役に申出、御門通可申渡り、

右之通今度御手傳付、本木屋并出張木屋に被差越り面々に申渡、御用人・御近習役并支配有之面々に可申渡り、

(米) 寶曆四年 正月 主鈴 (島津久郷)

1370 全上

御手傳御普請場に御越被成り御人數

御目付代 石野 三次郎様 (範至)

右同 大久保荒之助様 (忠與)

右同 淺野 左膳様 (氏從)

右同 新見 又四郎様 (正榮)

美濃御郡代 青木次郎九郎様 (安清)

御代官 吉田久左衛門様 (住國)

美濃梁交代御寄合 高木 内膳様

右同 高木 玄蕃様

右同 高木 新兵衛様

右御三人老御在所ニ御居付、直御普請場に御越被成筈之

由、

御普請役 長岡 文兵衛

右同 菊地 惣内

右同 松村平右衛門

右同 米倉 幸内

右同 花田 武助(秀精)

右同 川口 千次郎

右同 荻野 藤市(直政)

右同 橋爪 善兵衛

右同 内藤 源八郎

右同 青山 喜平次

右同 永山 伊兵衛

右同 名和 文助

御徒目附 小知藤 右衛門(正徳)

村山 金三郎

鈴木 市十郎

小川 孫七郎

吉田 半太郎

原田 又兵衛

川崎市右衛門(義明)

中村忠左衛門

御小人目付 十六人

右老御人數ニ御普請場四ヶ所ニ差分り御勤有之外由承
申外、以上、

(卷)「寶曆四年」 正月 御留守居

1371 全上

扣正文在右筆所

御奉書致拜見候、濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳被
仰付、難有仕合奉存外、尤此節不及參府旨被仰下奉畏外、
右御請爲可申上呈飛札候、恐惶、

佐々木様御案文

(末)「寶曆四年」 正月廿一日

堀田相摸守様

酒井左衛門尉様

全上

1372

重年公御譜中

扣正文在右筆所

御奉書致拜見候、濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳被
仰付、難有仕合奉存外、尤此節不及參府旨被仰下奉畏外、
右御請爲可申上呈飛札候、恐惶、

佐々木様御案文

(朱)

「寶曆四年」

正月廿一日

- 堀田相摸守様
 - 酒井左衛門尉様
 - 本多伯耆守様
 - 松平右近將監様
 - 西尾隱岐守様
- 人々御中

本多伯耆守様

松平右近將監様

西尾隱岐守様

人々御中

1374

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披閱外、弥御無吳之由珍重外、將又御手前參勤時

一筆致啓上候、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存外、然
者濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳被 仰付、難有仕
合奉存外、尤此節不及參府旨被仰下奉畏外、右御禮爲可
申上呈使札外、御序之刻
御前可然様御執成所仰候、恐惶、

佐々木様御案文

(朱)

「寶曆四年」

正月廿一日

- 堀田相摸守様
 - 酒井左衛門尉様
 - 本多伯耆守様
 - 松平右近將監様
 - 西尾隱岐守様
- 大納言様御方
秋元但馬守様
- 人々御中

分之儀被相伺外處、當七月中可有參府旨被 仰出外由、依之御念入外段欣然之至存外、恐々謹言、

(奉)
「寶曆四年」 二月二日 尾張宰相 宗睦判

薩摩少將殿 御報

1375 全上

扣正文在右筆所

就先年江府に之使者歸國、

公方様 大納言様は爲御禮以湊川親方如目錄被獻外付、

以使者差上外處、被遂披露御奉書相渡外間差越之外、難

有可被奉承知外、恐惶不宣、

(奉)
「寶曆四年」 二月四日 少將重年

謹上 中山王

1376 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟之目出度被存由得其意外、随而御樽肴被獻之候、各申

談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(奉)
「寶曆四年」 二月六日 堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

1377 全上

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟之目出度被存由得其意外、随而御樽肴被獻之外、遂披

露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(奉)
「寶曆四年」 二月六日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1378 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟之目出度被存由得其意外、随而御樽肴被獻之外、遂披

露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(奉)
「寶曆四年」 二月六日 秋元但馬守 涼朝判

全御譜中
扣正文在右筆所

重年公御譜中
正文在文庫

如御札陽春之御慶不可有休期ハ、其元御無吳御越年之由
珍重ハ、我等無恙重歲之事ハ、仍御念入ハ段欣然之至存
外、恐々謹言、

〔朱〕寶曆四年〕
二月六日

尾張宰相
宗睦判

薩摩少將殿
御報

松平薩摩守殿

御札令披見ハ、如承改年之慶賀珍重ハ、
公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相
濟と目出度被存由得其意ハ、隨テ御樽肴被獻之ハ、各申
談遂披露外處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

〔朱〕寶曆四年〕
二月六日

堀田相摸守
正亮判

松平薩摩守殿

全上
扣正文在家老座
一御書附一通

今度川々御手傳御普請方御係

覺

一今度川々御普請御手傳被 仰付外付、從
公義委曲被仰渡趣謹テ相守、萬端出精首尾能成就有之
外儀專心懸可相勤事、

一公義御役人衆に對し致慇懃、慮外之働有之間敷事、

一御普請場并小屋におひて、高雜談愆テ不似合儀無之樣
可相嗜事、

附 火用心堅固可申付、若出火於有之者早速馳集可取

鎮事、

一喧嘩口論堅可相申、若何様之儀有之ハ共可令堪忍外、
場所を及不辨及爭論者可爲曲事事、

一奉行之下知相背へからず、且又結徒黨儀可爲停止事、

右條々堅固可相守、委細之儀者家老共可申渡外之條

聊不可有緩疎者也、

寶曆四年二月 薩摩守

御目付代 石野 三次郎様

大久保荒之助様

淺野 左膳様

新見 又四郎様

(朱)「本文致承知達 貴聞、差越申候間、其元より江都江御返寄司被申候候、一右より先月廿六日被相達儀有之之間 御城に御留守 色周防守様より御書付を以被仰渡候付、

居一人可罷出旨申來、岩下佐次右衛門罷出外處、蘇鐵

本守様御挨拶之儀者、御使便安元より江戸江可申越候、此段者爲御納

之間に御出席、右御書付被成御渡外由に差出外付、

得候、以上

御普請場所に被差越外面、江御書付之趣申渡置外、

(朱)二月廿六日 市来左中 鎌田忠晴 新納内蔵 義岡相馬 伊勢兵部 平田觀貞殿」

一御書付五通

御勘定奉行御係 一色周防守様

右御同席に御出會に右御書付御渡被成り、右之内四

通者御普請に付段々の仰渡、壹通者御條日本木屋に張

置可申旨被仰聞外、左外御普請場に被差越外惣奉行

方以下之御役々、姓名に御上に被書出事に、是者相

知次第可書出外、御當地より被遣外人數之分考、姓名

相記可申出由被仰聞外付、御用人方以下御役々并御留

守居附横目・御醫師迄姓名相記、御歩行何十人、足輕

何十人、人足・慮之者何十人と一紙に書認、先月晦日

(岩下方傳) 佐次右衛門 御城に罷出、與頭室田金左衛門様蘇之間

(雅 桓) 江御出席に付相渡申外、左外先達を被相渡外御書付

(鉄脱之) 之内、御普請に付諸色代

公義御用金此節御手傳方に御渡被成り旨被仰渡外付、

御金請取方之次第并證文等認様且又印形之儀、惣奉行

何某と申儀いまた不相知り、左外得者何役之者御金請

取印形可仕哉之旨御尋申上外處、周防守様御承知被成

外、御金請取方之儀者、前廣に委細可被仰聞外、尤惣

奉行到着迄者御見合可被成哉、先其内者御用人印形に

可相濟外哉、いつれ之筋に羨其内何分可被仰聞旨、

右金左衛門様を以被仰聞外由申出外、追り御差圖次第

御金請取方之儀共考、可致吟味外、

一書付貳通

御普請場四ヶ所に相分り外名前

御用係 御徒目附

八人

御小人目附

拾六人

右之通書付相渡り、左外此節御場所に被遣外人數名

元并昇目印等、且御普請場所四ヶ所に被相分ケケリ人數も可書出由、佐次右衛門に被申聞候付、御普請場四ヶ所に被相分ケケリ人數之儀者、爰ニ之者難申出外、御國元より追々到着之上於場所可申出由申達置外旨申出外、此節御當地より被遣外人數名元之儀者、周防守様に差出外名書同様相認、目印繪形相添、同日 御城蘇鐵之間ニ御徒目付衆に相渡候處被請取置外由申出外、

一前條周防守様より御書付を以段々被仰渡外付由者、

太守様於御國元被遊御承知外段、一通り周防守様に御留守居を以御挨拶可被仰達儀奉存外間、被達 貴聞被申越外ハ、御留守居御使者を以御挨拶被仰達儀、首尾可仕外、

一先月廿五日愛甲源左衛門初其外之人數別紙之通靜ニ差立、今月二日諏訪甚兵衛其外別紙之通靜差立被遣外、右外惣人數之儀者、山澤小左衛門先月廿一日被差立遣外付、本木屋出來之日數相考申越答ニ申渡外間、其節差立被遣答ニ外、

一前條被仰渡外御書付、銘々ケ條々ニ別紙張紙之通御手當之儀共相記、山澤小左衛門に差越外、尤御場所に被遣外面々に仰渡之趣申聞外儀共ハ不殘申渡置外、

一被差越外面々於彼地都る入用之諸色小間物類、入札落直を以請方ニ申渡、諸事不差支様ニ申渡外、其元方被差越外面々には、爲心得被申渡儀共外ハ、被申渡ニ可有之外、此段者爲御存外、

右申越外條、可被達

貴聞儀共者可被申上外、被相渡外御書付寫都る八通、御留守居首尾書三通、御場所に被差立外人數名書二通差越申外、其元より被差越候人數之儀共、先達外段々申越外間、爲相達ニ可有之外、前條之通周防守様には

太守様より御挨拶之儀申上候付、急飛脚貳人申付今日差立此段申越外、以上、

^(志)
「實曆四年」二月六日

嶋津主鈴

嶋津主殿

伊勢兵部殿

義岡相馬殿

新納内藏殿

鎌田典膳殿

平田靱負殿

市來左中殿

右相付別紙

一 濃州・尾州・勢州川々御手傳御普請場所之儀、去夏目
(朱)一張紙、本文之通付而者御評議之上御積替可有之事候
 論見以後出水有之、瀬向等替り外所々可有之付、左
 様之場所は先積之不拘、當時之水當り相考積替り替之

外、尤右積替之節若何れ及評議之上相究、青木次郎九
(安)
 郎・吉田久左衛門方より御手傳方役人へ及委細申談管

ニ外事、

一 先達相渡り目論見帳ニ者、都の假ノ切等若ケ所書記

不申外、此儀若御普請仕立之節、場所之水深、或若濁
(朱)一張紙、本文御所御見計上御差圖可有之候
 水等之時節ニより違り儀故、前廣ニ者難究相除置り得

共、場所ニより假ノ切等不致りる者、人足之働方ニ各
 別費有之儀故、場所見計之上掛り之者より可致差圖外
 事、

一 此度御普請所之儀若、都の輪中と申一團宛川中ニ堤を
(朱)一張紙、本文往邊渡府ニ而川中ニ乗出差圖等有之候、場所ニ応ノ用船も手
 築廻、民家田畑等有之、見廻り之役人往反ニ渡舟も可
 備可致置候

入、其上水刳等之内ニ者、大河故格別長出等及有之、
 堤ニ差圖等いたし外者難届外ニ付、船ニ川中ハ
 乗出差圖等いたし外場所及可有之外間、其場所々ニ用

船心懸置可被申外事、

一 此度御手傳御普請所ニ遣り竹木諸式代若御入用ニ付、

右御金請取方之儀、御手傳方役人印形を以手形御勘定

所ニ差出、改を受、右手形ニ御金藏より請取之場所
(朱)一張紙、本文御金請取方之儀受元ニ而時申取候、追而可申越候
 ニ相廻預り置、渡方之儀若、諸色納方ニ應、村方或若
 請負人請取手形ニ見廻御普請役・場所詰御普請役奥印

いたし、青木次郎九郎・吉田久左衛門押切印形有之手
 形、村方請負人ニ相渡可遣り間、右役人印鑑引合相違

於無之若御金相渡右手形を以請取り、金高追り渡方勘
 定可有之外、尤右御金請取り員數等若、其時々次郎九
 郎・久左衛門方可及差圖外事、

但見廻・場所詰御普請役印鑑之儀若、於彼地青木次

郎九郎・吉田久左衛門方より可相渡り、

(朱)一張紙、本文御手傳方ニ及引取候ハ、御材木書勘印奉行、竹木廻供等置候、
 御材木并御買上竹木・繩・俵・諸色改方之儀若、御勘定
 番人付置候儀共不締無之候ニ可申付候、受元致差候而、江廣申聞島候、
 所出役御小人目附ニ御代官手代立會相改、御手傳方ハ
 鶴又其元到着之上ニ而可申取候

引渡り替り間、其節若御手傳方役人及罷出、立會見届
 可被申外事、

一 右運送之入用若、御手傳方入用ニ外之間、此分若青木

(朱)一有同、本文用上彦九郎、愛申候左衛門江廣可申聞置候
 次郎九郎・吉田久左衛門差圖を請、別段御手傳方方可
 被相渡り事、

一 出水等有之節若、晝夜ニ不限場所ハ罷出、竹木諸色流
(朱)一張紙、本文受元より被差立候而、江中開置候、鶴又其元到着之上ニ而可申
 失無之様心懸、御普請所之儀及御普請役・堤方役人・

御代官手代等防方可致差圖外間、人數差出相防々様手當可有之外事、
〔誤候〕

一御普請場所に罷出外役人之儀、卯中刻場所に相詰、申刻仕廻り様申渡外間、御手傳方役人も右刻限罷出外様可被致外、然共場所より少く相殘、翌日仕立外有者

手戻に成り様成場所者、暮時迄表相懸り仕立外管外事、
一惣の御手傳方無益之費無之様役人共申渡遣外間、御普請之手廻に表成、御手傳方費表無之様之手段、役人共より申渡外ハ、承届、各々表勘弁可有之外事、
〔一張紙 本文右同断〕

一御普請所村請に吟味有之節、村方之者心得違、場所不相應之高直段等可有可請旨申外有者、御普請差支に表相成り場所所有之外ハ、青木次郎九郎・吉田久左衛門に表可被申談外、勿論左様之儀無之様兼る村々にも急度申渡置外事、

一御普請仕立外場所者、仕立役人休息之腰懸等さつと
〔一張紙 本文休息之腰掛出來方之儀、村方吟味之節、入用に見込誦吟味可しつらい積、其場所村請吟味之節申聞、入用見込受有之候、右に付致不足候敷、又者方々持廻候儀調業候ハ、本文之通村方負外様吟味可有之外事、

一御手傳御普請所之内、去秋出水に致破損難捨置場所者、先達の御取替金を以仕越普請に申付外、右場所此度役人共可引渡外間請取、右仕立外入用村方に可被相

度役人共可引渡外間請取、右仕立外入用村方に可被相

度役人共可引渡外間請取、右仕立外入用村方に可被相

1386

1385

渡外、

一都の於彼地御用向之儀差懸外儀者、場所の表可申達
〔一張紙 本文付而者表元之者立候面、江渡申聞置候間、猶又其元言出申談候〕
外得共、其外之御用向者御番衆并場所引受見廻り之面々會所に寄合、各呼出御用向申談管外間可被得其意外、
以上

戌正月

覺

一御普請中御普請役手代家來等、御手傳方より音信贈答
〔一本行張紙 而 本文西条宗元差立候面、江渡申聞置候、猶又其元にも可者勿論馳走ケ間敷儀一切請不申、尤輕キ道具たり共借外儀致間敷旨急度申渡置外事、
〔申聞候〕

一御手傳方之役人に御普請役手代差懸り外御用向談外節者、兩人立會可申談外、壹人として申談間敷旨申渡置外事、
右之趣可被得其意外、以上、

戌正月

覺

一此度御普請所小屋場近所出火之次第、風並次第其手當
〔一張紙 本文に付而者表之者式拾人差越管致吟味手當申付候、水籠梯子其元ニ而申談用意可致候、當口考爰元より差越候〕

一 川除竹木其外運送諸人足手支無之儀ニ可被致外、若差〔采〕「張紙」本文ニ付而差元被差立候間、其儀申渡置候。猶又其元ニ而も可申聞候。支儀ニ外ハ、場所ニおひて青木次郎九郎・吉田久左衛門見廻之節、無遠慮可被申聞事、

一 御林材木伐出し之儀、場所ニ御代官被相談、早々根伐〔采〕「本文御買上之品ニ被相渡候ハ、立合之上簡取之、其日之相渡候分御普申付、手支無之儀可被致外、且又以種竹木・萱・蛇籠請役御手代印形帳面を以相渡引いたし候様ニ可申該置候。差元被差立候間、申合置候。等御買上之品々、請負人亦々村方より其場所ニ相廻り外御普請役、又若手代立合一式御手傳方ニ請取之、其日々遣外分若御普請役亦若手代印形帳面を以可被相渡外事、

一 御普請仕方之儀者、御普請役手代等付置外得共、人少ニ及外之間、相應ニ役人杖突等差出見廻り、丈夫ニ出〔采〕「張紙」本文ニ付而差元被差立候間、其儀申聞候。猶又其元ニ而も來候様可被申付外、存寄之儀及有之外ハ、場所ニおひて青木次郎九郎・吉田久左衛門見廻り之節、無遠慮可被申外、勿論御普請方取外り之儀相考、役所ニ役人等差出無益之人數無之様可被致勤弁外事、右之通可被相心得外、以上、

戊正月

一 今度川々御普請中不作法無之様相慎可申事、
〔采〕「本文御買上之品ニ被相渡候ハ、立合之上簡取之、其日之相渡候分御普申付、手支無之儀可被致外、且又以種竹木・萱・蛇籠請役御手代印形帳面を以相渡引いたし候様ニ可申該置候。差元被差立候間、申合置候。」
 一 喧嘩口論堅可慎之、若違犯之輩有之者双方共急度可申等相調候様見計を以可申付候

付外、萬一令荷擔者其科本人より重かるへき事、
 一 不依何事申分有之といふとも、御普請成就之上可及沙汰事、

一 重科有之者、掛り役人ニ達、可請差圖、私之爭論致へからざる事、

一 火之元随分入念申付、若出火有之節者、其筋之輩早速集り取鎮可申外、防人之外無用之者不可馳集事、

右之條々堅可相守者也、

寶曆四年戊正月

奉行

覺

一 此度御普請ニ付請負人御用係り面々より頼手紙等致持〔采〕「本文兩条差元被差立候間、其儀申聞候。猶又其元ニ而も可申聞候。」參、請負被申付外様相願外類も可有之哉、右躰之儀者決り無之事ニ外間、若紛鋪儀申出者有之外ハ、相糺外而可被申聞外、

一 於場所急雨等之節、雨具其外何様之輕キ品ニ而御用係り家來より致借用外儀も可有之哉、是等之儀決り不致咎ニ申付外間、若借用致度旨申外共借し外儀被致間敷外、右躰之儀致もの有之外ハ、急度姓名可被書出外、以上、

戌正月

濃州桑原輪中方尾州神明津輪中迄

石野三次郎

高木新兵衛

尾州梶嶋村より勢州田代輪中迄

大久保荒之助

青木次郎九郎

濃州墨俣輪中方同國本阿弥輪中迄

淺野左膳

高木内膳

勢州金廻輪中より同國海落口濱地藏邊迄

新見又四郎

高木玄蕃

右四ヶ所御普請場見廻

(宋)一文成運之齋付御徒目付衆より相渡候付爲見合差懸候

吉田久左衛門

濃州桑原輪中方尾州神明津輪中迄

御徒目附

小知藤右衛門

原田又兵衛

御小人目附

大野藤兵衛

代嶋新左衛門

内山左平次

竹中傳六

尾州梶嶋村より勢州田代輪中迄

御徒目附

小川孫七郎

川崎市右衛門

御小人目附

大濱兵三郎

加藤軍平

指田左兵衛

彦坂平五郎

濃州墨俣輪中方同國本阿弥輪中迄

御徒目附

鈴木市十郎

中村忠左衛門

御小人目附

市川次郎助

増田 伴七

鈴木 源八

吉田門之丞

勢州金廻輪中より同國海落口濱地藏邊迄

御徒目附

村山金三郎

吉田半太郎

御小人目附

加藤 久助

石丸 三平

岩堀善四郎

松永太次郎

以上

正月

今度濃州・勢州・尾州川々御普請所御用向聞合等被致儀表_レ外_レ者、書付を以 御城に罷出可被申聞_レ外、輕_レキ用事_ニ而_レ表_レ於宅申談聞敷_レ外、御徒目付・御小人目付_ニも右之通申渡置_レ外、是又宅_ニ爲聞合被_レ參_レ外_レ事有之間敷_レ外、

一 不及申_レ得共、此度掛_リ外役人末々迄輕音物_ニ而_レ表_レ無

之様御心得可有_レ外、若音物等有_レ外_レ者、直_ニ返進其

段申上置_レ外_レ事、

一 小屋場相渡_レ外_レ者、出火之節風並次第其手當可有_レ外_レ事、
(卷)「恐紙」而、本文御四人様より被相渡候、是元被差立候而、江廣申聞置候、
聽其元_ニ而_レも可申聞候一

一 御材木其外運送并御普請場諸人足手支無_レ之様可被申談

外、右運送等之儀其外不依何事、不及申_レ得共差支不

申_レ様可被致_レ外、

一 人足割出、其外之儀差支_レ外_レ事_ニ有_レ外_レハ、此方四人

之内_ニ被申聞儀表_レ外_レ者可承事_レ外、

一 御用_ニ付御勘定奉行_ニ被相届_レ外_レ儀者、此方_ニ表_レ可被申

聞_レ外、

一 御手傳御用_ニ付、諸請負人此方_ニ申達_レ外_レ儀者一切無_レ

外、尤此方役人共_ニ表_レ堅申渡置_レ外、

一 御用_ニ付被談_レ外_レ者、御徒目付立合_ニ之上御用向可被談_レ外、

尤 御城_ニ而_レ可被談候、於場所其所_ニ而_レ御徒目付_ニ・

御小人目付立合_ニ而_レ承_レ外_レ事、

戌正月

(目付代) 石野三次郎

(同) 大久保荒之助

(同) 淺野 左膳

(同) 新見又四郎

重年公御譜中
扣正文在家老座

御手傳場は御當地に被差越り面々其外末々迄、朝夕定御
賄又者外方勤之節、現人數之分者晝飯被下筈に、右請
負御立入之者共依願入札落直を以吟味之上、請方に申渡
置り、右に付御賦飯米引方等之儀御役々相しらへり處、
先年上野御手傳之節、右之通御賄并晝飯迄被下、御賦銀
無差引に、飯米之分者皆同差引爲被仰付由、別紙之通
致吟味申出り付、此節表先例に準御賦銀不及差引、飯米
之分者皆同差引に先申渡相究趣者、追り何分可申渡旨申
渡置り、右しらへ書一結相添差越申り間、於其元及吟味
被申渡、何分は被申越りハ、其段申渡り様可致り、
此段申越り、以上、

(卷)
「寶曆四年」 正月晦日

嶋津主鈴

- 伊勢兵部殿
- 義岡相馬殿
- 新納内藏殿
- 鎌田典膳殿
- 平田鞆負殿
- 市來左中殿

重年公御譜中
扣正文在家老座

寫

此度御手傳御普請所に遣ひり石之儀、所より九里、
拾里川上り船に取付に付、各別船數等表無之り者、
御普請之差支に及可相成り間、石取船之儀心懸ケ手當
可有之事、

一人足之儀村請に付、土持被申付り者、大場之分ハ村
人足計に者仕立差支可申り、左様之場所者村請之内
相對を以他村之者に者、下請負望之もの致吟味申付、
人足ハ地元村之人足を重に可遣旨可被申渡り事、

一御普請所之内聖牛杵等水深之所に仕立り節、并羽口折
懸ケ等之儀、不仕馴人足に者難仕立場所者有之候ハ
、其節者水中仕馴り大井川邊、又ハ關東筋大川通之
人足相雇、頭取爲致、村人足受替り宜場所者有之候
ハ、右之旨青木次郎九郎・吉田久左衛門に可被申談
事、

以上

(卷)
「寶曆四年」 戌二月

(卷)
「一右一色周防守様御勘定與頭室田(雅矩)金左衛門様 御城蘇鉄之間

1393 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披閱外、弥御無吳之由珍重外、將又御手前參勤時分之儀被相伺外處、今年七月中可有參府旨被仰出外由、依之御念入り段欣然之至存外、我等無恙在之事外、恐く謹言、

(卷) 「寶曆四年」 二月七日

薩摩少將殿

御報

尾張中納言

宗勝判

1394 全上

扣正文在家老座

濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳場所に國元より差越(卷)「報紙にて書面之通認奉行・添奉行其外役人大坂より直ニ御普請所立可外惣奉行并添奉行其外相付外役人共大坂に到着仕、直御差懸旨相摸守殿被仰候候間可被得其意候」場所に差越外様可仕外哉、此段奉伺外、以上、

(卷) 「寶曆四年」 二月十日 御名内 岩下佐次右衛門

〔右堀田相摸守様・一色周防守様江岩下佐次右衛門致持參差出置候處、二月十四日周防守様より御付紙ニ而朱書之通被

1395 重年公御譜中

扣正文在家老座

寫

濃州・勢州・尾州川々御手傳ニ付、木屋場去ル五日青木次郎九郎様より御引渡相請取候段彼表方申越外、右付御當地より差越外人數來ル十一日・十二日兩日差立申答御座外、此段申上外、以上、

(卷) 「寶曆四年」 二月十日 御名内 岩下佐次右衛門

〔右堀田相摸守様・一色周防守様江御届〕

1396 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、小次郎殿逝去之段被承之、被絶言語由得其意外、依之御機嫌被相伺外、被爲替御儀無之外間可御心易外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐く謹言、

(卷) 「寶曆四年」 二月十一日 堀田相摸守 正亮判

松平大隅守殿

1099

全上
御札令披見外、舊臘小次郎殿逝去之段被承之、被絶言語由得其意外、依之御機嫌被相伺外、御安全御儀外間可御心易外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

1398

重年公御譜中
正文在文庫

御札令披見外、小次郎殿逝去之段被承之、被絶言語由得其意外、依之御機嫌被相伺之外、被爲替御儀無之外間可御心易外、紙面趣各申談及、上聞外、恐々謹言、

(卷)
〔寶曆四年〕 二月十一日 堀田相摸守 正亮判
松平薩摩守殿

1397

全上

御札令披見外、舊臘小次郎殿逝去之段被承之、被絶言語由得其意外、依之御機嫌被相伺外、御安全之御儀外間可御心易外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

(卷)
〔寶曆四年〕 二月十一日 秋元但馬守 涼朝判
松平大隅守殿

1400

(卷)
〔寶曆四年〕 二月十一日 秋元但馬守 涼朝判
松平薩摩守殿

重年公御譜中
正文在文庫
御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦嶋津加賀守儀願之通隠居被 仰付、家督同氏淡路守^(久柄)被下置難有由得其意外、紙面趣各一覽之事外、恐々謹言、

(卷)
〔寶曆四年〕 二月十五日 堀田相摸守 正亮判
松平薩摩守殿

1401

全上
御札披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、然者嶋津加賀守隠居被 仰付、家督淡路守被下置難有由令承知外、恐々謹言、

(卷)
〔寶曆四年〕 二月十五日 秋元但馬守 涼朝判
松平薩摩守殿

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又爲歳暮之御祝儀時服并御看拜領之、難有由得其意候、

紙面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

(本)

「寶曆四年」 二月十八日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又爲歳暮之御祝儀、從

公方様時服并御看拜領、難有由得其意外、紙面之趣及言

上候、恐々謹言、

(本)

「寶曆四年」 二月十八日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又爲歳暮之御祝儀其方妻女に拜領物有之、難有由得其意

外、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

(本)

「寶曆四年」 二月十八日

堀田相摸守

正亮判

松平薩摩守殿

扣正文在家老座

今度濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳就被 仰付

外、御用相勤外役人之覺

惣奉行

平田 鞆負(正轉)

副奉行

伊集院 十藏(久惠)

用人

堀 堀右衛門(貞巳)

諏訪 甚兵衛(兼方)

近習役

寫

伊地知新太夫(平 周)

留守居

佐久間源太夫(盛 邦)

山澤小左衛門(盛 國)

普請奉行

川上彦九郎(寛 英)

元ノ役

石川正右衛門(長 隆)

山元藤兵衛(秀 恩)

目付

愛甲源左衛門(平 平)

村田五右衛門(輝 彦)

場所奉行

大野鐵兵衛(府 純)

黒田次郎兵衛(府 安)

以上

〔寶曆四年〕二月十八日

松平薩摩守

〔米〕右堀田相摸守様「被差出外」

近習役 伊地知新太夫(平 周)

右者無人ニ付、先達ノ用人格と申上置外得共、本役近習役ニ御座外、

普請奉行 川上彦九郎(寛 英)

右同斷ニ付元ノ普請奉行兼と申上置外得共、本役普請奉行ニ御座外、

二月

〔米〕右堀田相摸守様江被差出候」

1407

今度濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳就被 仰付外、御用相勤外役人之覺

惣奉行

平田輒負

副奉行

伊集院十藏

用人

堀 堀右衛門
諏訪甚兵衛

近習役

伊地知新太夫

留守居

寫

近習役 伊地知新太夫

右者無人ニ付、先達而用人格と申上置候得共、本役近習

右之通御座候、以上、

御名内

閏二月廿二日

岩下佐次右衛門

(卷) 一右一色周防守様江被差出外

佐久間源太夫

山澤小左衛門

普請奉行

川上彦九郎

元ノ役

石川正右衛門

山元藤兵衛

目付役

愛甲源左衛門

村田五右衛門

場所奉行

大野鐵兵衛

黒田次郎兵衛

役ニ御座外、

普請奉行 川上彦九郎

右同斷ニ付、元ノ普請奉行兼と申上置外得共、本役普請

奉行ニ御座外、

閏二月

(卷) 一右一色周防守様江被差出候

継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又同氏薩摩守儀濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳被

仰付、難有由得其意候、紙面之趣各一覽之事外、恐々謹

言、

(卷) 「寶曆四年」

二月廿一日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

1412

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度川々御普請御手傳被 仰付、難有由得其意外、依

御札令披見外、
公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳被 仰付、難有由得其意外、依之被差越使者外、紙面趣各一覽之事外、恐々謹言、
(卷)
〔寶曆四年〕 二月廿一日 堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

1414

全上

扣正文在江戸家老座

置米之儀當年表於御料所圍置外様被仰付外間、萬石以上之面々表、當秋取納之節より去年置粃之外三、分限高壹萬石ニ付粃干俵宛圍置外様被仰出外、

右委細之儀老御勘定奉行可被承合外、

1411

重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

亦今度同氏薩摩守儀、川々御普請御手傳被 仰付、難有由得其意外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、
(卷)
〔寶曆四年〕 二月廿一日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1413

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度川々御普請御手傳被 仰付、且又此節不及參府旨相達、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、
(卷)
〔寶曆四年〕 二月廿一日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

秋元但馬守 涼朝判

〔朱〕
「寶曆四年」二月

1415
重年公御譜中

正文在文庫

御札令披閱_レ、今般濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳被_レ仰出之由玆重_レ、依之入御念_レ段欣然之至存_レ、恐々謹言、

〔朱〕
「寶曆四年」二月廿五日

薩摩少將殿

御報

尾張宰相

宗睦判

1416
繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、將又同氏薩摩守儀以宿次奉書御鷹之鶴拜領之、難有由得其意_レ、依之爲御禮被差越使者_レ、紙面之趣各申談及 上聞_レ、恐々謹言、

〔朱〕
「寶曆四年」二月廿九日

堀田相摸守

正亮判

松平大隅守殿

1417
繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤_レ、將又以宿次奉書、從

公方様同氏薩摩守儀御鷹之鶴拜領之、難有由得其意_レ、依之爲御禮被差越使者_レ、紙面之趣令承知_レ、恐々謹言、

〔朱〕
「寶曆四年」閏二月朔日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

1418
重年公御譜中

夫人頃日罹_レ病在_レ牀褥_レ、雖屢薦湯藥而不_レ獲_レ驗、今茲寶曆四年閏二月二日卒_レ于芝第_レ、法諱智光院殿心願貞鏡大姉、葬_レ于芝大圓寺_レ矣、同三日夜入棺、同六日夜靈棺出_レ於芝第東門_レ厥夜入_レ大圓寺_レ、同九日夜營_レ葬禮_レ、島津主殿久馬護_レ持神主_レ、側用人菱刈孫兵衛實詮_レ、財部孫之丞盛興_レ、留守居赤松甚右衛門則正_レ、使番本田六左衛門親相、納殿役人臼井猶右衛門昌佳_レ、郡山嘉右衛門貞雄_レ、貴島幸右衛門國在其餘納殿役以下數輩列_レ葬場_レ供奉矣、導師者大圓寺海卯和尚也、既而修_レ中陰覺儀_レ者自_レ閏二月十一日_レ、同

繼豐公御譜中

松平薩摩守殿

松平右近將監 武元判
 本多伯耆守 正珍判
 酒井左衛門尉 忠寄判
 堀田相摸守 正亮判

重年公御譜中

正文在文庫

妻女死去之段及 上聞候處、可爲愁傷之被 思召外、此
 由可相達旨依 御意如此外、恐々謹言、

(朱)
 「寶曆四年」 閏二月四日

西尾隱岐守 忠尚判

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將
 又正月十二日

竹姫君様被爲 入外節、菊事御懇之蒙 上意、從

公方様 大納言様拜領物被 仰付、從

(宮力)
 姫君様被遺物有之、重疊難有由得其意外、紙面之趣令承
 知外、恐々謹言、

(朱)
 「寶曆四年」 閏二月十六日

秋元但馬守 涼朝判

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又正月十二日

竹姫君様被爲 入外節、菊事御懇之蒙 上意、從

公方様 大納言様拜領物被 仰付、從

姫宮様被遺物有之、重疊難有由得其意外、紙面趣各一覽
 之事外、恐々謹言、

(朱)
 「寶曆四年」 閏二月十六日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平大隅守殿

松平大隅守殿

重年公御譜中

扣正文在右筆所

(朱)御附紙

私儀今度參勤之節、濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳

伺之通立音見分可被致候

場通路近邊之所立寄致見分度外、此段奉伺外、以上、

(朱)

「寶曆四年」

閏二月廿三日

(島津重年)

御名

全上

なをく御表よりも御禮御申上被成りよし、猶よく

く申あげまいらせり、めてたくかしく、

正月廿一日付にて御ふみ下されり、

公方様 大納言様益御機嫌よくならせられ、御めて度思

しめしりよし、扱は濃州・勢州・尾州川々御普請御手傳

仰付られ、此節ハ參府ニおよハす外段 仰渡され、有難

御事思しめしり由、右の御禮

大納言様へ御申上被成り御文の趣、よろしく申あげまい

らせり、めてたくかしく、

方

松しま

まつ平

薩摩守様

御返事

いは橋

うら尾

たきつ

さえた

人々御中

全上

返く御おもて方も御申上被成りよし、何もよろし

く申上まいらせり、めてたくかしく、

正月廿一日付にて御文下されり、

公方様 大納言様益御機嫌よくならせられ、御めて度思

しめしり由、扱は古歲廿五日歳暮御祝義として、圖司丈

助にておく方さまへ拜領物被成り御事、有かたく思しめ

しりよし、御文の趣よろしく申あげまいらせられり、め

てたくかしく、

(朱)

「寶曆四年」

方

松しま

いは橋

うら尾

たきつ

さえた

松平

薩摩守様

御返事

人々御中

正文在文庫

なをく何もよろしく申あげまいらせり、めてたく
かしく、

二月六日附にて御文下されり、

公方様 大納言様ますく御機嫌よくならせられ、御め
てたく思召りよし、しかれば年頭之御祝儀御申上被成り
ニ付、春井御あげ被成り處ニ

公方様 (清水重好) 萬次郎様 御目見 仰付させられ 上意いた

き、そのうへ御料理下され、誠に有かたき御事に思召り
よし、右の御禮御申上被成

萬次郎様へも御禮御申上被成りとをりよろしく申上まい
らせり、めてたくかしく、

(巻)
「寶曆四年」

松平

薩摩守様

御返事

人々御中

松嶋

岩橋

浦尾

たきつ

さえた

正文在文庫

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將

又以宿次奉書御鷹之鶴拜領之、難有由得其意り、依之爲

御禮以嶋津圖書御樽肴被獻之り、遂披露り處一段之御仕

合り、恐々謹言、

(巻)
「寶曆四年」 閏二月廿三日

西尾 隱岐守 忠尚判

松平右近將監 武元判

本多伯耆守 正珍判

酒井左衛門尉 忠寄判

堀田相摸守 正亮判

松平薩摩守殿

1427 全上

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將

又以宿次奉書、從

公方様御鷹鶴拜領之、難有由得其意り、依之爲御禮以嶋

津圖書御樽肴被獻之、遂披露、處一段之御仕合、恐
々謹言、

(朱) 秋元但馬守
「寶曆四年」 閏二月廿三日 涼朝

松平薩摩守殿

1428 全上

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將
亦正月十二日

竹姫君様被爲 入、節、菊事御懇之蒙

上意、從

公方様 大納言様拜領物被 仰付、從

姫宮様被遣物有之、重疊難有由得其意、紙面趣各一覽
之事、恐々謹言、

(朱) 酒井左衛門尉
「寶曆四年」 閏二月廿三日 忠寄判

松平薩摩守殿

1429 全上

御札令披見、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將

又正月十二日

竹姫君様被爲 入、節、菊事御懇之蒙

上意、從

公方様 大納言様拜領物被 仰付之、從

姫宮様被遣物有之、重疊難有由得其意、紙面趣令承知
外、恐々謹言、

(朱) 秋元但馬守
「寶曆四年」 閏二月廿三日 涼朝判

松平薩摩守殿

1430

(朱) 「近秘野卿大信公御傳」

寶曆四年甲戌閏二月 圓德公上請隨儲嗣朝于江戸、閣老

松平右近將監武元聽之表稱善次郎因前請也、於是五月十

一日從 圓德公發府城、七月二十二日至芝邸、八月四日

立爲世子、更名忠洪稱松平又三郎、亦稟松平武元得命也、

1431

重年公御譜中

扣正文在江戸家老座

私家督以前先妻出生仕、嶋津善次郎儀、家中一門並ニ
差置、去年御暇被下、節、假養子願置、今度參勤之節

召連可申、此段御聞置可被下、以上、

〔實曆四年〕 閏二月廿三日 (島津重年)
御名

(01)

〔堀田相摸守様
御用人
岩瀧五兵衛

右に參上仕五兵衛に内談仕り者、去年御暇之節、御假養子に御願被置り善次郎殿御事、此節御參勤之節御當地に被召列り儀苦ケ間敷哉、御家中に為被差置儀に御座り得者、無御沙汰被召列り者何そ苦ケ間敷儀と存り得共、例格表無之り付、各思召之程誠之御内意に承度り間、御同役中被仰談給度旨申達り處、御實子之儀御座り得者、外之御假養子とハ譯及相替り故、無御沙汰被召列り儀如何可有御座り哉、同役中申談り者難決り間、御内談之趣相摸守様に得と可申上り、左り方より可申遣り間、其節可罷出旨五兵衛方承申り、今日相動り首尾申上り、以上、

三月廿一日 岩下佐次右衛門 (分 縁)

主鈴様

〔堀田相摸守様
御用人
岩瀧五兵衛

右五兵衛より可罷出旨申來り付、罷越り處、一昨日御内談之趣、相摸守様に得と申上り處、御國元に被成御座り段者先達り為被仰出置儀に御座り得者、此節被仰出方可宜段被仰り由、尤外様と表ケ様之先例表有之事り由、五兵衛より承申り、此段首尾申上り、以上、

三月廿三日 岩下佐次右衛門

主鈴様

(03)

〔御届書壹通 久世忠右衛門様

但今度御參府之節善次郎殿御同道被遊り儀に付、右に罷越被仰付越り趣を以委細申演、御用番松平右近將監様に御差出被下度旨申上り處、明朝可差出り間、私共内御用番様御門前に罷出り様こと被仰聞、御書付御請取被置り、此段首尾申上り、以上、

但明朝御用番様御門前ニ者赤松甚右衛門罷越善御座り、
三月廿四日 岩下佐次右衛門 (御 正)

主鈴様

(04)

〔御書付壹通

但今度御參勤之節善次郎殿被召列り儀に付、

右御書付今朝右近將監様(左)に、御先手久世忠右衛門様(右)に被差出外處、被聞召置外旨御承知被成外間、右之段申上外様忠右衛門様被仰聞外、私相勤外首尾申上外、以上、

三月廿五日

赤松甚右衛門

主鈴様」

1432 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

大納言様益御機嫌能被成御座、正月廿六日東叡山

至心院様(家重 兼備 溪氏) 御靈前 御參詣之段被承、恐悦旨尤外、紙面

之趣及言上候、恐々謹言、

(巻) 「實曆四年」 閏二月廿五日 秋元但馬守 涼朝判

松平大隅守殿

1433 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月晦日増上寺

惣御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各

申談及 上聞外、

(巻) 「實曆四年」 閏二月廿六日 酒井左衛門尉 忠寄判

1434 重年公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

大納言様益御機嫌能被成御座、正月廿六日東叡山

至心院様御靈前 御參詣之段被承、恐悦旨尤外、紙面之

趣及言上外、恐々謹言、

(巻) 「實曆四年」 閏二月廿五日 秋元但馬守 涼朝判

松平薩摩守殿

1435 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月晦日増上寺 惣御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

(巻) 「實曆四年」 閏二月廿六日 酒井左衛門尉 忠寄判

松平薩摩守殿

全上

今度

至心院様七回御忌御法事御執行付^由、以使者御香奠被獻
之^由、於東叡山奉納之事^由、右之趣及言上^由、恐々謹言、

(朱)

〔寶曆四年〕

閏二月廿六日

秋元但馬守

涼朝判

松平大隅守殿

重年公御譜中

正文在文庫

今度

至心院様七回御忌御法事御執行付^由、以使者御香奠被獻
之^由、於東叡山奉納之事^由、右之趣及言上^由、恐々謹言、

(卷)

〔寶曆四年〕

閏二月廿六日

秋元但馬守

涼朝判

松平薩摩守殿